
～ 孤高の狼 ～

vf25g

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「孤高の狼」

【Nコード】

N0595X

【作者名】

vf25g

【あらすじ】

いつもの日常を送っていた零は、あることがきっかけで季衣と流琉という少女に出会う。

純真無垢な心を持つ二人と触れ合い、自分以外の存在の為に生きようと思う零。

群雄割拠の時代を二人を護りながら生きていく事になる。

処女作ですのでつたない所があるかもしれませんが暖かい目で見守って下さい。

評価、感想待ってます。

ちよつと遅めの10000ユーク記念 三章までのあらすじ（前書き）

ちよつとあらすじを纏めてみました。

初めての人はこれを最初に見るといいかもしれません。

話が気になったのなら、読んで下さい。

ちよつと遅めの10000ニーク記念 三章までのあらすじ

一章

自分の為に生きていた青年？零はとある事がきっかけで季衣、流琉という少女に出会う。

大切な人たちを守るために零の弟子にしてほしいという二人。

だが、零は二人に強くなるということの覚悟ができていない事を見抜き、二人に覚悟を持つように言う。

五日という期限で二人が出した答えとは……

二章

零は旅の途中に季衣、流琉に武器を持たせることにする。

そして、武器を造るために立ち寄った街で出会った人物とは？

さらに、次の街で出会う英雄の一人に対して零がした対応は……

・

三章

昔の約束を守る為に涼州へと向かった零と少女二人。

零がした約束とは何なのか？

それが三人の人生にどんな影響を与えるのだろうか。

乱世前、最後の平穏。

ちよつと遅めの10000ユーク記念 三章までのあらすじ（後書き）

話が進むにつれて、追加されるかもしれないし、消去するかもしれない。

まあ、そこんところは気分しだいってことで。

ブログ（前書き）

初めての投稿なのでおかしなところが目立つかもしれませんが、読んでみて下さい。

ブローグ

ズチャッ！

あたりにそんな音が響き渡る。いや響くといつても本来は響くような大きな音ではなく、とても小さな音だ。それでも響いたように聞こえるのは余りにもこの場に音というものがないからだろう。

「まったく、死ぬならもうちつときれいに死ねてんだよ、ああ〜
〜、めんどくせ〜。」

およそまともな人間の吐く言葉とは思えない言葉を言っている青年、零はつまらなそうに自らの足元に散らばっている人だった物を見渡すとかすかに動いていたものを掴みあげる。

「なんだ、まだ生き残りがいたのか。」

掴みあげられた盗賊はヒイツ！というとまるで化け物でも見るかのような視線で零を見る。

その視線に気分を害したのか零はムツとした顔を見ると男を男の足が届かない位置まで持ち上げる。

「そんな目で見るなよ、俺はお前達が襲ってきたのをただ返り討ちにしただけだぜ？どう考えてもそっちの自業自得だろうが。」

零の言っていることはもつともなのだが、何も知らない人が見たら確実に零の方が悪人に見える状況のため、いまいち説得力が感じられない。

なにせ、ただ見たままを言うなら無数の死体の中で一人の男が怯え

た男を掴みあげている絵になっているのだから無理もない。

「まっ、んなことはどうでもいいんだ。さっさとお前らが略奪していた物をためこんでいる場所を教えろ。」

零は地面に盗賊を放り投げると、足で胸のあたりを踏みつけながら質問、というよりは命令をする。

だが、盗賊は答えずにただ歯を鳴らして怯えているだけで口を開こうとしない。

普通に考えたら無理もない反応なのだが、零はその反応が気に入らなかったらしく男の左腕に向かって足を振り降ろす。

バキッという音と共に盗賊の絶叫が響き渡る。今度は静かだからではなく、どんな場所だろうと響くであろう音だった。

盗賊は痛みであればそうになるが零がそれを許さない、腕を折る前と同じように足で胸を押さえつけると、言わずともこれが最後のチャンスだと理解できる表情と声色で同じ命令をする。

盗賊は変わらず怯えた表情浮かべているがたどたどしい口調で喋り始める。

「こっ、ここからあそこにみつ、見える森のほうに真っ直ぐ行けば洞窟があるっ、そこにあるっ。頼むっ！見逃してくれっ！」

縋るように跪ずきながら命乞いをする盗賊を見下ろしながら零は小さく笑った。

「おいおいっ、今まで自分がされて無視してきた行動を自分でするのか？それに何の為に案内させないで、今聞き出したと思う？よく考える。」

瞬間、盗賊は全てをさとった。いや、全てというほど複雑なことで

はない。

ただ、自らの命がここで消えるという簡単なこと、ただ、それだけのこと。

だが、人間というものはなまじ他の動物より知能があるために自らが死ぬということすら理解できない。認めることができない。

「うわああああああ！！！！」

盗賊は緩んだ零の足を払いのけて一目散に走り出す。

思わず盗賊に同情してしまう程の何とも形容し難い表情で。

「まっ、そうなるわな。」

零はまるで盗賊が逃げ出す事が分かっていたように小さく呟くと、右手を口に持っていき口笛を吹いた。するとだんだんと蹄の音が聞こえてくる。

目にも止まらない速さで灰色の影が零の横を走り抜けるとそのまま盗賊に向かって突進していく。

そして、

グシャッ！

盗賊が比喻ではなく、潰れる音がした。

盗賊に悲鳴を上げさせる間もなくただの肉塊にしてみせた巨大でそれに見合う2メートルはあろう大剣を右の腹に括り付けた灰色の馬は今度は零の方向にゆっくりと走って行き、じゃれるように零にすり寄る。

「よしよし、よくやったな、牙。」

灰色の毛並を撫でながら自らの愛馬を褒めると牙に跨る。

「じゃあ、向こうの森の方に行ってくれるか？」

森を指差しながら言うどまるで返事をしたかのように鳴き、走り出す。

四、五分走ると洞窟が見つかり零は牙から降りて洞窟の中に入っていく。洞窟の中は四、五十人が入れる広さで布が一面に敷いてあり酒瓶がいくつも転がっている。

「まったく、もうちょっときれいにしておけよ。俺はきれい好きなんだよ。」

そんな、今となつては不可能な注文を言いながら、洞窟の奥にある布が被せてある大きなふくらみの方に歩いていき布をとる。

布の下にはかなりの量の金品と食糧があり、食糧にいたつては三十人程いた盗賊が満腹になるまで食べても十日は平気な量だ。

「もつたいねえことしちまつたかな。」

大量に積まれている食糧を眺めながら頭を？き、まっいいか、と言うと金品を漁りだす。

そして気に入つた物を御機嫌な様子で袋に詰め込んでいく。

「おつ、これなんて高く売れそうだな。いや、こつちもなかなか、んっ？」

零はいかにも古そうな一冊の書物を手に取るとそれをじつと見つめる。

どう見ても値打ち物には見えないただの古い本だ。少なくとも素人

にはそう見える。

だが、そこが逆に引つかかったのか零はしばらく見つめるとそれを袋の中に放り込む。

「まっ、売れなかったら、売れなかった時って事で。」

そう言うともた次々に袋に詰め込み始め、袋がいっぱいになったところで立ち上がり洞窟を出る。

零はあたりをぐるりと見渡すと一つの村を見つけ、少し考えるような仕草をすると閃いた様に手をポンっとうつ。

「次はあそこの村にでもいこうかね。」

そう言うとき零は牙に跨り一言、言ってくれと言い、牙を走りださせる。

「土産もあることだしな。」

土産というのは無論、盗賊達がため込んでいた食糧のことだ。おそらく近くの村から盗ったんだろうと思った零はせっかくだから村に返してやろうと思ったのだ。勿論、ただの善意という訳ではない。零という男はそれほど親切ではない。食糧を渡す代わりに寝床を用意してもらおうと思ったのだ。

その村に自分の人生を大きく変える少女達がいるとは想像もせずに。

プロローグ（後書き）

感想をバンバン下さい。
今後の参考にします。

出会いの前日（前書き）

一応、長ったらしくなく、それでいて内容が薄くならないように頑張ってみました。

何か助言があるなら下さい。

出会いの前日

零が盗賊達と遭遇する一日前。

とある村が盗賊に襲われていた。

「殺せ、殺せ――！！ぶっ殺せ――！！！」

盗賊の頭だと思われる二メートル程の大男が声を張り上げ、その声に応じて盗賊達が村人をさらに殺していく。

村人も抵抗してはいるが、元々村人は戦うのが仕事ではない。何人もの人間を殺してきた戦闘のプロに敵う訳がない。

戦闘のプロと言ったら兵士を連想するかもしれないが今の時代、墮落した下手な兵士などよりも常に実践で鍛えてきた盗賊の方が強いのだ。

これだけで今の漢王朝がどれだけ腐っているのかが分かるというものだろう。

そもそも何でこんなことになったかと言うと、それは三十分程前に遡る。

「それを返せつ――！」

「あつ？」

「やめようよお、季衣。」

季衣と呼ばれたピンク色の少しウェーブの掛かった髪を持った少女が盗賊の頭と思われる男に怒鳴り、それをストレートの水色の髪を持った流琉という少女が止めている。
だが、季衣は止まらない。

「ぼくたちの村にはもう食糧がほとんどないんだっ！それを持っていけたらみんな餓死しちゃうっ！だから・・・それを返せっ
！！」

季衣の言葉に他の村人もそうだったと、続く。

盗賊達は反抗的になった村人にたじろぎながら睨んでいる。

するとしばらく村人の抗議を聞いていた盗賊の頭が一人の村人の前にすたすたと歩いていく。

そして、

ズバッ！！

剣で斬りつけた。

季衣や流琉を含めたすべての村人が何が起こったのか分からないといった様子でピクリとも動かなくなった村人を見つめる。

「やめだ。素直に食糧を渡すんなら命までは盗らないでおいでやろうと思ったが・・・反抗するなら話は別だ。」

盗賊の頭はスウーと息を吸い、そして・・・

「てめえらッ！！二度と抵抗する気が起きないようにしてやれー
！！！！！！」

虐殺の合図が出された。

そしてときは戻る。

「ほらっ、季衣急いでっ！！！」

「流琉……」

流琉が季衣の腕を引いて森の方に逃げようとしている真つ最中なのだが、季衣はまるで芯が抜けてしまったかのようになっていて走ろうとしない。

「流琉っ……ぼくのせいだ……ぼくがあんなこと言ったからっ……」

大粒の涙を流しながら季衣が言うと、流琉も立ち止る。そしてすぐ近くで起きている殺し合い……いや、ただの一方的な虐殺を見る。

最初は抵抗していた村人だったが、徐々に押されてきて今や勝負になっっていなかった。

流琉は次々に殺されていく知った顔を見ながら涙を流す。今まで我慢していたものが季衣の涙で溢れ出したのだろう。だがそれがいけなかった。

立ち止ってしまった二人に接近していた人物がいたのだ。

「へへっ、こんな所にもいやがったのか。」

「「!?!?」」

「俺もこんな餓鬼を殺すのは心が痛むが命令なんだな。」

季衣も流琉も目の前の男から逃げ出そうとするが体が動かない。

引き締めていた神経が解けたことや突然目の前に現れた盗賊への恐怖などが重なって体が動かないようだ。だがそうしているうちにも自分達の人生を終わらせる凶刃は迫ろうとしている。

そしてそのまま季衣と流琉、二人の人生は終わりを迎えるかと思われた。

だが・・・そうはならなかった。

「うおおおおおおおおお!!!」

「ぐわっ!!」

一人の中年の男性が盗賊に突っ込み盗賊はそのまま三メートル程先に飛ばされる。

「とうちゃんっ!?!」

「早く逃げろ、二人共っ!!!」

「父様っ!!」

もう一人の違う流琉の父親と思われる男性が二人に逃げるように促す。

「でも・・・でも・・・」

「早く行けっ！！！！」

父親に怒鳴られ、我を取り戻した流琉は季衣の腕を取り走り出す。

「流琉っ！！とうちゃんがっ！！とうちゃんがっ！！」

十人近い盗賊に囲まれていく二人の父親を見ながら流琉を止めようと季衣は叫ぶ。だが流琉はそれには答えずにただただ走り続ける。小さな滴を流しながら……

翌日

悲しみに暮れた村人達がそこにはいた。

怪我をしている人を動ける人が助け、続々と亡骸を運んでいく。その繰り返しだ。

明るい顔をしている人物は誰一人おらず、皆絶望を顔に浮かべている。その一角に季衣と流琉はいた。

「父様っ……！！」

「ぼくのせいで……ぐすっ……」

季衣と流琉の前に二人の父親の亡骸は置いてあった。

二人は盗賊達が去ってからずっと亡骸の前を離れようとせず、泣き

続けていた。村長や村人が慰めてはいるものの、全く効果は無く。村人もどうしたらいいか分からなくなっていたところで灰色の馬に乗ってその人物は現れた。

「村長と会わせてもらえねえか？」

これが季衣と流琉の零との出会いだった。

出会いの前日（後書き）

・ ・ ・ ・ ・ 一回、家のブレーカーが落ちてデータがとんだ ・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・ 感想下さい ・ ・ ・ ・ ・
・

出会い（前書き）

ここからオリジナル設定爆発させていきたいと思います。

出会い

「村長に会わせてもらえねえか？」

突然灰色の馬に乗ってやってきた零に村人のなんだこいつ？という視線が集まる。だがその村人の視線を無視しているのか気付いてないのか、零は構わずに続ける。

「あれっ？聞こえなかったか……？村長にに会わせて欲しいって言っただが。」

本気でそんなこと言っているように見える男に茶色の髪の方が近寄る。

「悪いが、今、村長はいない。昨日盗賊に殺された者達を供養している。あんたには悪いが今日のところは帰ってくれ。」

いつもなら村に来た客人を歓迎するところなのだが、今は状況が違う。盗賊に食糧を奪われ、村人の半数程の人数を殺されて、絶望のどん底にたたきおとされた直後なのだ。歓迎などできるはずもない。

「何だそうなのか、大量の食糧をやるうとおもっただが、そういうことなら仕方がないな。邪魔したな。」

いきなりとんでも発言をして、そのまま去って行くとする零。この行動は食糧を村人に渡すことが零にとってどっちでもいいことだから、するのだろう。

だが、生憎、村人にとってそれはどうでもいいことどころか命に関わる大切なことだ。そんな発言をしてそのまま行かせてもらえる訳

がない

「あ？なんだよ、いきなり。」

茶色の髪的青年は立ち去ろうとする零の肩を勢いよく掴んでいた。

「なんだよじゃないっ！！お前っ！今、言ったことは本当なのか？
！」

勢いよく零の肩を揺らしながら問い詰める。

「分かったから、いったん離れろって。」

自分の肩を揺らす手を掴み無理やり引きはがす。そうされて初めて気づいたのか青年はすっすまん！と謝る。

「だが、本当なのか？お前は州牧の使者か何かか？だが、今の時代そんなことをする奴がいるとは思えないが……。」

周りの村人がついに俺達の願いが通じたのか！とか神からの助けじやとか言っている。そんな様子を見た零はフーッと一つ溜息をつくと喋り出す。

「残念ながらお偉いさんが心を入れ替えたわけでも神の助けでもねえよ。ってか、神の助けならなんで使者が人間なんだよ。」

呆れたようにそう言つとまた一つ溜息をつく。

「じゃっ、じゃあ食糧ってのは……。」

周りが肩をがつくりと落とす中で茶色の髪の青年は目の前の男の言葉の真相を確かめようとする。その青年を零はじつと見つめる。うっと青年はたじろいでなんだよと視線で言う。それを見た零はふつと軽く笑う。

「いや、偶然大量の食糧を手に入れたから数日間の寢床と交換にやるうと思つてな。」

「偶然、拾つたつて……っ!? ま、まさかお前、それつて盗賊が俺達から奪つていった物のことじゃっ!!」

「ん、多分そうだと思うぜ。よかつたな食糧が返ってくるぜ?」

スウィーと青年の顔から血の気が引いて行つた。おそらく目の前にいる男と共犯と思われてまた盗賊に襲われる未来でも想像したのだろう。まるでこの世の終わりだとも思つてそんな顔をしている。

「ああ、そうそう、盗賊のことなら心配しなくていいぜ。もう誰一人生きぢやいないから。」

えっ……と青年の顔に血の気が戻つていく。

「いつ、今なんて……?」

自分の聞き間違いだと思つたのだろう。何とも言えない表情で聞き直す。

「だから、盗賊はもう全員死んだつて言つたんだよ。」

目を二、三度パチクリさせる。青年だけではなく他の村人も同じ反

応をする。まるでこの世の音がすべてなくなっただんじやないかと勘違いするほどの静寂。

声を発したのは青年だった。

「な、なんで……なんでお前はそんなことが分かるんだ……」

「

「そりゃあ、盗賊の奴らを殺したのは俺だからな。知ってるのは当然だろ？」

「おつ、お前が殺した？何で、どんな理由で……？いや、その前にどうやって殺した？あいつらは何十人もいたんだぞ？」

ただ、事実だけを言われても納得できないのだろう。

無理もない。いままでさんざん苦しめられてきた盗賊がもういない。もうこの世にいない。もう襲われない。もう友や家族を殺されることがない。

平和に暮らせる。

そんなこと突然言われてあっさり信じられる訳がない。証拠を、信じられるだけの証拠を見せて欲しいのだろう。

そう、思った零は一言着いてこいというたとすたと歩きだす。その後ろを急いで青年と動ける者は追っていく。

「ちよつ、ちよつと待てよっ……！」

「いいから、ついてこい。」

それから零は目的の場所に着くまで一言も喋らなかった。

「ここだ。」

青年や季衣、流琉、村人達が連れてこられたのは森を少し離れたなにもない場所だった。

そこにはまだはつきりと人の死体だと分かる無数の肉塊が散らばっていた。

「こいつらだろ？お前らの言ってる盗賊ってのは。」

「確かに、こいつらはあの盗賊だ。」

「うっ・・・」

「大丈夫？流琉。」

あまりの光景に嘔吐する者が続出する。

その中で青年は逆に冷静さを取り戻したのか真っ直ぐと零を見る。

「これを・・・お前が・・・？」

「ああ、それじゃあ質問に答えようか。まず、何で殺したかっていう理由は特にない。」

「理由がない？」

「いや、正確には無かったと言うべきか。俺はこいつらを殺すつもりは無かったが、こいつらが俺を襲ってきたから返り討ちにした。ただそれだけだ。」

「・・・方法は？」

「これはもつと単純だな。ただこいつでぶった斬った。」

言いながら腰に差している剣を指さす。

「こんな奴らの血で俺の大牙を汚すわけにはいかないんでな。」

今度は牙の腹に括り付けている二メートル程の大剣を指さす。

説明が終わると暫しの沈黙が流れる。青年も季衣も流琉も、他の村人も目を閉じて感傷に浸るようになる。そして暫くすると。

「ありがとう。」

青年が礼を言うと次々零に礼を言う。

「おいおい、さっきも言ったが別に俺はお前らを助けようとして盗賊を殺した訳じゃない。そんな畏まって礼なんて言わなくていい。」

次々に礼を言われて零は少し戸惑った様子になる。

「たとえば、おにいちゃんにその気がなくてもぼくたちが助けられたのは変わらないよ。」

「そのですよ。」

「ああ、俺たちはお前に本当に感謝している。」

.....

あまり礼なんて言われたことがないのだろう。零は言葉に詰まる。

「そつ、そんなことよりも此処から森の方に真っ直ぐ行った所に洞窟がある。早く行ったほうがいいんじゃないか？」

そして、話を逸らした。

「それじゃあ俺は、村に帰る。行くぞ牙。」

返事を待たずに零は牙に跨り走っていつてしまう。

「ねえ、流琉。」

「何？季衣。」

「ぼく、決めたことがある。」

「わたしも。」

「多分、ぼくたち同じこと考えてるね。」

「私もそう思う。」

「後で、一緒に行こうか。」

「うん。」

「じゃあ、そういうことで少しの間、寢床を貸してもらつ。」

「ええ、そんなことでいいなら喜んで。」

あのと、零は改めて村長に会い食糧を渡す代わりに数日間寢床を貸してもらつことになった。村長には盗賊を退治してくれたお礼もしたいと言われたが盗賊を殺したのは偶然だからという理由でそれは断っていた。

「じゃあ、俺はもう寝る。」

そう言つと零は立ち上がり村長の家を出ていく。村長は出ていくその背中に向かつてずっと頭を下げていた。

「ふう、今日は疲れたな……。」

零は首をポキポキ鳴らしながら呟く、そこに二つの小さな影がザザツツと現れる。

「んツ？お前らは……。」

二つの小さな影の正体は季衣と流琉だった。

「なんか用か？」

二人は息をスー―スー―と深呼吸すると、一呼吸置いて、

「わたし（ぼく）を弟子にして下さい！……！」

こうして三人の物語は始まった。

出会い（後書き）

また、ミスってデータが消えた・・・俺って・・・

弟子入り（前書き）

二回も文章が飛んでいるので慎重に投稿しました。

どうぞ・・・

弟子入り

「……弟子？」

「うんっ！ばくたちにいちやんの弟子になりたいんだ。」

突然の季衣と流琉の発言を聞いて零は目を細めて聞き返し、それに元気良く答える季衣。

それを見た零は息をふうーと着いて自分の腰ぐらいの身長しかない二人をしっかりと見据える。

「お前達の親が盗賊に殺されたのは何が言いたかったのかは知らないが村長に聞いた。だが、敵である盗賊はもういない。一体何の為だ？」

零の言葉を聞いて思い出したように俯く。自分たちを庇って死んだ、親を思い出しているのだろう。

そして、絞り出すように季衣が口を開く。

「確かに、もうばくたちのお父さんやお母さんを殺した奴らはいない……でも！もしまた、昨日みたいなことが起きたとして、もう何もできないのは嫌なんだっ！！だから、みんなを守るぐらい強くなりい！！」

「お願いしますっ！！私たちを弟子にしてください！！」

自分たちの気持ちを告げ、零の目を真正面から見つめるその目には確かな覚悟が浮かんでいた。

普通の者ならここまで純粋に正しい志を持って弟子入りを懇願され

たら、快く受け入れるだろう。
だが零はあえて、

「だめだ。」

断った。

一言で拒否された季衣と流琉は断られるとは思っていなかったのだろつ、その表情には驚きと戸惑いが浮かべている。

「なつ、何ですか・・・？」

「何で・・・か・・・」

流琉がおずおずと尋ねると、零はすぐには答えず少しの間を開ける。そして改めて季衣と流琉の目を見つめる。

「お前らに人が殺せるか？」

「「?!?!」」

零の言葉に二人とも固まる。何かを言おうと口を動かそうとしてはいるが言葉が出てこない。

「やはり、考えてなかったか・・・そんなんでよく弟子にしてくれなんて言えたな。」

「そ、それは・・・」

零の冷たい言葉に俯いて否定をしようとするが言葉が続かない。そこに零はさらに追い打ちをかける。

「さっきお前はみんなを守りたいと言ったがお前はそれがどういうことかお前達は全く分かっていない。殺す気でくる相手から仲間を守るということはこちらが生き残る為に相手を殺すということだ。お前らに殺すことができるのか？」

「こつ、殺さな「間違っても殺さないで守るなんていうなよ。」っ
!?!?!」

「そんなことを考えながら戦っていたんじゃ守るところかただの足手まといだ。」

凶星を刺され、何も言えなくなる季衣と流琉。来た時の威勢はどこへやら、今ではすっかり小さくなってただ零の言葉を聞くだけになってしまっている。

そんな二人を見て少し声を柔らかくして、言葉を続ける。

「お前らはまだ幼い。普通の家庭で今まで育ってきたお前たちにそのことを自覚しておけとは言わない・・・だが、もし強くなつてその力をどんな形であれ使おうと思うならばしっかりとそのことは覚悟をしておけ。誰かを殺すという覚悟をな・・・」

零の言葉を聞いて季衣と流琉は黙り込んでしまう。何かを言う様子も見られないので零は二人の横をすたすたと通り過ぎていく。そして、二人に声が届くギリギリの距離で立ち止る。

「俺は五日後にここを出る。」

ピクッ

二人の肩が僅かに動く。

「まだ強くなりたい気持ちが変わらないなら。それまでもう一回、俺の所に来い。そのときの言葉しだいでは考えてやる。」

そう、言い残すとその後は自分の寢床になる家に入るまで立ち止る素振りも見せずに歩いていった。

その夜、零は床に敷いた布団の上で仰向けになりながら眠れないでいた。

「（俺が他人に説教とはな……）」

ついさっきの二人の少女とのやり取りに零は少なからず驚いていた。普段なら理由も何もなく、ただ断って終われせるところだったはずの場面を断るところか説教をして、あるうことかチャンスまで与えてしまっていた。

今までも、武を志す者から弟子にしてくれと言われたことは何かあった。

だが、零はその申し出を受け入れたことは一回もなかった。理由は色々あったが、自分が生きるのに邪魔になるからというのが大きいだろう。

それなのに、今までの中で一番役に立ちそうもないまだ、幼い少女二人にチャンスを与えた。零はそのことがよほど疑問に思ったのかずっとそのことに関して考えていた。

「（親を失った二人に同情したとでも言うのか……）」

一つの同情で……という考えが出てきたがそれをすぐに否定する。今まで同情するような人間や街をいくつも見てきてそれらをことごとく見捨ててきたのだ。今更、同情なんてするはずがない。

じゃあ何なんだ、と思う。

同情ではない。なら一体何があの少女達にチャンスを与えるに至らせたのか。考えても考えても最後には分からないという結論に至る。そうやって、何時間も思案していると一つ思い至ることを見つけた。

「（昔のことでも思い出したのか、馬鹿め……今更そんなことを思い出してどうする。」

そう、零が思い至ったのは昔の自分と二人を重ねたという可能性だ。それならば気の迷いで二人に情けをかけてしまっても不思議ではない。ありうることだ。

もつとも、季衣と流琉、この二人と零とでは重ねるといっても、状況も襲ってきた不幸も比べものにならない。

今回、二人が味わった不幸など零にしてみれば日常的に味わっていたものとさして変わらない。

それほど零が今まで歩んできた人生はひどいものだった。

しかし、いくら、度合が違うといっても今のそれしか思い至る節がないため、零はとりあえず理由を小さい頃の自分と二人を重ねた為、今までと違う対応をしたということに落ち着けた。

そして、零はその結論に対してこう思っていた。

「くだらねえ……」

そして、五日が経った。

この五日間零は自分の武器の手入れや牙と遊んだりして過ごしていた。

つまりは旅の休憩として五日を過ごしたのだ。少なくとも周りの者にはそう見えただろう。

普通なら周りの者がせっせと働いているなか何もしていたら文句を言われるだろうが、零は盗賊を退治してくれた英雄として村の者に知られている。少しばかり遊んでいたところで文句を言われるはずもない。

実際は季衣や流琉のことを観察したりもしていたのだが。そんなこんなで迎えた五日目の朝。

二人の少女が零の家を訪ねてきていた。

「少しは考えたようだな。」

零の言葉に季衣と流琉はコク、と頷く。

「聞かせてみる。お前たちの結論を。」

「はい。」

季衣達が弟子になれるかなれないかを決まる瞬間が迫っていた。

弟子入り（後書き）

次で季衣たちが弟子になるかならないかが決まります。

始まり（前書き）

上手くできていると信じて投稿・・・・・・・・・・いつけーーーー！！！！！！

始まり

ガシャンッ！！！！

とある街の貧民街で何かが砕ける音が響く。

その、音は薄汚れた共同住宅のような家の一室から聞こえてきていた。

「てめえっ！！これだけしか稼いでこなかったのかっ！！！」

中年の男の殺気立った怒鳴り声が響く。男の目の前には頭から血を流している少年が一人顔を下に向けて立っている。

少年の顔は前髪に隠れて見えないが、おそらくその顔は悔しさに染まっていることだろう。怒りといってもいいかもしれない。

少年の握りしめた手から床に血が落ちる。そんなことには気づいてもないのだろう、男はさらに怒りのボルテージを上げて怒鳴りつける。

「俺の明日の分の酒はどうすればいいんだ！？おいっ！！！」

ドカツ！！

男のつま先が少年の腹に突き刺さり、そのまま壁に叩きつけられる。口から赤い液体が飛び散り床に染みをつくり、少年は腹を苦しそうに押さえながら耐えるように体を丸くする。

しかしその姿を見た男は手を緩めるどころか少年の背中を何度も蹴り続ける。

ドカツ！！ドカツ！！

部屋からは罵声とあきらかにおかしいなまりのある音が聞こえていくというのに、近くには助けるところか気に留める者もない。思ってもせいぜい、またか、ぐらいにしか考えないだろう。

そう、こんなことはいつものことなのだ。

少年にとっての普通の日常。
いつも通りくそったれの父親に殴られ、蹴られ、死ぬ前に飽きて寝てしまう。

そんな日常。

普通の子供なら耐えられないであろう理不尽な暴力。

少年はそれをずっと何も言わずに耐えていた。

何が少年を支えているのかは本人にしか分からないが……

何かを言っても無駄なのはわかっていたのだろう。少なくとも表面的には一回も立ち向かわなかったのはそういうところが分かっていたからだと思う。

「まったく、明日はもっと稼いで来いよ！」

ようやく蹴るのに飽きたようで自分の寝室へと帰っていく。

「くそったれが……」

少年は起き上がりもせず布団もない冷たい床で目を閉じる。

月明かりが少年を照らしていた。

その光はまるで少年を守っているように見えた……

「さて、聞こうか。お前たちの選択を。」

零の真剣な瞳を落ち着いた目で季衣と流琉は見ていた。

二人の心は自分でも驚くくらいに落ち着いていた。来る前には緊張と不安で忙しかった心臓も今は落ち着きを取り戻している。

そして意を決して二人は口を開く。

「正直、ぼくたちは人を殺す覚悟をしたかということ、まだできてません。」

「人を殺すっていうことはそう数日でできるものじゃないと思うから、簡単に、殺す覚悟ができました、なんて言っちゃいけないと思うんです。」

「・・・そうか・・・それじゃあ、お前らは一体なんの覚悟をしてきた？まさかなんの答えもなしに俺がうんと言うとは思っていないだろう？」

コクンツ、とうなずくと季衣と流琉は言葉を続ける。

「ぼくたちがしてきたのは覚悟じゃなくて決意です。」

「決意？」

「そうです。わたしと季衣はある決意をしました。」

「なんだそれは？何の決意をしてきた？」

零の問いかけに二人は改めて零を真っ直ぐ見つめる。

「守る決意です。」

「守る決意？」

「はい。確かにぼくたちにまだ殺す覚悟はできない。」

季衣はそこで言葉を切って流琉に繋ぐ。

「でも守る決意ならできます。みんなを、大切な人を絶対に守るっていう決意なら……。そのためなら人を殺すこともできます。でも、ただ殺すのと覚悟するのは違うから……。」

流琉も言葉を切る。

「だから、守る決意に基づいて頑張つて、そしていつか、誰かを殺す覚悟もできるぐらいに強くなりたいです。」

「ぼく（わたし）たちを強くしてください。」

これで、言うことは終わったと季衣も流琉も口を閉じ、頭を下げたまま緊張した面持ちで零の言葉を待つ。

短い沈黙が流れる。時間にしたら数分だろうが季衣達にしてみればとてつもなく長い時間だっただろう。

スッ

零の立ち上がる音に季衣と流琉は緊張を高める。

そして、ついに零が喋りだす。

「甘いな。甘すぎる。まだ、人を覚悟することはできない。けど、いつか来るともわからない覚悟のために自分を鍛えろってか……」

・。

自分勝手もいいところだな。」

季衣と流琉は何も言えない。

それは自分でも分かっていたからだ。自分たちが言っていることが自分勝手のわがままだと。

それでも。

それでもこう言うしかなかった。これが二人の純粋な気持ちだったから。

仮に嘘をついて、それで弟子になれたとしても、いつか必ず心の中にある後ろめたさを見抜かれる。それに、人を騙してまで強くなるうとは二人には思えなかった。

もつとも、もし二人がここで平気で嘘をつくような人間だったならそもそもチャンスを与えられることもなかっただろうが。

しかし、いくら純粋に嘘のない気持ちだとしてもそれとこれとは話が別だ。

断られるかもしれない。そうなるかもしれないことは分かっていた。それを覚悟したうえで季衣と流琉は自分たちの素直な気持ちを告げたのだ。

それで断られても後悔はしないから。

「本当に甘い。甘すぎて反吐が出そうだ。」

零の言葉を弟子にはしてもらえないと取った、季衣と流琉は納得していた。

零の言っていることは正しいと、断られて当たり前だと。

それでも、自分たちに決意をさせた目の前の男に感謝していた。

断られはしたが、決意ができたことで一人でも強くなれると。

だが、その予想はいい意味で裏切られる。

「甘い。確かに甘い上に自分勝手だが………。悪くない。」

「「えっ」」

零の予想外の言葉に二人とも間抜けな声を出して顔を上げる。

「俺の言葉を聞いてちゃんと考えて自分で自分がどうするかを考えたのはお前らが初めてだ。」

今までの奴らはどいつもこいつも俺の言葉どつりに覚悟をただの殺せるだの言うだけだったからな。お前らは大したもんだよ。そうだな、いいかもなお前らなら。」

零の言ったことに数秒、季衣と流琉は茫然とする。

「えっ、えっ？それじゃあ……」

「ああ、いいぜ。お前らを弟子にしてやるよ。」

「いいいいやた————！！！！」

「やったねっ！！季衣っ！！！！」

「うんっ！！流琉！！」

無邪気に喜ぶ二人を見た、零はふっと笑う。

「おい、お前らこれから俺の弟子になるんだ。やることあるだろ？」

あつと顔を見合わせると気を付けの姿勢で零の前に並ぶ。

「ぼくの名前は許緒つて言います。真名は季衣です。これからお願いします!!」

「わたしの名前は典韋つて言います。真名は流琉です。よろしくお願いします!!」

元気よく挨拶した二人を見て零は本当にこの二人は純粹だと思った。

「俺は零だ。性も名も字もない。別に零と呼んでもいいが、鍛練中はやめろ。あと、喜ぶのはいいが、俺は甘くないぞ。覚悟しておけ。」

「「はいっ!!!!先生っ!!!!」

こうして零と二人の物語は廻りだす。

始まり（後書き）

違和感なく弟子入りできてましたかね？

次からは季衣と流琉の修行が始まります。

修行初日（前書き）

今回は少し長いです。

飽きてしまわないか心配ですが読んでみて下さい。

修行初日

季衣と流琉が例に弟子入りした次の日の朝、三人は村の近くにある小さな川に来ていた。

「さて、今日からお前たちを鍛えるわけだが、俺はそもそもちゃんとした訓練なんて受けたことがない。」

「えっそんなんですか？先生。」

流琉が意外そうな顔で尋ねる。同じ心境なのか隣で季衣も驚いた顔をしている。

「ああ、だから俺にまともな訓練なんて期待するなよ。それとしばらくは武器を使ったりもしない。」

「えっ、そんなんですか……」

「えーーーー早く戦うための修行がしたいよー。」

そうそうに武器が使つての修行が始まると思っていたらしく流琉は肩を落とし、季衣は不満大有りといった様子の目で零に抗議している。

「しばらくは戦うための基となるからだを鍛える。それと季衣、安心しろ。確かに武器は使わないがたいていの兵士なら素手で倒せるぐらいまでみっちり鍛えてやる。」

みっちりのところをやけに強調するという零に季衣はうっと後ずさる。

「しかし、兄様。ではどういったことをするのでしょうか？」
ジロリ。

「すつ、すみません先生。」

兄様と呼んだ流琉を人睨みして訂正させる。あの弟子入りの後に流琉は兄様、季衣はいちちゃんと呼びたいと言ったためその呼び名に定着した。最初はその呼び名を嫌がっていた零だったが無理に拒否しようとした際に二人が泣きそうになったため、渋々了解した。だが、それでも修行中にはそう呼ぶのは許さず、修行中は先生で落ち着いた。

「そうだな、まずは………隠れる。」

「えつ、隠れるってどういうことですか？」

あまりにも修行とはかけ離れた言葉に二人は目を丸くする。

「言葉の通りだ。お前たちは俺から隠れる。日が真上にきたら終わりだ。本当は夜のほうがいいんだが、流石に夜は獣が出て危ないからな。まだ、やらん。」

ちなみに真昼までは二時間程だ。

「えつと、にいちちゃん。そんなことでいいの？」

拍子抜けした顔で季衣が「それ本当？」という感じで確認すると、零はにやりと笑みを浮かべる。

「季衣。なめてるようだから言っというてやるが、もし俺に捕まったら昼は無しだ。」

!?!?!

途端に季衣の顔が焦り始める。まるでこの世で最も恐ろしい罰ゲームを突き付けられたように。いや、季衣にとってはこの世で最も恐ろしい罰ゲームなのだろう。

「逆に俺から逃げ切ったらお前が満足するまで食わせてやろう。」

一瞬だった。

一瞬で季衣の顔がいかにもやる気満々といった風になる。

「二人とも捕まったら終了、お前たちの負けだ。逆に逃げ切れれば俺がたつぷりと御馳走してやろう。使っている場所は森の中ならどこでもいい。なんなら俺を攻撃してもいい。俺はお前たちが離れるまで動かない。それじゃあ・・・」

零は二人の真剣な顔を確認する。そして、

「始めっ!!!」

ただのかくれんぼでは済まないゲームが始まった。

零は目を閉じて何もせずただ立っていた。二人が十分に離れるまで動くつもりなのだろう。

今回使われた森は盗賊達が使っていた森とは村から逆方向にあり、零と季衣たちがいた川は森を横に裂くようにある。面積は横×縦、

十キロメートル×五キロメートルで五十キロメートルだ。

とてもじゃないが別々に隠れた子供二人を見つけられる広さではない。

だが、零はこの広さの場所を季衣たちの隠れ場所を選んだ。選んだということは見つけられるということだ。

そして、きっかり十分たった瞬間零は目を開けてゆっくりと森の中に足を踏み入れる。

「さて、行くか。」

「はあ、はあ、はあ。」

川から二キロ程離れた気の陰に季衣はいた。

最初こそこの勝負をなめていた季衣だが、今は食事という最高の餌につられた狼になっている。食事を守ろうとする虎でもいいかもしれない。

季衣が最初にとった行動は距離をとることだった。季衣は開始と同時に森を走り続けて、とにかく零から離れた。

だが、森はただの平面の道とは違い当然道などない未開拓の土地だ。足元にある石や木の根っこには油断すれば足元を取られ、木の枝は肌を傷つける。

そんな理由で季衣は十分経ってもそこまで離れられていないというわけだ。

「（でも、にいちゃんも条件は同じはず。）」

そう同じ道を通るということは相手も同じ条件ということだ。
それが、分かっていた季衣は別段焦ってはいなかった。このまま進んで適当な所に隠れれば逃げられるはずだと。

「（ご飯 ご飯）」

もう季衣の意識はまだ見ぬ御馳走へといっていた……

一方そのころ流琉はというと……

「（あつ、動き出した!!）」

零のことを見ていた。

「（季衣が行った方向にいった。なら……）」

流琉とった作戦はとった作戦は一見、理に叶った作戦だがあまりに危険なものだった。

作戦はこうだ。

まず自分には見えて零に見えない位置まで移動する。そこで身を隠し、零を見張る。

そうして零の移動した逆方向に逃げるつもりなのだ。

「（我ながら良い作戦!!）」

本人は自らの作戦を疑っていないが、実際この作戦には多くの危険があった。

まず、零を見張るためにあまり遠くに離れられない。もし零が自分の方向に来たら捕まえられてしまう可能性が高い。距離が開いていないため動けないのだ。動けばそこを見つけられる可能性が高い。つまりは五分五分だったのだ。自分のいる方向に来るか来ないかの五分五分なら最初から季衣の行った方向と逆に行けばいい。

さらにいえば達人にならその見ている視線で気づかれる可能性もある。見張っているのは一流の隠密でもなければ暗殺者でもない、ただの少女だ。まして、流琉は気配も何もなく本当にただ、見ていただけだ。

むしろ、見つかる可能性のほうが高かったようにも思える。見つからなかったのは奇跡のようなものだ。

詰まる所あまりいい作戦とは言えないものだったのだ。

だが、それも過去の話だ。零が自分の方向に来なかった今では最高の作戦になっている。

もう、流琉の勝利は決定したようなものだろう。

「（この、勝負。いたただきです！）」

少なくとも流琉はそう確信していた。

零はというと・・・

「（まあ、いきなり捕まえちゃあ修行にならないからな。）」

完全に流琉に気付いていた。

「（確かに流琉の取った行動は悪くない。だがあれはある程度気配が消せて初めて成立する作戦だ、まだ早い。）

そう、零は流琉をわざと見逃したのだ。だが、その行動は普通に考えたらあまりに無謀だ。本来なら流琉を最初に捕まえてその後じっくりと季衣を見つければ済む簡単なゲームだったのにも関わらず自分で難易度最高の無理ゲーにしてしまったのだ。

見つけるべき対象が全く真逆の方向に逃げてしまったのだから、それも馬鹿でかいフィールドで。

無理だ。

普通ならそう考えるだろう。

だが零は立ち止まる首をポキポキ鳴らし、軽く屈伸する。

そして・・・

ダッ！！

とんでもない速度で森の中へと消えていった。

「~~~~~」

このかくれんぼだというのに鼻歌を歌っているこのピンク色の髪の少女は川から三キロ程の所に位置する高い木の上に隠れていた。いや、鼻歌なんて歌っているもんだから位置はバレバレなのだが。大方まだ来るはずがないと思って油断しているのだろう。

ガサッ

「!?!?」

何か音が聞こえた。まだ季衣がこの位置に来てから五分と経っていない。来るはずが・

・
・
・

「このへんから聞こえたな。」

あった。

「(えっ? えっ!?! にいちゃんっ!?! そんな、まだたいして時間も経っていないのに!?! にいちゃんがずるするとは思えないし・
・ いやでも、そんな早く来れるわけが・
・ ・ いやっ、そんなことはもうどうでもいいやっ!! とりあえず見つかりませんように!」

突然自分がいた木の真下に現れた零に季衣はパニックに落ちいつていた。

懸命に見つからないために動揺を抑え込むが、人間頭では分かっているけどどうにもならないことがある。正直、今の季衣は素人にも見つけられそうなくらいに「ここにいますよーー」みたいな気配を出していた。

しかしそんなことには全く気付いていない季衣はじくじくっつと零を見ている。すると零は右腕を顔の左側までゆっくりと持っていく。その様子を見た季衣は不思議そうに零を凝視する。

「?????」

そして零はその腕を木に打ち付ける。

ドオオオオン！！！！！！！！

轟音と共に木が折れるんじゃないかと思わせる程揺れる。

「うわわっ！」

あまりの揺れに季衣は木から放り出される。そしてそれを零は華麗にキャッチ！・・・はせずに足を引っ掴む。

「よお、馬鹿弟子。」

「ははは・・・」

逆さまに持たれながら苦笑いしかできない季衣であった。

零につかまった季衣は零の背中にしがみつきながら先程の疑問にたいして納得していた。

「（確かにこれならすぐに捕まっちゃうよ・・・）

零は季衣を背負ってるにも関わらず信じられないスピードで森を駆け抜けていく、まるで平坦な道を走っているようにも錯覚するほどスムーズに走るのだ。季衣はしばらく心の中で愚痴を零していた。そうこうしているうちに川を渡り流琉の向かった森に入っていく。

ここまでかかった時間、わずか五分だ、しかも全く息切れしていない。確かに反則的だ。

結局、その後森を走っていた流琉をなんの苦も無く捕まえ、かくれんぼは三十分と掛からずに終わりを迎えた。

そして全く抵抗らしい抵抗もできずに捕まえれた二人はどうしているかというと……

ぐうう~~~~

盛大に腹を鳴らしていた。

かくれんぼ終了後、みっちりと説教された二人は夜になるまで延々と川の端から端までを走らされていた。走った距離でいえば五十キロはくだらないだろう。普通にフルマラソンを超えている。しかし律儀に走るのは子供故の純粹さからか流石というべきだろう。

「どうだ？気分は。」

地面に大の字になっている二人に零は楽しそうに声を掛ける。

「はあ……は……もう……だめ……」

「もう走れません……」

喋るのも辛そうな二人を見て満足そうな顔を浮かべる零は二人を抱えて自分の家へと戻っていく。思わずドS疑惑が浮上しそうだ。

そして、二人を食卓に座らせる。何かと二人が目を開けるとそこにはいかにもおいしそうな料理が所せましと並べられていた。

「につ、にいちゃん！！これって……！！」

「ああ、お前らは確かに負けたがその後の頑張りは認めてやってもいいと思つてな。夜ぐらひは御馳走してやる。」

「いつ、いいのですか・・・？」

控えめな流琉が遠慮するが季衣はもう待ちきれないといった様子だ。

「遠慮はするな。弟子入りの祝いだとしても思えばいい。」

「はっ、はい！」

零の言葉に納得したのか、流琉は季衣と顔を見合わせると大きな声で食事の前のあの言葉を言つと競うように料理を平らげていく。零が意外な料理スキルを披露した瞬間だった。

「意外と根性のある奴らだったな。もっと文句を言つと思つたんだが・・・。」

食事を食べ終え寝てしまった二人を見ながら零は今日の一日を振り返つていた。

普通なら音を上げて逃げ出すほどの修行、それを流琉と季衣は最初こそ渋つていたが始まってみれば文句一つ言わずにやりきつた。

「決意つてのも、本当のようだな。」

強くなるのに一番必要なのは類いまれなる天才以外は根性と努力。そして、絶対に強くなってやるという決意だ。それをまだ子供だというのに既に二人は持っている。

「これなら、本当に何年か鍛えればかなりのものになるかもな。」

最初は自分の身を守るぐらいまでと思っていた零だったが今は違う。本当に仲間をどんな奴らからも守れる程に強くなる可能性を持った二人に楽しい気分になってきさえいる。

「しばらくしごいてやるか・・・」

そして、明日はどんな風にしごいてやるうかと考えながら眠りに落ちて行った。

楽しいと思ったことなどいつ以来かも忘れたまま。

修行初日（後書き）

どうですかね？

なんか俺の中でくれんぼって規模が変わればすごい修行になりそうないメージがあるんですけど。

他にもこんなのいいんじゃない？とかあったら感想下さい。

戦闘訓練（前書き）

特に書くことがない・・・・・・・・・・どつぞ・・・・・・・・

戦闘訓練

喜べお前ら。今日からは戦闘訓練に入る。」

修行初日から二か月の月日が過ぎた。季衣と流琉は二か月間の間零の修行に見事に耐え、今では見違える程の成長を遂げていた。

「やったーーーー！！もうかくれんぼとか鬼ごっことか球遊びとかその他もろもろやなくていいんだーーーー！！」

「もう、魚取りは嫌です・・・・頑張ったかいがありました・・・・」

どう考えても季衣達が口にはしているのは修行ではなく子供の遊びなのだが、それがただの遊びではないことは季衣の満面の笑顔と流琉のこれ以上ないくらいの安心きった顔が証明している。一体どれだけ厳しかったのだろうか・・・・

「ほう、お前達そんなに戦闘訓練がしたったのか。戦闘訓練のほうに辛いと思うんだが・・・・まあ、お前らは努力家だからな。」

瞬間二人の表情が効果音が出そうな程ピシッと固まる。そして恐る恐る季衣が笑顔を浮かべながら零の方を向く。

「ぼつ、ぼく前のままでいいかなあゝゝ」

「わっ私も・・・・・・」

二人の言葉を聞き零は目をパチクリさせるとやがて納得したように頷く。

「そうかそうか、お前らはそんなにあの修行が気に入っていたのかなら、戦闘訓練の合間を縫ってそっちもやるか!」

もちろん本気で言っている訳ではない。そんなことをしたら本当に二人が死にかねない。ただ、二人で遊んでいるだけなのだ。だが、そこは素直な心を持つ代表の二人。零の言葉を間に受け顔が見るうちに青に染まっていく。
そして……

「いや――――――――――」
「――――――――――」

少女の絶叫が朝の森に響き渡った

「まあ、さっきのは冗談だとしてだ。」

暫く季衣と流琉を玩具にして遊んだ零はやつと真面目な話を始めた。もともと季衣も流琉も修行を開始する前からへとへとになってしまっている。まあ、二人をへとへとにした張本人はというところまで忘れてしまったかのように何食わぬ顔で話を話しているが。

「本当にお前らは成長した。最初はまったく勝負にならなかったかくれんぼもちゃんと勝負として成立しているしな。あと、お前たち

に必要なのは技術だ。それさえそろえば実践をしても大丈夫だろう。」

実践。

つまりは人を殺すという事。季衣達はその言葉に気を引き締める。

「お前達もそろそろ覚悟を持てよ。」

二人は深く頷いて答える。もうさっきまでのふざけた雰囲気は零からも二人からも全く感じられない。遊びの時間は終わりということだ。

「さて、それじゃあ始める。まずは二人で俺にかかってこい。」

「えっ、いきなりっ？そんなの無理だよ！！どう戦っていいのか分かんないもんっ！」

「そうですよ先生。最初はどう攻撃したらいいとかそういうことから・・・」

突然のことに動揺する二人、だがそれとは対照的に零は冷静に話す。

「心配するな二人共。戦い方ならもう既にお前らの体の中に入っている。」

「そ、それってどういう意味ですか・・・？」

「考えてもみろ。お前たちはかくれんぼや鬼ごっこ、その他の修行でも俺に勝つために俺を攻撃したり、俺から逃げたりしていただろう。」

あつ、と二人は顔を見合わせる。

「それにどう攻撃したらいいとかそんなこと教えても無意味だ。自分で工夫して攻撃して俺の動きを観察して学習しろ。そして何か聞きたい所があれば俺に質問しろ。そうした方が本の通りにやる、百倍は強くなれる。」

零の説明を聞き二人は覚悟決めたらしく集中力を高めていく。

「じゃあ、いくよ。にいちゃん。」

「いきます。兄様。」

「先生だ。」

零の言葉が終わると同時に二人は一斉に地面を蹴り空中に飛び上がると、零との間合いを詰める。そして拳を勢いよく零の顔面に向かって突き出す。

「遅い。」

！？！？

二人の拳は零に軽く受け止められ、そのまま季衣は木に投げつけられる。加減はしているらしく季衣は大したダメージを負った様子はない。

「うわっ！いてて・・・えっ？」

続いて流琉も後を追う。

「うぎゃっ!」

季衣の顔面に見事に流琉の背中が激突する。

「無闇に飛び上がるな。空中では敵の攻撃を躲すことはできない。
さあ・・・もう一度だ。」

「くそーー、今度こそっ!」

今度はスライディングの要領で零の足を狙う季衣。零はそれをひよ
いつ、とサイドステップで躲す。

「甘いな。」

「まだだっ!やあっ!」

左腕を軸にして体を捻り再び足を狙う。さらにそこに復活した流琉
が、どれだけ跳んだのだろうか、零の頭目掛けて踵を振り下ろして
いた。所謂踵落いわゆるとした。
それに対して零は躲そうとする素振りを見せない。

「（決まったっ!）」「」

同時に二人は思った。しかし、二人の足には手ごたえが感じられ
ない。それもそのはず当たっていないのだから。

「まあまあだ。」

季衣の足は零の足によって押さえつけられ、流琉の踵落としは片手で掴まれていた。そしてさっきの繰り返しだ。
二人はまたも、同じ木に投げつけられる。

「もう一度だ、来い。」

「ま、まだまだー！！！」

「まだですっ！！！」

季衣と流琉が木に投げられる作業は夜になるまで続いた。

「はっ、はっ、」

「ふう、ふう、」

日が完全に消えた頃、季衣と流琉はいつかのかくれんぼの初日の日と同じく大の字で地面に倒れこんでいた。いや、初日だけではなく毎日修行の終わりのには倒れこむことになっていたのだが。そしてお決まりの言葉で零が締める。

「今日はここまでだ。明日に備えるために飯を食って寝るぞ。」

ガバツと二人は二人は起き上がる。いや、起き上がるというよりは飛び上がったといったほうが正しいだろう。そのくらいの勢いで起きあがったのだ。さつきまで殆ど死人のようだった二人のいったいどこにそんな力があるだろうか。

実はこれ、初めてのことでない。初日以降ずっとこうなのだ。理由は後で分かるだろう。

「それじゃあ行くぞ。」

「はい（うん）っ！！」

三人で零の家へと入って行く。するとそこには何時用意したのか豪勢な料理が並べられてあり、季衣と流琉は目に星マークが入るくらい輝かせている。

「いいぞ、食べても。」

二匹の獣が獲物に飛びついた……ように見えた。零の許しと同時に凄スピードで料理を平らげていく。一応説明すると修行初日以来、季衣と流琉は零の料理の虜になってしまっていたのだ。辛い修行に耐えれたのは修行の後の料理という楽しみがあったのは大きいだろう。

「ちゃんと食べておけよ。腹が減ったっていう理由で修行に集中できないんじゃないからな。」

「にいちやんの料理があればへっちゃらだよっ！」

答えながらも季衣は食べるのはやめない。そんな様子を零は微笑を浮かべながら眺める。

「ならいいが。」

「それにしてもいつも何時作ってるんですか？兄様。」

心底不思議そうに尋ねる流琉。それもそのはずだ、一日中一緒にいるのだから作る時間なんてないはずなのだ。この質問も一回目ではないのだが答えはいつも決まってるようだ。

「料理なんてそんなに時間の掛かるものじゃないからな。」

実際はそんな三分クッキングみたいに作れるレベルの料理ではないのだが、本人がそう言っているのだからと流琉もいつもこれ以上追及しない。

「まあ、そんなことはどうでもいい。食ったなら早く寝ろ。」

食べ終わって空になった食器を片づけながら零が言うと、はあ〜と季衣は布団の中に潜り込んでいく。

「では兄様、おやすみなさい。」

一礼して流琉も布団の中に入る。それを見た零は食器を洗うために川まで歩いていった。

その夜、台所では料理を洗う音ではない、何かを作っているような

音が聞こえた。

戦闘訓練（後書き）

なんかサブタイトルに合っていない気が……気のせい、気のせい（汗）

旅立ち（前書き）

難しい・・・もっと良くできるのは分かるのに、その方法が
分からない・・・

旅立ち

これは夢だろうか？少女達が最初に目に映る光景を見て思ったのはそんな言葉だった。知っている顔が逃げ惑いそれを追う醜い男達。その光景を少女は二度見たことがある。一つは今、目の前で。そしてもう一つは、半年前の忌まわしき日に。そして大切な人と出会うことになった記念すべき日でもある。

「なんでこんなことに……………」

そう思いながら立ち尽くす少女達に一人の男が近寄る。それは少女達が先生と尊敬する人物ではなく…………獣の一匹だった。

戦闘訓練が始まってから四ヶ月。零と季衣、流琉が出会ってから実に半年が経った日のこと、そのことだった。

「季衣、流琉。お前達をそろそろ実戦での修行に連れて行く。」

「「えっ・・・」」

「何を驚く。ずいぶん前から覚悟をしておけと言っておいただろう。」

確かに言っていたそれこそ本当に最初の時といえば半年前からだ。寧ろ今まで言わなかったのが遅すぎるくらいだ。季衣と流琉の実力はとくに一般兵士ぐらいの実力なら片手間で倒せるくらいにまでなっている。もっと早くに言い出してもよかったはずだ。それでも半年もの時間を与えたのは零なりの優しさなのだろう。だが、いつまでも先延ばしにするわけにもいかない。だからきりのいい今日に言ったのだろう。

「どうした。やはりいざ人を殺す時がきたら腰が引けるか？」

零の言葉を無言で首を振り季衣と流琉は否定する。

「そうじゃないよにいちゃん。確かにいきなりでびっくりしたけど、覚悟はできてるよ。」

「はい。その時が来たら必ずやって見せます。」

季衣も流琉も弟子入りした日とはまた違う覚悟した顔で答える。

「そうか、なら明日の朝に少し村から離れた盗賊共を殺りに行く。今日は修行はなしだ、ゆっくり休んでおけ。」

そう言い残すと零は森の中へと消えていってしまう。残された二人も零を見送った後、家に向かって歩き出す。

「季衣、実感ある？その・・・明日人を殺すっていう・・・」

流琉の顔は緊張でいつもの表情が作れていない。それを見て季衣は安心させようとしたのだろう、笑顔で答える。

「ないよ、だってまだ殺してないんだから。」

「それもそうだね」

季衣の言葉に緊張して固くなっていた顔を笑わせる。

「今、考えても仕方ないよ。覚悟はできてるんだし今日は休もう、流琉。」

「うん、季衣。」

二人は笑って家の中へと入って行った。

恐らくこのまま明日になり、零と共に盗賊の排除に向かっていたら、戸惑いや恐怖、罪の意識で落ち込むことになっても、次の日にはいつもの明るい二人になって、見事に覚悟を証明していただろう。そう、このまま何もなく明日になっただけ。

だが、神の悪戯か、運命は二人にそんな温い道は与えてくれなかった。

その日の夜。零は森の奥深くにまで来ていた。

「これだけあれば充分か。」

零は片手で担いでいたサンタさん宜しくの無駄に大きい袋を地面に降ろし中身を確認する。中に入っているのは多量の茸や山菜、木の実などだ。何故こんなことをしているかという。

「明日は少しくらい豪華にしてもいいだろう。」

そう、季衣たちの為に食糧を取りに来たのだ。どんな結果であれ明日は二人にとって辛い一日になる。ならせめてと、食事ぐらいは豪華にしてやることにしたのだ。まあ、普段のままで十分過ぎる程豪華なのは豪華なのだが、何よりも食事を楽しみにしている二人だ。それなら豪華なのをさらに豪華にしまおう。と、こういう訳だ。

「帰るか。」

片手にサンタの袋、片手に熊を持ちながら、まるで、子供が店に遊ぶ王の新パックを買いに行つて、まあまあ良いのが出たから切り上げるみたいな口調で言う姿はどっからどう見てもおかしい。しかも今回零は武器を持ってきていない。しかし熊は見事に頭を割られて息絶えている。ここから導き出される答えは、熊を素手で殺した、だ。しかも傷一つ無く。化け物じみている。

そんな人物に育てられた季衣と流琉もやはり化け物じみた強さになつてのことだろう。

「まあ、正直問題ないと思うんだがな。」

実際の所、零はそれほど二人を心配していなかった。二人が強くなつたのは二人を育てた零が一番良くしっているし、二人に覚悟がもうできているのも分かつていた。だからこそ言い出したのだ。そもそも零は二人に何だかんだで甘い。修行の時以外はそれこそ以前では考えられない甘さだ。本人も自覚はしているのだが止める気もなかった。それは零自身が二人との時間を楽しいと思つてしまつてゐるからでもあり、昔から自分が望んでそれでも手に入らなかったものだからだろう。

「ん？何だ、あの光は・・・・・・・・・・」

季衣と流琉の村、自らも何だかんだで半年も居座ることになつた村がある方向から光が見える。何だ？と、零は不思議に思い木の上に登つて目を凝らす。

「あれはつ・・・・・・・・！！」

見えたのは燃え盛る村、顔までは分からないが、逃げ惑う者とそれを追う者。

「くそっ！！！！」

零は木から飛び上がり着地すると、自分が取つた食糧ぬは目もくれずに走り出す。

「間にあつてくれ・・・・・・・・！！」

二人の少女のことを思いながら零は走り続ける。

「ん・・・・・・・・なんだろう・・・・何か外が騒がしいな・・・・・・・・」

布団の中で安眠に浸っていた季衣は外から聞こえる音に目を覚ました。おかしいな？と、季衣は思った。季衣と流琉が生まれたこの村は毎日農業をして食事をして寝る。それだけで満足するような村なのだ。お祭り騒ぎもしなければけんかもしない、そんな穏やかな村。そこが盗賊に狙われる要因の一つだと言えるが、それは今はとりあえずいい。

つまり、家の中にまで聞こえる大きな音など普通、ありえないのだ。
・・・・・・・・

特別な状況以外は。

「流琉、流琉っ！起きてっ！！」

「う~~~~ん・・・・・・・・」

思いつきり寝ぼけた表情で、むくりと流琉は起き上がる。

「どうしたの・・・・？季衣・・・・・・・・」

「何だか外がおかしいんだ。とにかく早く起きてっ！」

季衣は首が取れるんじゃないかと思う程の勢いで流琉の肩を揺する。

「ちよつ、ちよつと季衣っ！！おっ、起きたっ！！起きたからやめてっ！！！」

季衣は流琉の意識が完全に覚醒したことを確認すると揺するのを止めて流琉の腕を引いて扉まで連れて行く。そこからはどう考えても穏便ではない音が聞こえてくる。

「なっ、なんなのこれ・・・？」

「分かんないよ・・・けどなあかよくないことが起きてる気がする。」

「とりあえず、出してみようよ、季衣。」

「うん、そうだね。」

季衣は流琉に促されて扉を開く。そこに映っていたのは半年前にも見た光景。

そして、できればもう二度と見たくない願っていた光景。

その光景を見ないために血反吐が出る程の修行にも耐えた。なのに、そこには見たくない、映ってはいけない光景があった。

「なんでこんなことに・・・。」

目の前の光景を見て愕然とする季衣と流琉。そこに近寄る一つの影。

「こんな所にもいやがったか。餓鬼を殺すのは忍びねえが生かしておいても仕方ねえだろ。もうほとんど殺しちまったからな。ここで死んどけ。」

デジャブ。

季衣と流琉の頭のなかではそれが起きていた。

半年前、同じように盗賊に殺されかけ、その時は自分の無力のせいで親を失った。

だが、今は違う。

今はあの時とは違う。

そう思った瞬間、季衣と流琉の体は動いていた。

バキッ！！

何が起こった！？盗賊は突然体を襲った衝撃を理解せずに宙に浮いた状態でそう思う。そしてそれが、盗賊が最後に考えたことになった。

グサッ！！

男の喉に剣が突き刺さる。剣を持っているのは季衣と流琉だ。

季衣と流琉がとった行動は実に簡単だ。盗賊が剣を振り下ろした瞬間、季衣と流琉は盗賊を蹴り飛ばし、その時盗賊が手放した剣を手に取り突き刺す。ただそれだけ。

ただ、それだけの行動ではあるが、普通ではない。そもそも先に攻撃したのは盗賊だ。それなのに季衣と流琉の攻撃の方が先に相手にあたった。つまり後だしをしたのにもかかわらず、二人の蹴りは余裕で相手の速度を追い越して先に当てたのだ。こんなこと相当な実力差だないと無理だ。つまり、季衣と流琉はそれほど強いのだ。

そんな二人が、怒りに身を任せて暴れたらどうなるか。
考えるまでもないだろう。

村が村人のではない血で染まった。

「はあ・・・はあ・・・どこだ・・・？・・・どこにいるんだ、季衣、流琉・・・！！！」

村に着いた零は息を切らしながらも季衣と流琉を探す。だが、ここにも二人は見つからない。それどころか、人の気配が感じられない。村人も盗賊もどこにもいない。あるのは殺された村人の亡骸だけだ。零は一瞬、最悪のイメージを思い浮かべ、それをすぐに振り払う。

「無事でいてくれ・・・・・・」

そう願いながら村を走り回り、零はそれを見つけた。

「季衣・・・流琉・・・」

そこには血まみれになった木衣と流琉がいた。ただし、自分のではなく盗賊の血で。

「にいちゃん・・・？」

「兄様・・・」

「ああ、俺だ……これは、お前たちが？」

零が周りにある盗賊の死体を見ながら言うと、季衣はどう見ても作り笑いだと分かる笑顔で喋り出す。

「うん……なんかさ……自分が死にそうになった時に、なんだかわけ分かんなくなってる……気づいたらこんなことに……」

「私です……気づいたらたくさんの人を……殺していました……」

そんな今にも壊れそうな笑顔で話す二人を見ていられなくなった零はそつと、本当にそつと、そして力強く抱きしめた。

「すまない。俺が村にいればこんなことにはならなかった。お前たちの覚悟をこんな形で見るようになってしまった……本当にすまない……!!」

零の言葉聞いて我慢できなくなったのだろう、二人の目から溢れるように涙が出てくる。零はそんな二人を胸に引き寄せる。

「うっ……うわああー……!!!!」

その日、零は二人が泣き止むまで抱きしめ続けた。

翌日

季衣と流琉が泣き止んだ後、零は二つの選択肢を二人に出した。一つは違う村まで零に送ってもらい、その村で暮らすというもの。これなら高確率で引き取って貰えるだろう。今の時代でも子供を欲しがる家の一つや二つはあるはずだ。もしいなくても、季衣と流琉なら用心棒として居させてもらえる。零は最初、この選択肢を進めた。そしてもう一つが自分と共に旅をするというものだ。零はこの選択肢は進めなかった。まず、一ヶ所の場所に留まらないため、落ち着いた生活ができない。さらに、まともな仕事はしないため常に命の危険が付き纏う。どう考えても、普通に考えたら前者の方が良いに決まってる。当然だ。

片や安全な村暮らし、片や命の危険が付き纏う旅だ。零と出会う前の季衣と流琉な迷わず前者を選んでいただろう。そう、出会う前なら。

「「にいちゃん（兄様）と一緒に行くっ！」「」」

これが二人の出した答えだった。その答えを予想していたのだろう、零はただ、そうか、と、言って二人に村への別れを済ませとくように言い、村の出口で待っていた。

「本当に行いのか？」

「うんっ！ー！ぼくたちはにいちゃんとずっと一緒にいるよ！ー！」

「これからよろしくお願いします、兄様。」

「そうか、じゃあ行くか。牙っ！！」

主人に呼ばれ森から出てくる牙。基本的に牙は放し飼いなのだが、零に呼ばれると必ず姿を現すから不思議だ。

零は牙に季衣と流琉の二人を乗せ、自分も乗ると牙を走らせる。

「じゃあな。」

誰もいなくなつた村に一言残して。

旅立ち（後書き）

次からは他の恋姫も出ると思います・・・・・・・・多分・・・・・・・・

というか、牙が久しぶり過ぎる。

危うく存在を消してしまうところだった。

二人の武器（前書き）

二章突入です！！

頑張ります！

二人の武器

零達が村を出て一週間のある日。

「どれか気に入った武器はあるか？」

三人は陳留という街の武器屋……ではなくその隣の街の武器屋に来ていた。

「う〜〜ん……流琉はある？」

「私は良いんじゃないかな、と思うものはあるんだけど、これっ！
！っていう物が無い感じかな。季衣は？」

「ぼくもそんな感じ。」

「これだと思う物が無いなら選ばない方が良い。武器っていう物は長い付き合いになる。謂わば相棒みたいな物だ。」

零の言葉を聞き、さらに、唸りを上げながら顔を顰める季衣と流琉。店の品揃えは決して悪い訳ではなく、寧ろ充実していると見えるだろう。店の広さは普通の家の二倍程の広さがあり、一階と二階を遮る天井は無い。一階に当たる階には台が人の通れる程の間隔を開けて並べてあり、その上に剣やら盾が並べてある。壁や天井には剣や盾ではない一風変わった武器が飾られている。

「値段のことなら心配しないでいいんだぞ。金ならそこそこある。」

飾られている物はそれなりの値段をしている為、遠慮しているので

はないかと思つた零はそう言つてみるが、二人は相変わらず難しい顔をしている。遠慮とかではなく、本当にピンとくる物がないのだらう。

そもそも、何故武器屋に来ることになつたかという、それは二日前に遡る。

・
・
・
・
・

その日零達は野宿の為に食糧として熊を狩りに来ていた。夕飯の食糧に熊が選ばれるという事に色々と突っ込みたいところだが、この際それは無視しよう。とりあえず、そういう訳で森に足を運び、見事に狙いの熊を見つける零たちだった。狙われた熊はお気の毒としか言いようがない。

「そつちに逃げたぞっ！季衣！流琉！」

「まっかせてー！ー！！」

「任せて下さいー！」

零に追われて逃げ出した熊に小さい悪魔が二人跳び掛かる。熊はただの子供が二人だと思つたのだらう。迎え撃とうと自慢の爪を構える。

「やああああー！！」

バゴッ！！

見事、木間の頭にヒットする季衣の拳。その余りの衝撃に熊はふらふらと後ずさる。だが、熊も負けてはいない。反撃しようと爪を季衣目掛けて振るう。

「おつとつ！！」

それを紙一重のところでは回避するが、バランスを崩して倒れてしまう。季衣。それを見た熊は勝機と見て、第二撃を繰り出そうと右前足を振り上げる。だが、そんなことをもう一人の悪魔が許すはずもなく。

「はああああ！！！！」

ズドッ！！

流琉の跳び蹴りが熊の腹に炸裂する。季衣のパンチに負けず劣らずの衝撃を腹に受け、倒れこむ熊。そこにさらに追い打ちをかける二人。完全なリンチが始まった。

「どうした？季衣。目を瞑って唸ったりして。」

無事に熊を仕留め、零が調理した料理を三人で食べた後、胡坐をかきながら唸っている季衣を見て不思議に思った零は季衣にそう尋ねていた。

「いや、今日の熊と戦った時に思ったことなんだけど…….
ぼくもそろそろ武器が欲しいなあつて。」

「それは別にいいが、何故急に？」

「うん、今日熊と戦った時にぼく熊に反撃されて体制を崩したじゃない？その時に思ったんだけど、ぼくとか流琉はまだ子供で体が小さいからどうしても相手より間合いが狭い。だから相手に近寄らなくちゃいけない。でもそれだと武器を持っていないぼくたちは相手に反撃された時に躲すしかない。それだと戦いにくいから、武器が欲しいなあ…….と。」

「確かに私もそう思います。勿論、兄様に許して貰えたらですけど…….」

季衣の言葉を聞き少し考える零。

「確かにお前たちにもそろそろ武器を与えるべきだな。今のお前らなら武器に振り回されるといふ事もないだろうし。よし、そうと決まれば少し大米はたぐことになっても武器を買うか。」

「ほんとにつ……！」

「ああ、それじゃあ、当初の目的地だった陳留は後回しにして近くの村で武器を買ってから行くか。こういうのは早い方が良くからな。」

」

「……という訳で、武器屋に来た零達だったのだ。
まあ、武器探しは見ての通り難航している訳だが。」

「何か希望の武器の形とかはないのか？」

「いつまでも悩んでいる季衣と流琉を見兼ねた零は季衣と流琉がいる
コーナーの武器を眺めながら聞いてみる。」

「あるにはあるんだけど、あんまり武器らしくないって言うか……
。」

「流琉はあるのか？」

「はい。私もありますけど、やっぱり季衣と同じで武器じゃあない
んですよね……。」

「あるなら取り敢えず言ってみる。このままじゃあ、拉致が明かな
い。」

少し言いにくそうな素振りを見せながらボソツと呟く二人。

「けん玉……。」

「葉々です……兄様……。」

「けん玉に葉々が……確か、お前らが一番愛用していた玩
具だったか？」

「はい、そうです。昔から使っていた物なら上手く扱えるんじゃないかと思ひまして……」

「ぼくも。」

零はうゝんと手を顎に当て、少し考え込む。

「（確かに、いきなり使い慣れていない剣や槍を使わせるよりはいいか……）

いいかもしれないな、それにしよう。季衣、流琉。」

「えっ、いいのっ!？」

「いいんですか!？兄様!？」

零の予想外のオーケーの言葉に驚く二人。まあ、当然の反応だろう。普通、玩具を武器にしたいなんて言っても怒られるだけで、許して貰えるなんてことはない。

「店主。ここにはない武器を注文して作って貰うことは可能か？」

零が呼びつけるとかなりガタイの良い、親父が商売スマイルを顔に浮かべながら出てくる。

「へえ、できまさら。それで、どういった武器をお求めで？」

店主に尋ねられ、零が季衣と流琉に説明を促すと店主は驚いた顔をしたが、すぐに元の商売スマイルを浮かべて二人の説明を真剣に聞く。

「……と、こんな感じです。できますか？」

説明し終わった流琉ができるかどうかを聞くと店主が顔を下げてプルプルと肩を震わせているのを見て戸惑う。すると店主が突然顔を勢い良く上げる。

「まっかせて下さいっ！！絶対に造つてみせます！！！！いや、造らせて下さい！！！！そんな興味の引かれる武器を聞かされちゃあ、職人魂が騒ぐつてもんでさっ！！！」

どうやら、店主の職人魂に火を点けてしまったらしい。武器屋には武器の作成は他に頼んで売る店と自分で造った武器をそのまま売る店があるが、どうやらこの店は後者だったらしい。

そんな訳で、店主の一週間以内に造つてみせるといふ熱い言葉を聞いた三人は店を出て昼をどこで食べようかと街を歩いていた。

「何か食べたい物はあるか？」

「う〜〜ん、ぼくはラーメンが食べたいな。」

「そうか。流琉は？」

「私もラーメンでいいです。」

「じゃあ、あそこにも入るか。」

零はたまたま目に入ったラーメン屋を指差し、二人を連れて入って行く。陽気な親父の声を聞き、席に座る。季衣と流琉はどれにしようかメニューを眺め、軽く普通の人じゃあ食べられない量を注文する。店主は一応合ってるか確認を取るが、季衣に睨まれたので口を

閉じる。そして、気を取り直して零に注文を取りに来る。

「何にいたしやしょう?」

「そうだな……それじゃあ、この特性メンマラーメンを。」

「畏まりました。」

そう言くとラーメン屋の親父は厨房に入って行く、そして程無くして注文したラーメンが並べられる。季衣たちがすごいスピードでラーメンを食べ始める横で例も自分のラーメンを口にする。

「うっ、上手い……特にこのメンマ………いつたいどうやって作っているんだ……」

零がメンマの余りのおいしさに驚いていると突然店の中に一人の女性が入ってくる。そして、

「よく、分かってらっしゃるっ!?!?!?!」

槍を携えた凜とした女性だった。

二人の武器（後書き）

お分かりになっている人が多いと思いますが、あの人です。

昇り竜との出会い（前書き）

星の登場です！！

星は恋姫の中でもかなり好きなキャラです。

まあ、物語にどの程度絡んでくるかは未定ですが………

どうぞ。

昇り竜との出会い

「よく、分かってらっしゃるっ！！！」

突然、大声で叫びながら店内に入ってきた女性に客の目が集中する。だが、そんな事は露知らずと槍を携えた女性はズカズカと零と季衣のいる席にやって来る。

「いや〜〜お主もなかなかお目が高い。このメンマに目を付けるとは……………」

うんうんと、頷きながらそんなことを言っている女性に周りの客は「またか……………」と思いながら溜息を着きながら視線を外していく。しかし、目の前の女性のことを知らない零は驚いたような、戸惑ったような視線を向ける。そんな零の視線に気づいた女性は失敬失敬と咳払いを一つする。

「これは失礼した。つい、同じメンマ好きに会えたと思うと居ても立ってもいらなくなってしまったな。自己紹介もせずに話し掛けてしまった。」

「いや、それは別にいいが、あんたは？」

「別に俺はメンマ好きではないんだが……………」と思った零だったが、そんなことを言ったらまた話がややこしくなりそうなので黙っておく。

「我が名は趙雲。今は旅人をしている。」

「今は？」

「うむ、私は武人なのだが、我が主に相応しい人物を探す旅をしているのだ。」

背中に背負っている槍を見せながら説明をする趙雲。

「なるほど。その様子だとまだ自分が仕えるに値する人物には出会えていないらしいな。」

零の言葉に一瞬、ポカーンとする趙雲。

「笑わないのですな。普通、この時代に主を探して旅をしているなんて言ったら笑われるものだが……………」

フツと笑う零。そんな零を見て趙雲は益々不思議そうにする。

「自分の力量も分からず生意気に主を選ぶ阿呆と、自分の力量を分かった上で自分に相応しい主を探す武人くらい、見分けはつくさ。」

零の自らの力量を一瞬で見抜いた碧眼に驚いた趙雲だったが、直ぐに顔に笑みを浮かべる。

「ふはははは！！いや、これは失敬。ただのメンマ好きではないとは思っていたがこれ程とは……………」

「そんなことはない。誰だって分かるさ。」

「いや、そんな謙遜することはあるまい。貴方も私と同じ主探す武人かな？」

「何でそう思う?」

「それこそ誰にでも分かるだろう。お主が相当の実力者だということぐらい。」

試すように問い掛ける零に趙雲は別に怒るわけでもなく微笑を浮かべながらそう返す。

「フツ、そうか、これでもそういう雰囲気は隠しているんだがな。」

「本当に強い者というものは同じ者には分かるものなのだよ。」

「確かにな。」

微笑を浮かべながら言う趙雲に零も笑いながら言う。

「さて、質問に答えようか。結論から言うと、俺は武人ではない。ただの旅人だ。」

「ほう……そちらの少女二人は?」

「にゃ?」

趙雲が入って来た瞬間だけ目を向け、直ぐにラーメンに視線を戻して食事を再開させていた季衣はすでに十杯目となっていた丼を机に置くと、趙雲の方を向く。それを見た流琉も八杯目の丼を机に置き、振り向く。

「少女達は彼の妹か?」

「えっ、違うよ！！にいやんは兄弟じゃなくて先生だよっ！！」

「それにしても兄と呼んでいるのだが……………」

手をぶんぶん振りながら否定する季衣に趙雲が的確な突っ込みを入れる。

「私達は、村が盗賊に襲われたところを助けて貰って、それ以来兄様は私達の兄替わりみたいなものです。」

「なるほど……………これは思わぬ武勇伝を聞いてしまった。」

「武勇伝なんてたいしたものじゃあないさ。」

関心したように頷く趙雲にたいしたことじゃあないと茶を飲みながら言う零。そんな零を見て趙雲がからかうような笑みを浮かべる。

「おやおや、またそんなご謙遜を。堂々と自慢すればいいものを。」

「別に謙遜じゃあないさ。俺がこいつらを助けるに至ったのは唯の偶然で、別に助けるつもりはなかった。」

「それでも、お主は目の前でこの子達が殺されそうになっていたら助けただろう？」

「どうだかな、俺はそんなに優しい人間じゃあないぜ。」

そう言う顔と顔を背ける零。そんな礼を見て、くすりと笑うと、趙雲は季衣と流琉を見る。

「（全く、ここにお主の優しさの象徴とも言える少女が居るというのに。）」

そんな事を考えているとは分らない季衣と流琉は首を傾げる。その一点の穢れもない純粋な表情を暫く見ると、スッと立ち上がる趙雲。

「さて、私はこれで失礼しよう。連れがいるものでな、お主たちは暫くこの街にいるのか？」

「いや、俺達は一週間後にはここを出る。あんたと会つのはこれが最後かもな。」

「それは残念。お主の名は？」

「俺は訳あって、真名しかないと名乗れない。すまん。」

「そうか……まあ、何か事情があるのだろう、深くは聞かない。」

「助かる。」

「人には言いたくない事の一つや二つはあるものだ。」

そついう趙雲の器の広さに関心する零。

「それではまた出会えるその日まで去らばだ。」

そつ言い残すと背中を向けながら手を振り出て行く。

「いい人でしたね、兄様。」

趙雲が出て行った出口を見続ける零に流琉が素直な感想を口にする。

「ああ、そうだな。」

質素な答えを返すと、零は机に御代を置いて店を出ていき、その後を急いで季衣と流琉が後を追う。心なしか店を出て行く零の顔は笑っている気がした。

一週間後。

「これですっ！……ご希望通りに仕上げたつもりですが、どうでしょうっ！……！」

武器屋の親父が指定した一週間経ち、零達、三人は再び武器屋に来ていた。

「おおおおお！……すごいよ、おじさんっ！……！」

「私たちが注文した通りになってます！」

床に置かれた鉄製の台の上にはどう考えても子供が扱う大きさではないサイズの武器が置かれている。季衣が注文した武器はけん玉というよりは鉄球だが、注文する際に季衣がそれでも問題ないと言ったため注文通りと言える。季衣の鉄球は直径六十センチの鉄製の球の周りに棘があり、それを鎖で振るう形になっている。流琉の頼んだ葉々はそのまま葉々を大きくしたような形で、普通の葉々と違うのは素材が鉄で出来ていることだろう。

「満足していただけたなら喜ばしい限りです。私も久々の大仕事で楽しかったでさあ。」

「良い腕しているな、店主。また、機械があつたら来るとしよう。その時は宜しく頼む。」

季衣と流琉が軽々と自分の武器を担ぎ上げ零と出て行こうとすると、店主が有難うございますと頭を下げ、それに零が軽く手を振り店を出ていく。

「どうだ、扱えそうか？」

「うん！もう、使ってみたくてうずうずするよ。」

季衣が鎖を弄りながら嬉しそうな顔をする。

「なら、今からでも陳留に出発するか。野宿することになれば、嫌でも使う機会ができるだろう。」

零の提案に嬉しそうな顔でうんうんと何度も頷く季衣と流琉。

「じゃあ、急いで宿に行つて、荷物を纏めてこい。」

「うんっ！！！！」

季衣と流琉は走つて宿に向かつて行つた。

昇り竜との出会い（後書き）

やっと、武器ゲットですね。

遂にあの金髪ドリルの霸王様に会つかもです。

零達が魏の武将になるのかっ！！！！

ご期待下さい。

狼と夏候姉妹の出会い（前書き）

ちょっと、どっつい展開にしようか迷っているこの頃。

どっど。

狼と夏侯姉妹の出会い

場所、陳留の街中。天気、晴れ。

「うわあああ！！！すごーーーーーい！！！！」

「こんな街、来た事ありませんっ！！！！」

季衣と流琉はこれ以上ない程はしゃいでいた。

「あんまりはしゃいで俺と逸れるなよ。」

「分かってるよーーーー！！」

「大丈夫です、兄様ーーーー！！！！」

武器を手に入れた零達一行は数回の野宿を経て陳留の街へと到着し、一日の休息を経て存分に遊び耽っていた。正確にははしゃいでいるのは季衣と流琉だけなのだが、ここは大目に見るところだろう。

（ここまで無邪気に楽しめたら、何か言う気もなくなるな。）

季衣と流琉は着いた当日からテンションマックスの状態で今すぐ街を回りたいと言っていたのだが、生憎着いた時には日が大きく沈み、どの店も暖簾のれんを下げ始めおり、遊ぶには遅すぎる時間帯だった。季衣と流琉はかなり残念そうにしていたが、そこは零がたしなめ、季衣と流琉は明日に備えて早めに寝ることにしたのだ。

そして今日。季衣と流琉はその溜めた体力を存分に使い、楽しんでいるという訳だ。

「にいちちゃん！にいちちゃん！次はあそこのお店に行こうよ！！あそこの焼売美味しそうだよ！！」

「えーーーー！！あそこの麻婆豆腐の方が美味しそうだよつ！！」

言わずもがな、行っている店はどれも飲食店ばかりだが、それでも二人が楽しいならいいかと思う零であった。

「焼売つ！！！！」

「麻婆豆腐つ！！！！」

「落ち着け二人共。別に焼売や麻婆豆腐が逃げる訳ではないんだから順番に行けば良いだろう？どのみち俺はもう食べられないから二人の好きにしたらいい。」

いつの間にかどっちを食べるかで喧嘩を始めていた季衣と流琉の仲裁に入る零。にいちちゃん（兄様）がそういうならと一旦引き下がる季衣と流琉。そんな二人を見て思わず頬を緩ませてしまう零だった。この後どっちに先に行くかでまた言い合いが始まったのは言うまでもないだろう。

そもそも、季衣と流琉がここまでしゃいでいる理由はというと、この街の桁外れの活気にある。前の街も今の時代を考えたらかなり治安が良く、活気に溢れる街だったのだが、この街はさらに桁違いだ。街の門では商人や旅人が忙しく出入りし、街を行き交う人々は皆笑っている。そんな思わず誰もが笑顔になるような街。二人がはしゃぐのも無理はない。

（しかし、二年前に来た時も良い街ではあったが、これほどではな

かったと思うんだが……そういえばこの街を収める領主
 が変わったらしいがそのためか？名前は確か……「早
 く早く……！！！！」）

いつの間にか喧嘩を止めて焼売でも麻婆豆腐でもない甘いお菓子^がが
並んだ甘所に入ろうとしている季衣と流琉に呼ばれて零は考え事止
める。

「まあ、別にどうでもいいことか。」ああ、今行く。」

そう納得し、零は二人の元に歩いて行った。

さて、先程も言ったがこの陳留はとても活氣の良い人の入りも盛んな街だ。人の入りが良いという事はいろんな人間がこの街の噂を聞きつけてやってくるといふ事だ。しかし、残念なことはいろんな人間というのは真つ当な目的でやってくる者だけではない。

「誰か――！――！――！――！――！――！――！――！――！――！――！――！――！盗人だ――！――！――！――！――！――！」

当然、こういう輩もいる。

普通、こういうシチュエーションは颯爽と正義の味方が現れて解決するものなのだが、運が良くてか悪くてか今回はそうならないよう

だ。

「てめえっ！！そこをどけっ！！！」

「あん？」

盗賊の前には悪人ではないが正義の味方とも言えない何とも微妙な青年が一人。しかも何も知らない盗人は避ければいいものをその人物を殴り飛ばそうとしている。勿論そんなことをしようとしている盗人をその人物、零が通す訳もなく。

「ぎゃあっ！！！」

こうなる。盗人は腹を突き上げられ空中を二回転して地面に激突し、呻いている。恐らく適当にあしらうちもりで軽く殴ったのだろう。そうでなければ盗賊の意識がある訳がない。

「んっ？思わずやつちまったが、一体なんだったんだ？」

訂正。本人は無意識に蠅を手でどこかに追いやったぐらいにしか思っていないらしい。

「てっ、てめえ……！！！！よくも……！！！！！」

「んっ？お前誰だ？」

「ふざけてんのかっ！？てめえが殴ったんだろうがっ！！！」

「ああ、お前だったのか。運が悪かったなお前。お前が俺を避けてりゃ別に何もしやしなかったのにぜ、俺。」

ほんとにそうしていただろうなあ、と、うんうん頷いている少女二人は置いておくとして、そんな完全に馬鹿にしているとしか思えないセリフを吐かれ、完全に頭にきている盗人。冷静に考えればここは逃げることに専念するのが賢い選択なのだが、完全にキレている盗人にそんなことを考える頭は残っていない。ここまで計算して言った言葉なら大したものなのだが、零の場合本当に思ったことを言っただけだから質が悪い。

「ふざけんじゃねえー！ー！！！」

零に殴り掛かる盗人。零はそれをめんどくさそうに眺めながら拳が当たる寸前に最小限の動きで躲し、右フックを鳩尾に叩き込む。

「うぐ……ふお……」

あまりの威力に痛がる暇もなく気絶する盗人。やった本人である零は何もなかったように歩き出す。

「行くぞ、季衣、流琉。」

零に呼ばれて後ろを着いて行く二人、周りの野次馬は呆然と見送るしかない。だが、そのまま人混みの中に消えて行くこうとする三人を引き留める人物がいた。

「待て！！その男！！！！」

「ん？何だ？」

そこには長く黒い髪で額を出している鋭い眼つきの長身の女性。そ

の隣には同じくらいの身長で水色の肩に届くぐらいの長さの髪を片目を隠すようにしている知的な雰囲気を纏った女性がいた。

「そこのお前、私達と来い。」

黒髪の女性が突然そんなことを言う。

「はっ？お前ら城に仕えている兵か何かだろ？俺は別に城に呼ばれるようなことは何もしてないぜ。理由は？」

「理由など何でもいい！！とにかく来い！」

「何でもいって……」

「姉者、理由くらい話さなくてはこの者に失礼だ。そんなことでは華琳様に叱られるぞ。」

「しゅ~~~~ら~~~~ん」

水色の髪の恐らく黒髪の女性の妹と思われる女性に注意されると途端に雰囲気を一変させる黒髪の女性。妹には弱いのだろう。

「先程は姉者が失礼した。お主に来てもらいたいのはお主のその腕前を我が主に見せたいからだ。来てはもらえんか？」

「主？確か……そう……悪い、この街の住人じゃないから分らん。」

後ろで黒髪の女性が自分の主を知らないと言われて掴みかかろうとするが、それをなだめるその妹。普通は逆だと思っただが。

「曹操様だ。我が主は優秀な人材を探している。お主ほどの腕なら我が主も気に入るだろう。お主も会ってはみないか？」

「曹操ねえ……季衣と流琉は会ってみたいか？」

零に話を振られて少し考える二人。元々二人は役人や將軍といった、偉い人物が好きではない。今の時代の権力を握っている者に碌な奴がいるとは思えないからだ。だが、ここまでの街の領主というのは興味がある。結局、二人が出した結論は、

「行ってみようよにいちゃん。ここの街の領主なら会ってみたいし。」

「私も会ってみたいです。」

「そうか。という訳だ。会ってやるさその曹操とやらに。」

こうして狼と霸王は会うつことになる。狼が霸王に従うか、従わないかはまた別の話だが。

狼と夏候姉妹の出会い（後書き）

華琳様と零をどうするべきか・・・・・・・・・・一応どっちのパターンも考えているんですけど・・・・・・・・

う〜〜ん

まあ、取り敢えず次で華琳様登場です。

試す霸王挑発する狼（前書き）

話が進まない……………

もっと時間が欲しい。どうぞ。

試す霸王挑発する狼

「ここが城の中かあゝゝゝ」

「初めて入りました・・・」

偶然盗人を捕まえる手伝いをしてしまい城に呼ばれることになった零は城内を姉妹の兵士の後ろを着いていつていた。普通、城の中に入るにはいくつかの手順を踏まなくては入れないのだが、顔パスで入れた所を見るとこの二人は將軍か何かなのだらう。門番は零達を見て驚いた顔をして零達を珍しい物を見るかのようにじろじろと見たが、零が人睨みすると慌てて視線を逸らしていた。零の眼つきは最近は見られなくなっていたが、睨むとそこら辺の盜賊など視線だけで殺せる程に厳しい。余り見られなくなったのは言う必要もないと思うが季衣と流琉のおかげだ。それは喜ばしいことなのか分からないが。

そんなこんなで城の中心のある玉座の間。勘違いするといけないのと言ったおくが、曹操は一国の王ではない。今のところは数居る諸侯の中の有望な人物の一人というだけだ。だが、どう考えても玉座にしか見えない一つの部屋。それは恐らく曹操の自信の表れだらう。小心者ではこんなことは朝廷に喧嘩を売ってるとも取られるのできない。

さて、肝心の曹操はというと玉座には姿を見れない。恐らく執務室にでも行っているんだらう。玉座でも政務は出来るのだが、こんな人が百人は入れるであらう駄々っ広い所では落ち着いて仕事もできそうにない。

「おい、何処にいるんだ？お前らの主人は。」

零がめんどくさそうに水色の髪的女性に尋ねる。当然だろう。そもそも今日は一日遊び呆ける予定だったのだ。それをこんな正直言つて全然楽しくないことになったのだ。だるそうになるのも無理はない。

「恐らく政務に励んでおられると思う。今からお呼びしてくる。それと私は夏侯淵だ。そう呼んでくれ。」

「別に名前なんて教えてもらっても使う機会がないと思うけどなあ。あと、俺は真名しかないので教えられないぜ。呼びたいように呼べ。」

零の真名しかないという言葉に少し驚く夏侯淵。

「真名しかないとは変わっているな……まあ、こちらが真名を教えた訳ではないから構わんが。こちらは私の双子の姉の夏侯惇だ。」

「なつ、秋蘭っ！！勝手に私の名前をこいつに教えるな！！！」

勝手に自己紹介された夏侯惇は夏侯淵えお怒鳴りつける。

「別にいいではないか。成り行きによつては私たちの同志になるかもしれないのだぞ？」

「うっ……そ、それとこれでは話が別だ！！！」

「おや、姉者は共に戦う戦友に名も教えないのか？」

「それは……………」

そんな感じで何故か姉妹喧嘩？を始めた二人に零が「さっさとしてくれないか？」と言い収め、姉妹で玉座の前から出ていく。

「つたく、早くして欲しいもんだ。」

零がうんざりしたように呟き後ろにいる季衣と流琉に視線を向ける。そこには明らかに緊張した様子の少女二人。落ち着かない様子で部屋をキョロキョロと見回し、偶に自分の服を気にしたりしている。そんな二人を見た零は溜息を着くと二人の頭に手を置く。

「別にどうにもならないから落ち着け。そもそも行きたいって言い出したのはお前らだぞ？そんなになるなら何で行きたいなんて言っただんだ？」

「そりゃあ緊張はするけどそれでも会ってみたいって気持ちがあつたっていうか……」

「すみません兄様……」

「別に謝らなくてもいいが、とりあえずもうちょっとしやんとしろ。」

気を付けの姿勢になる季衣と流琉。明らかにこっちの方が不自然な分さっきの方が良い。それを見てもう一回零は深い溜息を着く。それから五分程経ち、そろそろ零が欠伸をし始めていた頃。玉座の扉が開く。入ってきたのは夏侯姉妹と金髪のツインテールでそれにくるくるに巻いている小柄な少女。しかしその見た目とは違い明らかに唯の少女ではないと分かる威圧感を出している。これだけの存在感、威圧感を持つてる人間と会ったら萎縮してしまうのが普通な

のだが、

（こいつが曹操か………思ったよりも小さいな………）

やはり、こんな失礼な事を考えており緊張したり萎縮している様子は一切伺えない。しかし、それに反して零の後ろにいる季頃と流琉は完全に萎縮してしまっている。零の服の裾を掴んでいるのがその証拠だ。偉い人物に会うというのに慣れていないのだろう。

そんな、三人の反応を見た曹操が口を開く。

「貴方が凄腕の男？」

「ああそつだ。」

普通凄腕の、とか言われたら謙遜するものなのだが、ノータイムで肯定する目の前の男に驚き曹操は少し驚いた様な顔をし、直ぐに微笑を浮かべた余裕の見て取れる顔に戻す。

「よつぽど自身があるみたいね。楽しみだわ。」

「楽しみ？何かやらせるつもりなのか？」

「ええ、貴方の実力を私は直に見てみたいから、少し私の部下と戦ってもらつわ。」

曹操が言つと零は露骨に嫌そうな顔をする。

「な、何か不満が……？」

多少余裕の表情を崩しながらそれでも笑顔を浮かべながら尋ねる。

「ああ、不満大有りだ。何で俺がこんな所に連れてこられた挙句に雑魚の相手なんかしなくちゃならねえんだ。」

零の言葉にその場が凍りついた。特に曹操は何を言われたか分からないという顔をしている。目の前にいる男は自分の提案を断ったばかりか自分の部下を雑魚と言ったのだ。そんなことを今まで高い身分の曹操が言われた事がある訳がない。

だんだんと落ち着きを取り戻していく曹操の思考。それと同時に湧き上がる怒り。目の前では少女二人がおろおろして「まずいですよお」と言ったり、自分が最も信頼を置く夏侯惇と夏侯淵が撤回するように言っているがもう遅い。曹操は夏侯惇と夏侯淵を押しつけて零の前に立つ。

「雑魚とはどういう意味かしら？」

静かな一言だったが、その言葉には怒気が含んでるのはこの場に
いる全員に分かった。

「ちょっと言い方が悪かったかもしれないな。俺から見たら雑魚の
兵士の相手を何で俺がしなくちゃあならないんだ。お前の部下で一
番強い奴を呼んで来い。」

「言うわね………春蘭っ！！！」

「はっ、はい。」

「貴方がこの男と戦いなさい。」

夏侯惇と夏侯淵は驚いて曹操に考え直すように言う。仮にも自分の

持っている兵士の中で最強の人間を武人でもない人間と戦わせるなんてことをしたら大怪我をさせてしまう。勿論、怪我をさせないようには手加減することも出来るが、今の曹操は叩きのめせというだろう。そうなたら最悪まともに動けない体にしてしまうかおもしろい。

そう二人は悪魔でも零の身を案じそう思ったのだが、それが癪に障ったのか零がさらに火に油を注ぐ。

「おい、俺の心配をしてる暇があるならさっさと準備しろ。俺はさっさと終わらせて戻りたいんだ。」

ピキッ

そんな音が聞こえた気がした。

「貴様ーーーー！！この私を馬鹿にするかっ！！やれるものならやってみろっ！！！！」

今にも襲い掛からんといった様子で激怒する夏侯惇。

「言われなくてもそうするさ。」

そついうと夏侯惇はさらに怒りを増して部屋を出ていく。それに零も続きその後ろを曹操、夏侯淵、季衣、流琉が着いていく。

（どうしたんだろうにいちゃん・・・・？）

（何だかいつもの兄様じゃない・・・・？）

季衣と流琉は心配もしていたが零の態度に疑問も持っていた。一見いつも通りに見える零の言動だが、いつもの零とは明らかに違う。

（いつものにいちやんは誰かを挑発したりしない・・・）

（それに何だか怒ってるというか、あの人達を敵視しているような・・・）

零と出会ってからずっと間一緒にいた季衣と流琉だ。零の行動パターンや性格はそれなりに分かっている。分かっているからこそいつもと違う零に言いようのない不安を覚えるのだろう。

と、考え事をしている内に広い庭のような所に出る。ここで戦うのだろう。

「ここでやるのか。」

「何か不満でも？」

「いや、何も。」

後に魏武の大剣と謳われる夏侯惇と一匹の狼の戦いが始まるうとしていた。

試す霸王挑発する狼（後書き）

次は久々の戦闘パートですね。

戦闘パートは難しいですが、頑張ります。

狼の実力（前書き）

戦闘描写、やはり難しい……何かアドバイスがある人は下
さい。

どうぞ。

狼の実力

冷たい床。

そこが少年の居場所だった。いつも目を覚まし、血反吐を吐く程の労働で僅かな金を稼ぎ、実の親に憂さ晴らしで殴られ、傷ついた体を休める為にいつも目を閉じる所。いつも暖かい寝台の上で起き、体を動かし、学問に勤しみ、疲れた体を柔らかい布団で休める人間には想像もできないだろうが、それが少年の毎日だった。そして、今日も少年は目を覚ます。

「朝か・・・・・・・・・・」

まだ太陽も姿を現していない時間帯を朝と呼べるものなのかは疑問を持つが、少年は毎日必ずその言葉を口にした。自分が気絶で意識を失ったのか、それとも死んでしまったのかも分からない少年にとっては自分が生きて今日を始められたという事に対する確認なのかもしれない。これだけでも普通の人間にとっては普通の事が少年にとっては普通ではないことは分かって貰えただろう。こんな普通ではない少年を知ったら同情する人もいるかもしれない。

だが、普通というものは他人が決めるものではない。普通とは決められた線がある訳ではなくその人物個人が決めるものだ。これは何も普通に限られたものではない。

簡単、難しい、楽しい、つまらない、気持ち良い、気持ち悪い、痛い、痛くない、可愛い、綺麗、美しい、醜い、汚い、綺麗、強い、弱い、幸せ、不幸。

数え上げれば切りがないが、つまり全ての感情に決まった線などないのだ。周りが見れば汚い物も本人から見れば綺麗かもしれないし、本人にとっては気持ち悪い物が他の人間からとっては気持ち良いかもしれない。

自分の事を理解できるのは自分だけ。

そう考えていた少年は誰かに同情されるのを最も嫌った。もし、本当に理解する気もない綺麗で最も汚い励ましの言葉なんて掛けてくる奴がいたらその場で殺す程だ。自己満足の為に掛けられた言葉程汚いものもない。そんなものは他人を使って自分を綺麗に見せようとしているだけなんだから。言葉だけではなく行動で実際に助けてくれる人間などいるわけもないのだから。

「行くか……」

少年は身支度も着替えもすることなく外に出ていく。ちなみに来ている服は服と呼べる物なのかも怪しい。いや、元々は服だったのだろうが、所々にある縫い合わせた跡や使い込んでいる証拠の擦れて今に破れそうな傷少年の仕事場であろう大量の綺麗に長方形の形で揃えられた岩が並べられた場所に着く。

そでただの上下揃ったボロ布にしか見えない。そんな服で暖かい訳もなく、身を切るよう冷たさの風は容赦なく少年の肌に襲いかかる。しかし少年は慣れているのか、特に寒がったりする様子は見られない。そして、そのまま平然とここには既に数人の人間がせつせと岩を運んでおり、少年もすぐに加わる。周りに見えるのは屈強そうな男達だけでどう見ても少年はその場で浮いている。だが、見た目に反してやっている仕事の内容は引けをとっていない。多少辛そうにしてはいるが、他の男達と同じ作業スピードで次々に重さ五十キロはある岩を運んでいく。

そして一度も休むことなく迎えた夜。働いていた人間はその日の給料を受け取っていた。勿論それは少年も例外ではなく、精も根も尽き果てた男たちの列の中に混じっている。

「次、三十六番っ!!」

監督らしき人物の声が少年の番を告げる。

少年は男の前に出ると袋で包んでもいないそのままの金を貰う。そして、金の数を確認すると兵士の顔を睨みつける。だが、兵士はにやにやと汚い笑顔を浮かべるだけ、それを見た少年はチツと舌打ちをしてさっさと列から抜けていく。

（まったく、市民の平和を守る城勤めの兵士が笑わせるぜ。こんな餓鬼からも金をむしり取るんだから。結局偉い奴なんてのはみんなそうだな。下の奴らを甚振ることばかり考えて、守るつもりなんて欠片もありゃあしねえ。）

少年は偉い人間、人の上に立っている人間が好きではなかった。人の上に立っている人間なんてのは綺麗な言葉だけ並べて実際は下の人間を食い物にしている奴ばかりだ。もしくは何も知らずに人の苦勞の上にのうと座っている奴。そう決めつけていた。実際に九割九分そんな人間だろう。

（助けてくれる奴なんていない。守ってくれる奴なんていない。自分の身は自分で守るしかない。この世界がそうできているんだってんなら……………俺はそれに従うだけだ。）

そして少年は自分の居場所へと向かう。新たな居場所を手に入れるために、今は耐えるしかない、一つの決意を胸に抱きながら。

「さあ、掛かってこいよ。」

剣も抜いていない状態でそう言う零。その言葉に夏侯惇は零を睨みつける。

「貴様……ふざけるのもいい加減にしろ。剣も抜いていない者をこの私に斬れというのか？」

「剣を抜いていないと戦えないか？」

「当たり前だ！！丸腰の人間に斬り掛かれるかつ！！！」

剣で空を横に切り裂いて叫ぶ。その姿を見た零は苦笑する。

「甘いな。ただただ、自分の武を磨き続けた者の言葉だ。だが、そうしない戦えないというなら抜いてやるよ。」

零は腰に下げていた剣を抜き構える。

「じゃあ今度こそだ。掛かってこい。」

「はあああああああああ！！！！！！！！！！」

夏侯惇が強く地面を蹴り一步で三メートル程の距離を詰め、その勢いのまま渾身の一撃を振り下ろす。

（終わったわね。）（終わったな。）

曹操と夏侯淵はそう思った。夏侯惇の一撃の威力は自分たちが良く知っている。大抵の人間は反応することも出来ずに真つ二つにされるし、もし運良く剣を滑り込ませることができても大木すら両断する一撃を受け止まられる訳がない。運が悪ければ死んでいるだろう。そう思った。

・・・・・・・・・・

曹操と夏侯淵は

ガキイイン！！！！！！

甲高い金属音が響く。

一見当然の事のように思えるがそれは違う。曹操達の予想通りに剣が折られたならこんな音は響かない。つまり、受け止めたということだ。

「どうした？こんなもんか、お前の力は。」

「っ！？！？！？！？」

零は顔色一つ動かさずに夏侯惇の渾身の一撃を受け止めると振り払うように夏侯惇を弾き飛ばす。

「これが、全力か？だとしたら拍子抜けだな。この程度の奴が最強の部下とは。もし本気じゃないなら遠慮はいらないぞ？本気で来い。」

「なっ、なめるな————！！！！！！」

再び距離を詰め、今度は多角的な攻撃を繰り返す。並みの武将なら

数合持たずに斬られるであろう連撃。だが、それをも零は平然と受け流す。

「なっ、何が起きているの……？」

「姉者が……こんな……」

曹操と夏侯淵は信じられないという顔で呆然と目の前の光景を見つめる。無理もないだろう、今まで戦闘に置いては絶対の信頼を置いてきた人物が目の前でまるで子供扱いにされているのだから。

「貴方達。あの男は一体何者なの……？」

曹操は目の前の男が連れていた二人の少女に問いかける。その姿にさっきのような威圧感はなく、代わりに戸惑いが見て取れた。

「私たちも兄様のことは詳しく知らないんです。私たちは本当の兄弟じゃありませんから。」

「ただ、分かっているのはにちゃんめちゃくちゃ強くて分かりにくいけどとても優しいってことだけだよ。」

「私たちはとんでもない男を見つけてしまったのかもしれないわね……」

そう呟くと視線を零と夏侯惇に戻す。そこには今にもやられそうな夏侯惇がいた。

「ぐはあっ……！」

零の剣を受け止められなくなった夏侯惇は弾き飛ばされ、地面を転がる。そして零の剣が目の前に突き付けられる。

「所詮はこんな程度だ。強くなくても死ななかつた人間が強くならなくては死んでしまっていた人間に勝てるわけがない。」

「それは一体どういう………?」

「知らなくていいさ。お前らには関係ない話だ。」

「……………」

零は黙り込む夏侯惇を数秒眺めるように見ると、やがて興味を失くしたように剣を腰に戻し歩き出す。

「行くぞ。季衣、流琉。俺は曹操に仕える気はない。こんな部下しか持てない奴が大成を成すとは思えないからな。」

そう言つて去つて行こうとする零。その後を季衣と流琉が追おうとするが立ち止る。どうしたのかと零は季衣達のいる方に振り返る。そこには再び剣を構えている夏侯惇がいた。

「まだ、やるつもりか? お前じゃあ何度やつても俺には勝てねえぞ。」

「確かにお前は強い………現状、確かにお前の方が私よりも強いだろう………だがっ!! 私のでいで華琳様が侮辱されたあつては引くわけにはいかんっ!!!!!!」

そこには圧倒的な實力差を見せられた絶望した目ではなく主への忠

誠心が見えた。零はその夏侯惇を驚いた顔で見ると片方のみ口元を上げる。

「少しお前を甘く見過ぎてたみたいだな．．．．．本気で相手してやるよ．．．．．牙っ！！！！」

零が叫ぶと何時の間に城内の中に入ったのか庭の木の中から牙が跳び出し零の横に並ぶ。それを見た曹操と夏侯淵は驚く。馬が突然現れたことにはない。その馬が身に付けている長さは二メートルを超えるだろう大剣にだ。

（あんな物をどうするつもり．．．．．？）

そんな疑問は一秒で解決される。零が片手でそれを引き抜いたのだから。

「なっ．．．馬鹿な．．．あれほど巨大な剣を片手で．．．．．
・なあ、あの男はいつもあんな物を扱っているのか？」

「う、ううん．．．．．ぼくたちもあれを使うところは初めて見るよ．．．．．」

「初めて見ます．．．．．」

「そうか．．．．．」

まるで未知の物を見るように三人は零を見つめる。

「久しぶりだな．．．．．大牙使うのは．．．．．本気でやるからな？」

「望むところだ。」

「じゃあ、行くぜ。」

零は片手に大牙を持ったままメートル程跳び上がり夏侯惇に向かつて振り下ろす。本能が夏侯惇に避けるとサイレンを鳴らす。この一撃を受けてはいけなないと。だが、夏侯惇は。

「（避ける訳にはいかんっ！！ここで避けては華琳様にも本氣を見せてくれたこいつにも会わせる顔がない！！！！）はああああああああああ！！！！！！！！！！」

夏候惇は渾身の一撃を迫りくる大剣い叩きつける。ガキイイイン！
！！！！と音とが響く。そう響いたということは、折られていないと
いうことだ。

「大したもんだな．．．．．」

零が振り下ろした所には大きな亀裂があり、夏候惇の姿はない。

「まさか剣の軌道を変えられるとはな……」

夏候惇は亀裂から数メートル離れた所に俯せで転がっていた。その体は赤く染まつてはいない。零はフツと笑うと季衣と流琉を呼び今度こそ立ち去って行く。

「そいつは強くなるぜ。俺が保障する。それとさっきの言葉は取り消す。こんな奴が忠誠を誓うお前なら何かでつかい事を成せるかもな。俺はあんたには従わねえが少しは認めてやるよ。」

零はそう言つと二人と牙を連れて城を出ていった。残された曹操は満足そうに気絶している自らの部下を見つめ笑った。

「フっ、はははっ!!」

「華琳様？」

どうしたのかと夏侯淵は思う。自分の自慢の部下完膚無きまでに叩きのめされたというのに笑うなんて分らないという顔だ。

「おもしろいじゃない……次、会うときはこうはいかないわよ。」

ああ、と夏侯淵は思う。

（これでこそわが主。）

「秋蘭っ!!次は同じようにはさせないわよっ!!」

「はっ!!」

こうして霸王はさらなる勢いをつけてその覇道を走り出す。いつかまた狼に会う日の為に。

狼の実力（後書き）

霸王ルートはやめる形でいきました。なんかよくある展開過ぎると思ったので。

あと今の春蘭は原作開始時よりも弱いです。零はかなり強い設定ですが、チートではありません。

これからの展開は次で分かりますと思います。

懐かしの地と決意（前書き）

宿題よりも先に続きを書いてしまつ今日この頃。

懐かしの地と決意

夏侯惇との戦いが終わって一日、零、季衣、流琉は陳留の街から離れた所を走る馬車に乗っていた。

陳留を治めている曹操とあんなことがあった後に留まる訳にもいかないということだ。そのことが分かっていた季衣と流琉も特に反対はしなかった。元々の原因は自分たちが曹操に会いたいと言ったからだ。という訳で陳留を出ることにしたのはいいが、そこで問題になるのがどこに向かうかだ。適当に近い街に行ってもいいのだが、それではあまり面白みがない。せっかく旅をしているのなら遠くの地にも行ってみた方が得だ。それに何より季衣と流琉、この二人は今までずっと村に居たため外の世界ほとんど知らない。ならば今、経緯はどうであれ、どこにでも行ける状況にいるのだから連れてつてやろう。

そう思った零はここから遠く離れた涼州に連れて行くことにした。理由は零が昔涼州に行った時にとても良い印象を持ったからだ。

特別活気溢れる街という訳ではないが、とても暖かく、親切な人間が多い街。それが零の涼州の印象だった。何も長旅をして廃れた街に行くことはない。行くんだっただけに良い所だと分かっている場所が良い。零にそのこと話された季衣と流琉も特に不満もなく賛成した。

そして大量の食糧と荷車を買った陳留を出発して今に至るという訳だ。

（まあ、涼州にはちょっとした思い出みたいなものあるしな・・・）

どこか遠くを見るような目で馬車の外を眺めている零は今まで見せたことのない顔をしていた。その事に気づいた季衣は「どうかしたの」と話し掛ける。

「・・・・・・・・何がだ？」

「いや・・・・・・・・やっぱりなんでもないや。」

「そうか？暇なら涼州がどいう所か話してやろうか？」

自分では気付いていなかったらしい零は構ってやろうか？みたいな感じで季衣の方を向く。

「ぼくそんな子供じゃないよっ！！！」

「何言つてんだ。季衣はまだ子供だろ。」

「でもそんな暇だからって駄々構って欲しいなんて思っ程子供じゃないよっ！！！」

「どっちにしても俺からしたら子供だ。」

「そりやにいちゃんからしたら子供かもしれないけど・・・・・・・・」

「

言い返す気がなくなったのか、言っても無駄だと分かったのか季衣は俯いてなんかぶつぶつ言いだす。

「そう言えば兄様は何歳なのですか？」

なんとなく気になったのか流琉は体育座りの格好で聞いてみる。季衣も気になったのか、顔を上げて零の言葉を待っている。

「言ってなかったか？三十四歳だ。」

ドテッ。

ずっこけた。本当に漫画みたいな勢いでずっこけた。立っていた季衣は別に足を滑らせた訳でもないのに前のめりに倒れ、流琉は体育座りの姿勢を維持しながら盛大に頭をぶつけた。そんな二人を見て零はずっこけた理由が分からないと言う顔をしている。

「嘘だっ！！！」

「嘘ですっ！！！」

季衣と流琉はずっこけた時と勝るとも劣らない速さで飛び起き零に詰め寄る。季衣たちが驚くのも信じられないのも無理はない。零の見た目はどうみても三十超えたおっさんには見えない。さらさらとした白髪に赤い目。引き締まった肉体。整った知的な雰囲気を与える顔。誰が見てもいつて二十代前半にしか見えない。信じるという方が無理だ。

「嘘じゃない。俺は少し童顔なんだ。」

「そっいつ問題じゃないっ！！」

「そもそも兄様は童顔じゃありませんっ！！」

「……全く。まあ、別に信じて貰わなくてもいいか。」

全く信じようとしな季衣と流琉に零は溜息を着いて別に無理に信じて貰おうともせずに話を切り上げる。

（ぐっ……）

（なんか負けたような気が……）

涼州に着くまでの道のりを零の言った年齢が本当なのか嘘なのかで悩むことになる二人だった。

陳留を出て二週間。ようやく馬車の中で決めた目的地である涼州の刺史が住む最も大きい街に着き、三人はまずは宿を取り、体を休めることにした。何で一番広い街に最初に行ったのかというと、零がここに行きたがったからだ。何でも昔すんでいたとらしい。そして次の日の朝。

季衣と流琉は陳留の時のようにテンションマックスで遊び回って……はおらず、落ち着いた様子で街を回っていた。それと一つのも零が着く前の馬車の中で暫くはここを拠点にすると言っていたからだ。つまり、長い間住むことに場所を早い内に回ってしまったのは楽しみが早くに無くなってしまふ、という訳だ。

「とても良い所ですね、兄様。」

不意にポツリと呟く流琉。

「なんでそう思う？」

「なんていうか……陳留の活気ある感じとは違うけど、とても暖かいつていうか。」

「ぼくもそう思う。」

「そうだな。俺も昔からここは落ち着く……」

零は懐かしむように辺りの見回す。周りからは騒がしくはないが、とても明るい笑い声が聞こえる。そして住んでいる住人も皆穏やかな表情をしている。空気がとても心地よい。村がどんな空気になるかはそこを治めている人物によって決まる。陳留が曹操の自信や存在感に影響を受けてとても活気溢れる街になったようにだ。逆に治めている人間が民の事を気にも留めないような卑劣な人間だったならば、そこに住む人間も暖かさなどはかけ離れた人間になるだろう。つまり涼州の暖かさはこの刺史の暖かさの表れだと言う事だ。勿論この街が特別良いという可能性は捨てきれないが。

「以前、来たことがあるのですか？」

「ああ、昔、な……」

何があつたんだろう、と思う。だが、それを詮索するのは野暮だと考えた季衣と流琉はゆっくりと歩く零の後ろを着いていく。

そうして一時間程歩き町の中央通りのような所に出る。一応説明しておくがこの街はとてつもなく広い。州の刺史が住んでいるというだけあって、その広さは陳留や武器を手に入れた街とは比べ物にならない。零が宿を取った場所は街に入ってから十分程歩いた所であり、別に街の中央からそんなに遠い所ではないのだが、それでもゆ

つくり歩いたとはいえ一時間も掛かった。これだけで街の広さが分かるだろう。そして目の前には他の建物から明らかに浮いている馬鹿でかい城。どうやらこの街は城を街の中心に置いているらしい。

「すごいね～～～にいちちゃん。」

「今までの城の二倍はある……」

季衣と流琉は城のあまりの大きさに唖然として口を開いている。零は特に驚いた様子もなく城を眺めている。

（変わらないな……）

零は昔の記憶を思い出しながらそう思う。そして同時に他のことも考える。

（俺は……あの頃に比べてかなり変わったな……子供を二人も抱え込んで実質親の真似事をしているんだからな。これも昔とは違って生きること余裕ができたからか……いや、それもあるがそれが本当の理由じゃないな。何故か正しい、これは良い事だっと思うものになったんだ。何でそんな事を思ったのかは分からないが……）

これまでの人生を自分の事だけを考えて生きてきた。そうしなかったら死んでしまったから。だからそうしてきた。いろんな人間を見捨ててきた。勿論生まれた時からそんな風に考えていた訳ではない。だが、生きていく内に他人の事など考えなくなっていたのだ。

……

そんな零を誰も攻めることはできない。死なないために必死に生きてきた者を誰であろうと責められる訳がない。

そしてそんな人間が今更になって誰かの為に生きようと思うことなど、誰に褒められるものでもないだろう。

（いいじゃねえか……今更かもしれねえが、誰かの為に生き
たって……）

「にいちゃー……んっ！！行くよー……！！！」

「早く……！！兄様……！！！」

いつの間にか城の前からいなくなっていた季衣と流琉に呼ばれる。
その美しいとも言える純粋な顔を見て零は軽く笑う。

「ああ、今行く。」

一度はあっさりと諦めた決意。そして狼が人生で最も貫きたかった
決意だった。

懐かしの地と決意（後書き）

今回は今後の伏線てきな話にしておきました。

なんか、かなり長い作品になる気がする・・・

乱世の始まり（前書き）

今回はほのぼの話です。

それと話を章で区切りました。読みにきてくれた皆様間違えてはいないのでご安心下さい。

どうぞ。

乱世の始まり

人の上に立つ人間というのは下の人間の期待に応えなくてはならない。何故なら下の人間は期待に応えてくれない人間に従うことはないからだ。そして従わないと実際どんな行動を起こすのか。

「くそっ！！！！また暴動かつ！！！！」

暴動を起こすのだ。一揆、反乱と言ってもいいかもしれない。つまりは今の上にいる人間を倒して新しい指導者を求めるのだ。そしてその規模は市民の溜めた不満が大きければ大きい程その分大きくなる。そして今回起きている暴動は過去のどの暴動よりも桁違いに大きい。もはや暴動という言葉ではなく、戦争や革命と言った方がいいかもしれない。

しかし、戦争レベルの暴動が起きたとしても所詮は訓練も受けていない農民が中心にできている軍団だ。数の差があっても戦力比は五分五分ぐらいであろう。

本来ならば。問題なのは五分五分ではないということだ。それも勝っているのは暴動を起こした市民達だ。鎮圧に向かった部隊はことごとく返り討ちにあい、朝廷の宦官達は焦りと苛立ちによってあたふたしていた。

「報告っ！！！！暴動の鎮圧に向かった部隊が壊滅したとのことですよ！！！！」

「また、負けたのかっ！！！！一体何をしているのだっ！！！！」

この報告しただけの兵士に八つ当たりしている男も今の朝廷の宦官の一人であり、今まで散々市民から絞り上げた税で良い思いをして

いた者の一人でもある。

（くそっ！！・・・まずい・・・まずいぞ・・・）

ここの男が焦るのも無理はない。今、起きている暴動は今までの朝廷の悪行に対して起きたもの。つまり、もし暴動が治まらなかった場合、咎められるのは朝廷の中で高い地位にいる者、そして自分はその朝廷の宦官。処罰は免れられない。最悪、死刑もありうる。いや、十中八九そうなるだろうと男は考えていた。ただ高い立場にいただけなら降格くらいで済むかもしれないが、生憎男には自分の立場を利用した悪行の心当たりが山ほどあった。

（まずい・・・何とかしなくては・・・こうなったら余りやりたくはなかったが、諸侯達に対処してもらうか・・・）

何故、あまりやりたくなかったかと言うと、理由は簡単だ。諸侯達に民衆の信頼を集めたくないのだ。暴動が治まったとしても暴動があったという事実が消えるわけではない。暴動が治まって結局は今の指導者は他の者への交代を余儀なくされるだろう。そして恐らくそこにはこの機会に名を上げた諸侯が来るだろう。そうなるとそこに取り入るのも難しい。自分の位も下がることになるだろう。そのため余りやりたくなかったという訳だ。だが、背に腹は代えられない。死ぬよりは降格の方がましだ。そう決断した男はすぐに他の宦官を集めるように兵に言いつける。一応、他の宦官にも同意を得るためだ。まあ、確実に同意を得られるだろう。それほど今の朝廷は危機に陥っていた。

「黄巾党？そんな人達が今、暴れているのですか？」

「ああ、まあ自業自得というやつだな。」

「滅茶苦茶やってたもんねえ……」

零と季衣、流琉は涼州の首都であるこの街のとある甘味処で饅頭とお茶をセットで頼んで休憩していた。ちなみにここに着いてからは一ヶ月経っている。休憩というのは仕事の休憩だ。ここに暫くいることになった零達はそろそろ持っている金が底を尽き始めたのもあって、今は飲食店で働いているのだ。何故、飲食店で仕事をするようになったのかと言うと、それにはちょっとした事情があったりする。

三週間前。

「働こうと思う。」

「んにゃ？」

「はい？」

突然何を言い出すんだこの人？みたいな顔で零の顔を見る季衣と流琉。

「あいな、どうしてとか言うなよ。俺の元々持っていた金にも限りがあるんだ。今までは半年間は自給自足の生活をしていたからなるとかなっていたが、さすがにもう限界だ。金も残り少ない。」

「そうなんだ………」

「しかた……ないですね………」

「おい、何だその、かつたるいわ……、みたいな顔は。なんならお前らの食費代を減らしてもいいんだぞ？そうすればかなり節約にもなるしな。」

ババっ！！っという音を立てて零の前に正座する季衣と流琉。

「分かりましたっ！！しっかりと働かせていたただきますっ！！」

「それで、どんな仕事をするのでしょうかっ！！」

「それが問題だ。俺も今までまともな職に就いたことがないからな。どうやって働き口を探していいのか分からん。」

顎に手を当てながら考え込む零。それから少しの間、三人で考えるがなかなか良い案が浮かんでこない。すると痺れを切らした季衣が手を上げる。

「手当たり次第に当たってみれば幾つかは見つかるでしょ。」

適当な事を言っているようで別に的外れなことを言っている訳ではない。良い案もないので取り敢えずその方針で一日探し回ってみることにした。

結論から言おう。一つも働き場所を見つけられなかった。

もう、ものの見事に断られ続けた。原因はいろいろあるだろう。一つ、三人が三人とも武器を担いでいた。二つ、零が全く笑顔を作れない。三つ、季衣と流琉が小さすぎる。他にもあるだろうが、代表するとこんな感じだ。零なんて店の女将に「笑顔を作ってっ！！！」と言われて顔を引き攣らせていた。多分、笑顔のつもりだったんだろう。

とにかく、一つも働き口を見つけれなかった三人はまるでリストラにあったサラリーマンのような雰囲気を漂わせていた。

「どうすれば………一体どうすればいいんだ………」

「私がいけないんでしょうか………」

「ああ~~~~むかむかする~~~~!!」

零は壁に背中を着けて座り込み、流琉は部屋の隅で体育座りなんかしている。そして季衣は木の床をごろごろ転がっている。

「あいてっ!!」

季衣が何かにぶつかった。季衣は頭を押さえながらそれを持ち上げる。

「………本？」

「ああ、それはお前らに会う前に盗賊から頂いた物の一つでな、大して金にもならなかったんで売らないで取っておいたんだ。」

「ふう〜ん。」

ページを捲りながら返事をする季衣。流琉も近くに寄りいつしよに読んでいる。

「につ、にいちちゃん……これ読んだことある………?」

震える声で喋る季衣。

「いや、ないが……それがどうかしたのか?」

「これ、すごいよ………!!」

「すごい?」

「いいからにいちちゃんもこれ読んでみてっ!!」

季衣に無理やり引つ張られ、本を目の前に突き出されて書いてある内容を読む零。そしてポツリと呟く。

「た、確かに………これはすごいな………この通りにやればもしかして………!」

「はい。いけるかもしれませんが、兄様………!!」

本に書いてあった内容はこの時代では思いもしないような事だった。人との接し方、有名になる方法、店を繁盛させる方法など。どれも

誰も試していないような画期的な方法ばかり。そしてその中にこんな項目が。「上手な職の探し方」零達はお項目に注目したのだ。もしかしたら上手く行くかもしれないという望みを持って。

次の日。零達は見事に飲食店で採用されていた。零達は雇ってくれた女将にお礼としてその奇跡の書物を渡した。「これはいろんな人間の元に行った方がいい。」という零の言葉によって。

そして現在に至る。

「それでどうするのですか？兄様。」

「何がだ？」

「いや、その黄巾党っていう人達の手助けをするのかしないのか。」

「別にどうもしないさ。特に黄巾党の味方もしないし、朝廷の味方もしない。ただし、もし平和な涼州に攻め込んでくるようなら・・・」

「「ようなら？」」

季衣と流琉でハモる。

「・・・・・・・・ちよつと痛めつけてやるかな。」

（絶対、ちよつとじゃない・・・・・・・・）と、零の笑みを見て思う季衣と流琉だった。

乱世の始まり（後書き）

一話の本の件を回収しておきました。

次回からは原作の初めの頃に突入します。

まあ、オリジナルの話なのであんまり関係ありませんが。

不運の正義の味方（前書き）

今回は黄巾党の中の人間に焦点を置きました。

どうぞ。

不運の正義の味方

民衆達による大規模な暴動、今では黄巾賊と呼ばれている。何故、本来正義の為に立ち上がった集団が賊と呼ばれているのか、理由は簡単だ。

・・・

正義の味方は民衆を襲いだしたのだ。

最初こそ民衆の為に立ち上がった正義の味方は敵を倒すために人数を集めすぎ、自分たちの人数分の食糧が確保できなくなったのだ。そして、民衆を救う為という大義名分を使って守るべき対象だったはずの存在を襲い始めた。理由はそれだけではない。勢力拡大の為に集めた仲間たちの中には盗賊紛いの人間も多数混じっていたのだ。黄巾賊という後ろ盾を持って略奪をする為に。

これでは最初に純粋な気持ちで戦う事を決断した者達は余りにも報われない。

今や民衆の完全なる敵になってしまい、今更抜けることもできないのだから。その事で苦悩している者は一体、何人いるのだろうか。そして涼州の近くでできた一つの黄巾党のアジトの一番奥にある天幕の中でも、一人の男が頭を抱えていた。

「くそ・・・・・・・・こんなことになるなんて・・・・・・・・」

この男は黄巾党がまだ賊と呼ばれていなかった時期に、民衆の為に仲間を集めて朝廷に対抗出来る程の規模にした男だ。だが、いくら自分達の仲間は盗賊紛いの事をしないと云っても、それを信じて貰えるはずがない。

黄巾党はもう正義の味方ではなく、弱い者を襲う悪者なのだから。

「大丈夫ですか？兄貴。」

天幕の中に二十前半程の男が心配そうな顔で入ってくる。

「ああ、俺のしたことは間違いだったのかと思ってな……………」

「そんなことは……………」

「今や黄巾党は黄巾賊になってしまった。守ろうと思った者からも敵視される始末だ。まったく、我ながら笑えてくるな……………」
俺を信じて着いて来てくれたお前らになんて謝っていいか……………」

「

自嘲を込めながら笑うその姿は同情すら感じる。

「兄貴……………少なくとも俺は兄貴のやったことが間違いだったとは思ってませんし、兄貴に着いて行ったことも後悔してません。それに俺はまだ諦た訳ではありません。まだ今からでも巻き返し可能なはずですら。俺達の兄貴なら。」

「こんな俺をまだ信頼してくれてるのかお前たちは……………」

男は未だに自分を信じて着いてきてくれるという部下を見る。そこには一点の曇りもない信頼があつた。
なら、と男は立ち上がる。

「信じてくれる奴がいるなら、俺が諦める訳にはいかねえよな。」

そう、諦める訳にはいかない。たとえ大した事も出来ずに終わることになるとしても、最後まで諦めないで戦う事を仲間は望んでいるはずだから。

零と季衣、流琉が住んでいる城の前に大量の兵が並んでいた。

「にいちゃん、緊張してきたね……」

「いや、俺は別に緊張してないが。」

「兄様は馴れているから大丈夫かもしれないですけど、私たちは久しぶりの実戦で胸がもう、大変ですよ……」

何で三人が混じっているのかという疑問があるだろう。

一週間前にこんな掲示板が街に立てられたのだ。『悪逆非道の黄巾賊から皆を守る為、腕に覚えがある者は立ち上がるべし。』つまり黄巾賊に襲われる前に黄巾賊を倒そう、ということだ。今までこちらからは討伐に行かなかった涼州だが、他の州が甚大な被害を受けているという報告を聞いて危機感を覚えたのだろう。今回、思い切って脅威の排除にでることにしたのだ。

この掲示板を見た零は、季衣と流琉の武器を使うにはいい機会だと思ひ参加することにしたのだ。零自身、久々に暴れたいっていう気持ちもあったものがあるが。

「そんなに緊張してたら動きが堅くなるぞ。」

「だつて~~~~」

「そう、言われても……………」

まるで全校生徒の前で演劇をする前みたいになってしまっている。零は一つ溜息を着くと二人の肩に手を置く。

「仕方ないから戦闘中は俺の近くから離れるな。近くにいるなら絶対を守ってやる。」

「う、うん……………にいちちゃん……………」

「分かりました……………兄様……………」

二人は俯いてもじもじする。頬がピンク色に染まっているように見えるのは間違いではないだろう。まあ、そうさせた本人は全く気付かないで相変わらずその手を肩に乗せているが。

「それにしてもよく兄様が行く気になりましたね。」

「そうだよね~~~~にいちちゃんならめんどくさがって行かないと思つてたけど。」

「俺はどうでもよかったんだが、あまり、実践から遠のいてお前たちが折角旅の間に盗賊や野盗と戦ってきた覚悟が揺らいでも困るからな。それに、そろそろ武器も獣以外に使ってみたいだろう?」

「私達の為に……………ありがとうございますっ!!!!!!」

「ありがとくにいちちゃんっ!!!!!!ぼく頑張るよっ!!!!!!」

「あつ、ああ……」

実際の所は自分が戦いたいなんて言えない零は真っ直ぐな感謝の気持ちにたじろぐ。でも言ったことも嘘ではないし、なにより二人の緊張が解れたならいいか、と思う零だった。

「にいちちゃんっ！！見えてきたよっ！！」

出発してから二時間程、黄巾賊が使っている城が見えてきた。二時間という短い距離にいながら、よく討伐に行かなかったな、と思う人もいると思うが、涼州の刺史はそれだけ温和な人ということで納得してもらうしかない。

「止まれー！！！！」

隊長と思しきゴツイ男の声が響き渡る（ちよっ！！気付かれる！！！）と思つた兵士が多いと思うが、このゴツイ男は如何にも脳筋という雰囲気があるので特に何も考えていないのだろう。何故、こいつが隊長なのかとても不思議だ。

（さて、どこまでやるか……あまりやり過ぎて注目を集めるのも良くはないが、あれのこともあるしな……）

零は腰に差した剣の状態を見ながら、そんな事を考える。ちなみに大牙は持ってきていない。理由は大牙を持つとあまりに目立つからだ。牙と共に留守番をしている。

あれ、というのは掲示板に書かれた報酬の事だ。

義勇兵募集の掲示板には『敵の大將を討ち取った者には望みの報酬を与える。』こんな事も書かれていたのだ。少しでも参加人数を増

やすための作戦なのだが、零にはこの報酬が欲しい訳があった。その訳が何かは後に分かることだろう。

だが、答えを出す前に突撃の命令が出される。

これまた（作戦はっ！？！？）と思った奴が多いと思うが、ここは下手な作戦を立てるよりも、相手が迎撃の準備をする前に攻撃するのが得策だろう。あの脳筋（多分）がそう考えて突撃の命令を出したのかは謎だが。

うおおおおおおお！！！！、という掛け声と共におよそ一万人の兵士と義勇軍が突撃する。その最後尾のあたりを零は季衣と流琉を連れて走っていた。

「あの、兄様。いんですか？こんなゆっくり走ってて……」

「いいんだよ。門をこじ開けたりするのは雑魚の仕事だ。俺達は門が開いてから行けばいい。」

「なんだかそれって、すごいずるい気がするよにいちゃん……」

「……何か言ったか……」

「いえ、何でもないです。」

零の静かな、それでいて有無を言わせない言葉に季衣は黙り込む。そして、零達がたらたらと走って城の前に着くと門が金具が軋む音と共に開いた。

「涼州の軍隊が攻めてきましたっ！！！！兄貴どうしますかっ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

遂に来たか・・・・・・と思った。覚悟はしていた。いつか来るだろうとは思っていた。

こちらからは手出ししていないからと言って、今の黄巾党の噂からしていつか攻めてくると思うのは普通だろう。そして、やられる前にやるという発想に至るのも。

「仕方ないな・・・・・・攻めて来たからにはこちらも黙っている訳にはいかんっ！！！！迎え撃つぞっ！！！！何人かに城門を死守させて、その間に戦いの準備を済ませろっ！！！！こんな所で俺達は終わる訳にはいかないんだからなっ！！！！」

「はいっ！！！！兄貴っ！！！！」

（そうだ。俺は諦められないんだ。俺を信じる部下がいる限りっ！！！！）

門が開き、涼州軍と黄巾党の激しい戦闘が始まった。

雪崩れ込む涼州軍とそれを食い止める黄巾党。数では涼州軍が勝っているのだが、黄巾党は死力を尽くし互角の戦いをしている。そんな中、零と季衣、流琉は向かってくる黄巾を蹴散らして順調に奥へと進んでいた。

「死ねええ!!」

「邪魔だ。」

また一人零の剣が黄巾の数を減らす。隣では季衣と流琉もその巨大武器を振るって、黄巾党を文字通り吹き飛ばしている。

そんな三人の前に二人の男が立つ。一人はゴツイ筋肉質の男でもう一人は二十代前半程の男だ。

「何だお前は？俺はこの黄巾党の頭領にしか興味はないんだが。」

自然体の姿勢でそう言うと、ゴツイ法の男はニヤツと笑う。

「喜べ。俺がその頭領だ。」

「お前が頭領か。なら悪いが頸貰うぜ。」

「悪いが俺もそう簡単にやられる訳にはいかないんだ。」

零と頭領が睨み合う、そして誰のものともわからない喉が鳴る音を

合図に剣と剣がぶつかり合う。

「兄貴っ！！」

急いで駆け寄ろうとする側近らしい男。だが、二人の少女に道を阻まれる。

「いかせないよ。」

「いかせません。」

「くっ！！」

普段ならこの男は子供に刃を向けるような事はできない。そう、普段なら。生憎と今は普段通りとは程遠い状況だ。それにこの男は目の前の二人の少女の力を見ていた。大の大人を軽々と吹き飛ばす、その力を。

（手加減なんてしてる余裕はないっ！！！！殺す気でやるっ！！）

大鉄球の轟音と共に戦闘が始まった。

「派手にやってるな、向こうも。さて俺は必要ないと思うが、万

が一の時の為に向こうの加勢に行きたいんだ。つー訳でもう終わらせようぜ。」

零が剣を向ける先には戦い初めて一分も経っていないにも関わらず、あちこちに刀傷ができた頭領の姿。剣を地面に刺して立ってるのがやっとといった様子だ。

だが、その目の炎は消えてはいない。

「何がお前をそんなに頑張らせるのかは分からねえが、これで終わりだ。」

「っ!?!?」

零の上段切りが襲い掛かる。頭領はそれを辛うじて防ぐが、零はすかさず第二撃を繰り出す。頭領はそれを防ごうと剣を出すのが、パキッ

余りにもあつけない音を立てて剣が折れる。

「・・・・・・・・ゴフッ。」

剣を外したんじゃないかと勘違いするほどの自然体で頭領は立ち尽くし、数秒後に派手な音と共に大量の地を噴き出して倒れこむ。

「さて行くか。」

零は剣に付いた血を剣を一振りして落とす。そして、特に心配してないが季衣と流琉の元に歩いて行こうとする。

だが、零は数歩進んだ所で立ち止る。

「ほんとに、何でそんなに頑張んだ?」

零が振り返ったそこにはしっかりと両の足で立っている頭領の姿があった。

「おまえらは嘘っぱちの大義名分を掲げて村人襲う悪党だろうがよ。なのにどっからその力は出てくるんだ？」

「ふつ、悪党か……確かにもうそうなのかもしれないが、俺の中にはまだ、正義の味方への憧れが残ってるんだよ……」

笑いながらそう言つと零も笑みを浮かべる。

「なるほど……さしずめ不運の正義の味方つてところか。遺言くらいは聞いてやるぜ？」

「遺言か……できるなら、その力で皆を守ってくれないか？」

「悪いな。俺の両手はもういっぱいなんだ。皆なんていう得体のしれない奴らを救ってる程の空きはないんだよ。」

「そうか……」

けど、と笑いながら言つ。

「俺の少しの空きで助けられるような皆ならついでに守ってやるよ。」

頭領は苦笑いなのどこか満足そつに顔をする。

「空気が広いことを信じるか．．．．．満足だ．．．．．
やってくれ。」

零は剣を肩の上に持っていていき、そして、

．．．．．

「じゃあな。正義の味方。」

「そっちも終わったのか？」

ぽーっと立っていた季衣と流琉は零の声に反応して振り向く。

「うん、にいちゃん．．．．．」

「終わりました。」

二人の前には口から血を流して死んでいる一つの死体。刺し傷がない所を見ると季衣の鉄球か流琉の葉々をまともにくらったのだろう。

「どうした？元気がないな。」

「うん、黄巾党の中にもまだ皆の為に戦っている人もいたんだなつて．．．．．」

「そうだな．．．．．俺と戦ったあいつもそんな奴だったよ。」

こうして、零と季衣、流琉が頭領とその側近を殺した事によって、

戦いは終わりを告げた。

不運の正義の味方（後書き）

何故かちょっとかつこいいおっさんを出してしまった。

まあ、死んでしまったのでもう出て来ませんが。

後、まだしばらくはやりませんが、新しい小説を書こうと思ってます。

何か希望があつたら言つて下さい。

いつでも意見待ってます。

ちなみに今、候補に挙がっているのは

とある魔術の禁書目録

ブリーチ

です。

買取と零（前書き）

話を進めたいが進まない・・・

どうにかしないと・・・

どうぞ。

賈馭と零

黄巾党は零が頭領を討ち取ったことで戦意を失くし、互角だった戦鬪は涼州軍に傾き、またたく間に黄巾党は討ち取られていった。頭領を討ち取った零は軽いヒーローのように扱われたが、周りに群がってくる男は鬱陶しいという理由で睨んで、散らした。

そして今、零は頭領を討ち取った褒美を与えるという事で涼州の城の玉座の間に呼ばれている。ちなみに曹操と違い、刺史にもなると本人の意思に関係なく玉座の間のような部屋は用意される。そうでなければ温和で有名な涼州の刺史が玉座の間など作らないだろう。

「今回の働き、見事であつた。そなたは勇敢にも黄巾党の陣地の奥に単身で攻めていき見事に敵の大將を討ち取った。その勇氣と素晴らしい武を評して………」

眼鏡を掛けた鋭い眼つきに緑色の髪を左右に三つ編みにしている少女が形式的な言葉を読んでいく。恐らく軍師だろう。それを片膝を着いて大人しく聞いている零。そのあまりに見慣れない光景に季衣と流琉が笑いを堪えている。

（あいつら、今日は飯抜きにしてやるか……）

自分達に命の危機（季衣と流琉にとって）が迫ってるなんて思いもしない二人だった。

と、そんなことを零が考えていると、どうやら長つたらしい話は終わったらしく、少女が読んでいた紙（半紙のような物）を懷に仕舞っている。

「それで、そなたは何を望む？金でも地位でもそれなりのものは用

意しよう。」

零はやつと来たその質問と同時に立ち上がる。突然立ち上がった零に周りの兵士や少女が戸惑う。そして零が口を開く。

「金も地位もいらねえ。俺にはもっと欲しいものがあるんでな。」

「それは何？」

最初こそ戸惑っていた少女だったが、そこは涼州の軍師だけある。すぐに平然とした態度に戻る。

「たった一つだ。お前の主に会って話がしたい。」

「なんですって？何だってそんな……」

「何、ちよつとした用があつてな。」

「理由は？それを教えないなら悪いけど会わせる訳にはいかないわ。」

「……………」

零が無言で少女を睨みつけるが少女も睨み返す。緊迫した空気が漂い始め、周りの兵士や季衣、流琉は落ち着かずにそわそわしている。先に沈黙を破ったのは零の方だった。

「いいだろう、教えてやる。だが、条件がある。」

「なに？」

「教えるのはお前だけだ。兵士は外に出せ。」

室内がざわめき立つ。

こんな条件飲めるわけがない。兵士達はそう思ったのだ。無理もないだろうさつきまで涼州の軍師である少女に対して殺気に近いものを放っていた男を何の護衛もなく、二人きりに出来る訳がない。断るに決まっている。皆そう思った。

だが、少女の返答は予想とは真逆のものだった。

「……分かったわ。下がらせましょう。」

「いけませんっ！！！！こんな危険な男と二人つきりにするなどっ！！！」

一人の兵士が少女に詰め寄る。少女はそれを手で制する。

「大丈夫よ。こいつの目的は月^{ゆえ}に会う事、私に手を出せばそれが叶わくなることぐらい分かってるはずよ。」

「確かに、ここでお前をぶっ殺しても俺に得なことなんてないしな。」

「そういうこと。それじゃあ、皆悪いんだけど下がってくれる。」

「季衣、流琉。お前らもだ。」

えっと間抜けな声を出す季衣と流琉。自分たちは中に残ってられると思ったんだろう。

「えっじゃない。向こうが自分だけになるんだからこっちも同じ条件にするのは当たり前だろ。ほら、早く出ていけ。」

「で、でも兄様。」

「でもない、早くしろ。それにこのことはお前らにも詳しく話すつもりはない。」

零のきつぱりとした言葉に黙り込む季衣と流琉。そしてとぼとぼと部屋から出ていく。

「いいの？あんなきつい言い方して。」

「いいんだよ。あいつらはあのぐらいでどうにかなるほど軟な鍛え方はしてないからな。」

「それならいいけど。」

まだ、心配そうな視線を向けている少女を見て零はフツと笑う。その事が気に入らなかったのだろう少女は顔を赤くして不機嫌そうな顔をする。

「な、なによ。」

「いや、お前って案外お人よしなんだな。」

「そ、そんなことないわよ………」

照れているのか嫌がっているのか良く分からない顔をして視線を逸

らす。

「まあ、別にどうでもいいことか……さて本題に移ろうか。」

少女は零の声が真剣なものに変わったのを聞くと視線を零に戻す。そして表情を真面目なものにする。

「昔の約束でな。」

「約束？一体どういう、誰とした……」

「それは……」

「にいちちゃん遅いね……」

「うん、何話してるんだろう？」

零と少女が一つの部屋に入ってから三十分、未だに二人は出てこない。兵士達の中では突入するか待つかで口論が起きている。

「突入すべきだっ！！あいつが何かしたに違いないっ！！！」

「いやしかし、賈馱様は大丈夫と言ったのだ。なのに我々が勝手に入るのは賈馱様を信じていないということになるのでは……」

「

「しかしもしものがあつては……」

これほど部下に心配されているのは賈馱という少女が部下に慕われているからだろう。嫌な上官ならこう心配はしない。

まあ、同じ状況であるはずの季衣と流琉が全く心配した様子がないのはそれとはまた別の理由で、決して季衣と流琉が零を慕っていない訳ではない。単に零の強さを知っているから心配するという発想もでてこないのだ。仮に他の兵士がいたとしても零が負ける訳がない、と。

そんな感じで二人が出てくるのを待っている訳だが、それも金具が軋む音と共に終わりを告げる。

「終わったわ。」

「終わったぞ、季衣、流琉。」

すぐに賈馱の元集まる兵士達。季衣と流琉も立ち上がり、零の元に行く。

「どうなったのにいちゃん？」

「ああ、二日後に客人という待遇で会えることになった。お前らは留守番だな。」

「えええーーーーー!!!」

「また……ですか……」

見るからにテンションが下がっていく流琉と不満そうに頬を膨らませる季衣。

「まあ、今回は我慢してくれ。今度、埋め合わせはする。」

「ほんとっ!？」

「俺が嘘をついたことがあったか？」

「小さい嘘なら何回かあるような……」

「……………」

気まずい沈黙が流れる。零は季衣と流琉の疑いの目に居た堪れなくなりゴホンツ、とわざとらしく咳をする。

「と、とにかく今回は本当だから、我慢してくれ。」

「うん、信じる。絶対だからね?」

「ああ、約束する。」

「分かりました。それじゃあ我慢します。」

人によっては鼻血物の上目使い&笑顔を見せる流琉。それを正面から見つめられる零の精神力はどうなっているのだろうか。

「じゃあ飯でも食いに行くか。」

「うんっ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

涼州の一室で賈馱は先程の事について考えを巡らせていた。本当に許可を出して良かったのか、と。

（あの男の言っていた事が本当なら月に会わせない訳にはいかない。
（でも、嘘で元々月を狙って来たのだとしたら・・・・・・・・）

実際の所、賈馱の主であり、親友である董卓は温和な性格をしている為、涼州が狙われることはあっても董卓自身が狙われる可能性はゼロに近いのだが、董卓のことを世界で最も大事に思っている賈馱は僅かでも可能性があるなら疑わずにはいられない。

だが、もう既に決めてしまった事だ。今更取り消す訳にはいかない。それに自分は同席することお認められている。軍師だから対した障害にならないと思われる認められたのかもしれないが、それでも自分は親友の傍にすることを認められたのだ。

なら、と思考を言葉に繋げる。

「私が月を命に代えても守ればいいだけの話よ。」

これだけ思われる月という少女はどれだけ儚い少女なのだろうか。
それは恐らく想像を遥かに上回るものだろう。

約束の日の朝とも夜とも分らない時間。零は窓から月を見上げて
その時を待っていた。零は度々、季衣と流琉が寝ている時間に月を
見る。それがどんな意味を持っているのかは零にしか分からないこと
だろう。そして今も何かしらの意味を持って月を見ているのだ。
不意に、零はが何か呟く。耳を澄まさなければ聞き取れない程の
声で。

「明後日か．．．．．あんととの約束守ってやるよ。
．．．．．くそ野郎．．．．．」

零の声は誰に聞かれることもなく夜の空に消えていった。

買取と零（後書き）

次回は月登場と零の過去を書こうと思います。

上手く纏められることを祈ってよう・・・・・・・・

董卓と零（前書き）

今回はセリフが多いです。

最近、文才が欲しいと嘆く作者です・・・

どうぞ。

董卓と零

その日、少年は自分の日課である仕事を終え、いつも通り自分の居場所に帰った。いつも通りの灰色の壁に長椅子が一つ、床は空の酒瓶がいくつも転がっているせいで歩く場所を狭くしている。

そんないつもの風景。

ただ、一つだけ違うことがある。決定的な違いが。

少年の親がいないのだ。いないといっても部屋にいないという意味ではない。外に行こうが酒屋に行こうが娼婦達の所に行こうが、いないのだ。

どこを探そうがいる訳がない。

なぜなら少年の目の前には既に動かなくなった死体があるのだから。ただの人の形をした肉になったそれには短刀が深々と刺さっている。刺してそれほど時間が経っていないのだろう。血は固まっておらず、刺し口からは赤い液体が流れ出ている。

少年はそれを静かに見つめていた。

「これで………終わったんだ………これで………俺は………」

それを見ている少年の眼には光がなかった。いつも自分を殴るだけだった親でも死んでしまったら、何か思う所があるのか、それともそれが死んだという実感が湧かないだけなのかもしれない。どちらにしろ既に終わったことであり、考えても意味などない。

「今から始まるんだ………本当の意味での………俺の人生が………」

所々黒ずんだ灰色の天井の何処を見る訳でもなく、ただ上を見上げ

て誰かに話し掛けるように一つ一つ言葉を紡ぐ。ちゃんと教えているかを確かめるように。

「もう一回……何も持っていない状態から、零からやり直すんだ。俺の人生を。」

手を大きく広げて何かを掴むように握りしめる。

「零から……！！！」

こうして少年は零になった。自分の人生をやり直すという決意を込めて。

約束の日の朝、零は賈馱との待ち合わせ場所である城門前に行った。朝にトシカ言っただけでなかったが、まだ来ていないかもしれないと考えていた零だったが、実際着いてみると賈馱は門の前で仁王立ちしていた。

「早いな。」

「月にとっても大切なことだもの。呑気に寝てなんかられないわ。」

「大したもんだな。それだけ忠誠心の高い家臣はなかなかいないぜ。まあ、お前の場合は友情みたいなものもあるようだがな。」

「ふんっ！―当たり前でしょ。月は私の親友なんだから。」

顔をプイツと背ける賈馱。

「感謝する。その大切な親友を俺みたいな胡散臭い奴に会わせてくれて。」

「まあ、内容が内容だから会わせない訳には行かないでしょ。そんなことはいいから私に着いてきて。月を待たせてるんだから。」

「ああ。」

城門を潜ると直ぐに左に曲がり林のような所に入っていく。

「こんな所にいるのか？」

「月は休息を取る時いつもこの先にある家で過ごすのよ。」

「そうなのか、俺は董卓に会ったことがないからどんな奴かは知らんが、噂通り大人しい奴みたいだな。」

「どんな子かは自分で確かめなさい。」

「そうだな。誰かから聞いても意味ないしな。」

そこからは二人とも何も言葉を発しなかった。話しても仕方ないと思うたのだろう。

そして、一つの家の前に着き、賈馱は何も言わずにドアを開ける。

「ここか………」

部屋の中には一人の少女が座っていた。

銀髪の髪に賈馱とは対照的な弱弱しい雰囲気。元々体が小さいものもあるだろうが、少女の出している雰囲気が一層か弱い印象を持たせる。

「あんたが董卓か？」

「はい。」

「話は賈馱から聞いてるのか？」

「少しは……死んだ父の知り合いだって。」

「まあ、間違いではないな。まあ、詳しい事は今から話す。」

「はい。」

董卓は表情を引き締めて零の言葉を待つ。

「俺はまだお前が生まれる前、二十年前にお前の父親の董君雅の弟子だった男だ。」

「弟子……ですか………」

董卓の顔がどう反応したらいいか分からないと言ったものになる。

「正確には二十年前からお前の父が死ぬまで弟子だった。まあ、お前が知らないのも無理はない。董君雅はお前が一歳にもならない内に死んだからな。」

「はい・・・父の事は話に聞いたことしか知らないんです。すみません。」

「別に謝らなくていい。覚えてないのは当然だし、俺が弟子だったこと自体は正直どうでもいいことだ。重要なのは俺がお前の父とした約束だ。」

「約束？」

董卓は小首を傾げる。賈馱から聞いたのは零が自分の知り合いだったということのみらしい。

「お前の父が死ぬ時、俺はそこに居合わせていた。あいつは死ぬ間際に俺に一つの頼み事をした。」

「何を頼んだんですか？」

「お前の事だよ。あいつは俺にお前の事を守ってほしいって頼んだ。」

「父が・・・」

左手を右手で包み込んで、複雑な顔をする董卓。顔も知らない父親が自分の事を頼んで死んだと言われてもどうしたらいいか分からないのだろう。それはそうだ。いくら自分が思われていたと言われても所詮は人から聞いた話。他人事みたいなものだ。いくら内容が涙

を誘うような感動的な話でも涙など出る訳がない。
そんな心境の董卓だったが、零はさらに言葉を続ける。

「俺はその時それを断った。知り合いでもなんでもねえ生まれたばっかの赤ん坊の為に人生使うなんてごめんだってな。」

「……それなら、何で今になって私に会いに……？」

「まあ待て、話にはまだ続きがある。俺は確かにお前の父の頼みを断った。だが、それとは違った約束をしたんだ。」

「一体、どんな……」

零は自分の掌を数秒見つめそれを握りしめる。董卓は零のその行動に首を傾げるが、零が視線を自分に戻したので再び表情を引き締める。

「お前の子供が成長して何かの危機に陥ったら一回だけ助けてやるってな。これがお前の父親とした約束だ。」

「あ……あの……ありがとうございます……でも、まだ今それを言いに来た理由が分からないんですが……」

「今起こっている黄巾賊による暴動はもうあまり続かないだろう。民衆を敵に回した黄巾賊に勝ち目はないからな。それでまた元通りならいいんだが、恐らくそうはならない。黄巾賊がいなくなっても民衆の不満が消える訳じゃあないからな。今の指導者達は立場を追われるだろう。そしてその空いた席に座るのが誰であろうと誰もそれを認めない、全員がその席に座りたいからな。そして群雄割拠の時代が始まる。それぞれが天下を目指す時代にな。」

零の言葉を聞いている董卓の顔がだんだんと困り顔になって行く。董卓としては戦争なんてやりたくないのだろう。それが分かっているのか、心配そうに董卓を見ている賈馱。

「さて、ここからが本題だ。問題なのはこれが一般市民の俺と違って刺史であるお前にとっては何人事じゃないってことだ。お前も群雄割拠お時代を生き抜かなきゃならない。だから今のうちに教えておきたかったんだ。」

「あの、失礼ですがあなたはそんなに強いんですか？」

董卓は単純な疑問としてそう思ったのだ。当然だ、いきなり現れた父の弟子だという男に助けてやるとか言われても信用できるはずがない。

「そう思うのも無理はねえか。別に信用してくれなくてもいい。頭の片隅にこんなことを言ってた奴いたな――ぐらいに覚えていてくれれば。」

「はい、分かりました。」

「私は期待するわよ。あんたがぼくたちの事をいつか助けてくれるって。」

「まあ、たいていの状況ならひっくり返してやるよ。」

さて、と言葉を繋げる。

「俺はそろそろ宿に帰る。言いたいことは言い終わってたしな。」

そう言つと零はその場を立ち去ろつとする。しかしそれを董卓が引き留める。

「あの名前を教えてくださいませんか？」

「俺の名前か……それは俺がお前を助ける時に教えてやるよ。それまでは俺の事は忘れて、俺に助けられなくちゃいけないよ。うな状況にならないように最善を尽くせ。賈馱、お前もな。」

「言われるまでもないわよ。月は絶対にぼくが守ってみせるんだから。」

「ふっ、じゃあな。」

そう行つて今度こそ零はその場を立ち去つて行つた。

董卓と零（後書き）

こついう真剣な会話のシーンは難しいですね。

どう纏めていいのやら。

評価待ってます。

張遼と零（前書き）

今回は霞さんが登場です。

どうでもいいことですが、霞は作者の一番好きなキャラです。
どうぞ。

張遼と零

誰かそいつを捕まえてくれ————！！！！」

「ん．．．．．？何か前にもこんなことが．．．．．」

デジャブという言葉がある。

過去にあった事を何らかの理由により体験し『何だか前にもこんな事あったような．．．．．』と、なるやつだ。ちゃんと説明するともっと複雑な現象なのだが、ここは一般的に用いられている使い方でいいだろう。

零は今、まさにその状態にあったのだ。

無理もない。

実際にあったのだから。

そして結果も全く同じのものになる．．．．．と思われたが、そうはならなかった。零と盗人の体がぶつかる前に一つの影が零と盗人の間に入り込む。盗人はその影の主を突き飛ばそうとするが、

「はあああああ！！！！」

「えっ？」

突き飛ばすはずの盗人の視界の上下が入れ替わった。どうやら盗人は百八十度回転する運命にあるらしい。

「ぐはっ！！！！」

背中から叩きつけられた盗賊は強制的に肺の中の空気を吐き出さされる。盗賊が酸素を取り入れるために忙しく咳のような呼吸をして

いると、その目の前に一つの人影が立つ。

「この、張文遠がいる限りはこの街で好き勝手な真似はさせへんで
――！！！！」

盗賊を背負い投げした少女はそう名乗った。

「ふ~~~~んそれであんたはこのちびっ子達の世話をしてるっち
ゆうわけか。」

「張遼、なんでお前は当たり前のように同じ席に座ってるんだ・・・
・？」

先刻、盗人を相手に大立ち回りをした張文遠、張遼は零と季衣、流
琉の三人と同じ席に座って思いつきり・・・くつろいでいた。
何故溜めたかというと、溜めなしでは表現できない程くつろいでい
るからだ。まるで気を許した親友の前にいるような感じた。片肘で
頬杖を作りそこに顎を乗せており、とてもじゃないが会って一日
にも満たない者にできる態度ではない。はずなのだが、目の前にい
るのだからできる態度なのだろう。

「堅い事言わんといてや。うちらもう、友達やろ？」

「さあな、そう思ってるのはお前だけじゃないのか？」

「またまた、そんな心にも言っちゃって……」

「……お前のその核心はどこから来るんだ……」

嫌味を言ったつもりの零だったが、すんなりそれを受け流す張遼を見て毒気を抜かれてしまう。

「ん……、勘？」

「何で疑問形なんだ……」

「まま、細かい事気にしてたらやってけんで……!!」

「……はあ……はあ……」

思わずため息を着いてしまう零。どうやら諦めたらしい。

「大体俺はあの時の事はお前が感謝するような事じゃないだろ。俺が何もしなくてもお前は自分でなんとかしていただろうしな。」

「そりゃあ確かに、やけくそになって突っ込んできた盗人ぐらいうちでどうにでもできたけど、そういう問題じゃないやろ？見ず知らずのうちを助けようとしてくれたっちゅうことが重要なんや。だからうちを助けてくれようとしたあんたはもう友達や。」

つまりこういうことだ。先程、零と衝突寸前の盗人を投げ飛ばした張遼だったが、盗人は大人しくは捕まらずに張遼に襲い掛かったの

だ。そこを零が大丈夫だとは思いつつも、万が一の事があるかもしれないので、サッカーボールのように盗人を蹴り飛ばしてダウンさせたという訳だ。零自身は本当に軽い気持ちでやったのであって、別に借りを作るとか感謝してもらおうとなんて毛ほども考えていなかったのだ、そのまま立ち去ろうとした。それで話が終われば簡単だったのだが、そうはならなかった。

張遼が零達のことを引き留めたのだ。

どうやら張遼は零のことを気に入ったらしく、名前を覚えてくれたの、何をやってるのかだの、色々と聞いてきた。名前の事はいつも通り事情を話して引いてもらったが、他の事は特に断る理由もなかったので話すことにした。

その後、零は話すことにしたことを後悔することになるのだが。

零が自分に興味を持った張遼を門前払いにしなかったのは少なからず張遼に興味を持ったからだ。目の前で自分よりも大きい男を背負い投げした少女。そんな少女に興味を持たれて、『自分も興味あるしいいか、』ぐらいのものだった。

まさか一日中付き纏われることになるなど考えもせずに。

これが零が溜息を着いている原因だ。元々今日は二日前に季衣と流琉を留守番させた埋め合わせということで外に出たのだ。だから当然、今日一日は季衣と流琉の行きたい所に行くつもりだった。

三人で。

それが今は関西風に喋る少女も含めて四人になっている。

いつもの零なら一言、『お前邪魔だ』とか言って終わらせるところなのだが、それができないから質が悪いのだ。正確に言うなら言いくいだ。

張遼は話をしている時、本当に悪気の欠片も感じられないのだ。零の言いくさを表すなら、自分が嫌いな食べ物を善意で持たせてきた人に『すいません、これ嫌いなんです。』と言う時の言いくさだ。しかもそれが旅行のお土産だったと思ってくれたら分かって貰えるだろう。

「へーーーー張遼さん董卓さんに仕えてるんですか。」

「そうやでーーーーうちは月の一番槍みたいなもんやな。」

「じゃあ、張遼さんが董卓さんの仲間の中で一番強いのか?」

「そうやで……と、言いたい所やけど、一番強いのはうちやないな。」

「じゃあ、誰が一番強いんですか?」

「それはだんとつで恋の奴やな。呂布って言えば分かるか?」

「噂くらいなら。」

「確か、飛將軍とかいう異名を持った天下無双の武人、だったか?」

気衣と流琉が楽しんでるからいいか、と結論づけた零は三人の会話に入ってくる。

「よう知つとるな。そうやで、うちもいろんな武人を見てきたけど、あそこまで強いのは他におらんな。あいつは次元が違うわ。まあ、いつか追い抜かしてやるつもりやけど。」

「それはいつか会ってみたいな。」

「会つのはいいかもしれんけど、恋は気に入った奴としか話さんで。気に入った奴ともべらべら喋るわけじゃあらへんし。」

「そういう奴の方が落ち着いた会話ができそうだ。」

「・・・・・・・・それって嫌味か？」

「やっと気づいたか。」

拗ねたように頬を膨らませる張遼。

「まあ、董卓に仕えているならいつか会うことになるだろう。」

「ん？なんや、月と知り合いか？」

「そうだな・・・・・・・・知り合いだ。」

知り合いという言葉にいまいちピンとこない零だったが、他に上手い言葉も思い浮かばなかったので知り合いということにする。

「それならうちともまた会えるっちゅうこつちやな。」

「それなら？同じ街に住んでるんだから会う事ぐらいあるだろ。」

「いや、うちは暫く洛陽に行くことになっててな、明後日の朝にはもう出発することになってるんや。」

「行くのはお前だけか？董卓はどうするんだ？」

「月も一緒に行くで。」

あの女、と零は自分の頬が引き攣るを感じた。

「どうしたんか？なんか、顔が引き攣とるやけど……」

「（まったく、そういう事は言っておけてんだ……）いや、なんでもない。それじゃあまた会う時を楽しみにするか。」

「楽しみしてくれるん！？じゃあ、うち待ってるでっ！」

「ああ、待ってろ。きっと跳んで喜ぶことになるぜ。」

「？よう分からんけど、待ってるわ。んじゃあ、ちびっ子達も元気でな……」

「うん。じゃあね……」

「さよならです。張遼さん。」

別れを済ませると張遼は走って店を出ていく。

張遼が跳んで喜ぶことになるのはもう少し後の話だ。

「あつ。」

「どうしたの、にいちゃん？」

「あいつ、自分の分の料金払ってねえ。」

「「あつ。」」

張遼と零（後書き）

関西弁って難しい・・・・・・・・

おかしい所があったら言ってください。

乱世一歩手前（前書き）

これで三章はお終いです。

次からは董卓連合編だと思います。

あと、10000ユニーク達成しました。

読んでくれた方々、ありがとうございます。
そして、これからもお願いします。

乱世一步手前

張遼が言っていた通り、董卓とその一行は天子の住まう洛陽へと旅立っていった。涼州の民はその事を悲しんだが、最後には笑って董卓一行を送り出した。

今まで自分たちに対して良くしてくれた董卓たちがいなくなるのは嫌だが、自分たちの我がままで困らせることになってはいけなさと考えたのだろう。やはり、民は治める者に似る、ということだ。

さて、ピンチの時に助けてやると言った零だが、何も零は瞬間移動ができる訳じゃあない。つまり、ある程度董卓から遠くない街にいないといけない。

そして洛陽は涼州に近いかという話になる訳だが、結論から言うと、近いとは言えない。

洛陽はほぼ国の中心にある為、国の端から端ということにはならないが、それでも馬を使って一週間は掛かる距離だ。たかが一週間と思う人もいるだろうがほんとに何かのピンチの時に一週間も掛かる遠さの場所に居たら、着いた時にはもう手遅れという事態もありうる。

そんな事になつては笑い話にもならない。

そこで零は涼州を離れることにしたのだ。季衣と流琉には暫く涼州に住むと言ったが、まだ三ヶ月程しか経っていない。

とはいえ、今までどんなに長くても一ヶ月と同じ街に滞在することのなかった三人だ。充分長く住んだと言えるだろう。

そして今、零と季衣、流琉は二度目の馬車の旅をしていた。いつでも今回は洛陽まで行くわけではないのでせいぜい四日の旅行だ。しかし、それも思春期真っ盛りの少女二人には退屈なものな訳で、

「あ~~~~~~~~、退屈だよ~~~~~にいちゃん~~~~~何かおもしろいことない~~~~~??」

「季衣つてば、少しは大人しくしてよ。」

馬車の中でゴロゴロ転がっている季衣を流琉が諫める。

「そんな事いったって、流琉だつてさつきからつまんなそうにしてるじゃん。無駄に武器に手入れしてるし。」

「それは……………」

季衣の的確な突っ込を受けて、言葉に詰まる流琉。

「退屈なのは分かるが、我慢してくれ。馬車の中で走り回る訳にもいけないからな。着いたら好きなことしてやるから、季衣、流琉。」

「うん、分かった……………」

「兄様っ、私は別に……………」

「別に否定することないだろ。お前達ぐらいの年齢の子供なら当然だ。」

零は顔を赤くしている流琉をフォローしたつもりだったのだが、子供という言葉に反応して不機嫌そうな顔になる流琉。ピンクの髪の少女も同様だ。

「前から言ってますけど、私は子供じゃあ、ありません。」

「そつだよ。ぼくも、もう子供じゃないよ。」

やや、上がり調子の声で言う季衣と流琉。

「お前らは子供だ。大体、二十以上年が離れてるんだから子供と言われても仕方ないだろ。八十の婆から見れば六十のおばさんは子供なのと同じだ。」

「それは違うっ！！」

シンクロ率百パーセントでそう言う季衣と流琉。

「はあ、まだ信じてなかったのかお前ら。」

「当然だよっ！！にいちやんが三十過ぎてるなんて、信じられる訳ないよっ！！」

「私もそれは信じられません。どう見ても二十いってるかいってないかの若者にしか見えません。」

「だからそれは、俺が「童顔じゃないっ！！！」……………」

言おうとしていた言葉を言う前に否定されて黙り込む零。

「兄様、そのどう考えても無理がある理由は理由になっていません。」

「それでにいちやんは、本当は何歳なの？」

「本当も何も嘘をついていないんだがな。二十歳だとも言えは満足するのか？」

「「はい(うん)っ!」」

これまた見事なシンクロ率で答える二人に拍手をする零。

「もう……ふざけないで下さい……」

「いや、ついやってしまった。それにしてもどうしたもんかなあ。
俺は二十歳だって言ってるやりたいところだが嘘を教えるのもなあ・
・・どうする?」

「ぼくたちに聞かないでよ。」

「まあ、前にも言ったが、別に信じて貰う必要もないしな、好きな
年齢にしとけ。」

(くっ、なんか……)

(また、負けた気が……)

二度目の敗北感を味わった季衣と流琉だった。

「ここが、新しく住む町か……」

「住むとは言ってもすぐに離れることになるかもしれないけどな。」

「出発前に話してくれた時から思ってたんだけど、本当に董卓さんが危機的状況になったりするんですか？私はそうなる確率は低いと思うんですが。」

零は出発する前日に事情を二人に話していたのだ。勿論、詳しく話した訳ではない。

二人に話したのは形だけだ。

董卓の親に昔、娘を頼まれたこと。そしてそれを自分は一回だけという条件で引き受けたこと。

昔、董卓の親である董君雅の弟子だった事は教えていない。それだけだと董卓や賈馱とあまり変わらないと思うだろう。

その通りだ。

零はどうゆう経緯で弟子になったとか、何で董君雅の死に際に居合わせていたとか、詳しいことは誰であろうと話す気はない。それは娘である董卓も例外ではないという事だ。

「何でならないと思うんだ？」

「だって、董卓さんが今住んでいるのはあの洛陽ですよ？董卓さんは実質、他の諸侯よりも頭一個出たってことです。そんな人が危機に陥るなんて事はそうないと思います。」

「確かにな。董卓は他の諸侯たちよりも力は上になっただろう。」

だが、と零は続ける。

「それが逆に董卓を追い詰めることになるんだ。」

「どういうことですか？」

「世の中には他人の成功を妬む奴が多いってことだ。」

「???」

零の言ってることの意味が分からないらしく、小首を傾げる流琉。

「流琉は、自分が座りたいと思ってる席が他人に先を越されたらどうすると、思う？」

「う~~~~ん……その人と話してどいてもらうか、力ずくでとかす……あっ！」

「そういうことだ。」

「つまり、自分より偉くなった人を倒そうとするって事ですか。」

「ああ、だから中途半端に力を持った董卓は逆に危険な状況にいるってことだ。だから、俺もすぐに駆けつけられる場所に居る必要がある。」

「兄様がすぐに駆けつけられる所にいれば、董卓さんも安心ですね。」

納得した流琉を見て満足そうにする零。

~~~~~

何か後ろから視線を感じた。なんだ？と、零はその正体を確かめる為に腰を捻って後ろを見る。

そこには零と流琉が話している間、置いてけぼりくらった季衣がいた。その顔は頬を膨らませて不機嫌さを表している。

「ほったらかしにしたのは悪かったが、そんな拗ねるなつて。」

「別に拗ねてないもん……………」

季衣はそんな無理のある強がりをする。

「別に季衣のことを忘れてた訳じゃない。機嫌、直してくれないか？」

肩にも届かない季衣の頭を撫でながら言う零。季衣の顔がほんのりピンクに変わっていき、それを羨ましそうに見つめる流琉。

「じゃあ、ぼくの行きたい所に行っていていい……………」

「ああ、いいぜ。金は少し余裕があるし、好きなもの食っていいぞ。」

「もう、ぼくだっていつも食えることを考えてる訳じゃないよ？」

「じゃあ、行かないのか？」

「……………行く……………」

「だろ？じゃあ行くか。ほら流琉も。」

そう言つて流琉の手を引く零。

「あつ、はい……」

二人揃つて顔を赤くしている。理由は聞くまでもないだろう。当然の本人が自分のせいだと気付かないのはいつも通りだ。

「忙しくなる前に楽しんでおこうぜ。」

その判断は正しい。

乱世はすぐそこに迫っているのだから。



## 乱世一歩手前（後書き）

最近、作業中に聞く曲がなくなってきたんですが、何かおすすめの曲とかありませんか？  
良い曲があつたら教えて下さい。

## 戦いの前（前書き）

四章突入です。

董卓連合は赤壁と並んで好きな所なので気合入れて書きます。

## 戦いの前

「やっぱり、こうなっ たわね。」

洛陽の馬鹿みたいにデカい城の一室で賈駆はポツリと呟いた。やっぱり、ということは予想されていた事なのだろう。だが、できれば当たってほしくなかった予想のようで、賈駆は眉間に皺を寄せている。

普段から気の抜いた顔をしていないため、いつも通りとも言える。普段、賈駆はどれだけ苦労しているのだろう。

「来てしもうたか~~~~」

「詠ちゃん……………」

「大丈夫よ。絶対に月はぼくが守るから。」

「賈駆っちも、あんま無理はしないほうがええで~~~~」

軽い口調で喋る張遼。しかし、決して今の状況を樂觀視している訳ではない。

樂觀視できる訳がない。

……………

今、自分たちを倒すために洛陽も除いた、全ての諸侯が連合を組んでいるのだから。

「反董卓連合やったか？まったく、みんな暇やな~~~~」  
「うちらは望んで今の立場にいる訳やないっちゅうのに。勘弁してほしいわ~~~~」

洛陽に呼ばれた董卓は着いて一ヶ月もしない内に洛陽の実験を握った。と言っても、狙ってそうなったわけではない。

董卓が洛陽に着いた時にはもうそうなる負えない状況になっていたのだ。黄巾党の騒ぎが静まった後、朝廷の中では壮絶な権力争いが行われたらしく、最早国政を出来る状況ではなくなっていたのだ。主だった上の人物はほとんど死んでおり、生きている人間も皆、再起不能になっていた。

全員が他の者を殺して自分が、と考えた結果だろう。

そんな最早壊滅寸前の所まで来ていた洛陽を見て、見過ごすわけにはいかないと、董卓は洛陽を復興させる為に全力を尽くしたのだ。だが、復興させたら、そこでさようなら、という訳にもいかない。それを維持しなくては、また元の状態に逆戻りしてしまうからだ。

「ぼくたちがやらなきゃいけなかった事をしただけなのに。」

「まあ、かかってくるなら戦うまでやけどな。」

「それはそうだけど、どうやって倒すかが問題よね。数では向こうが圧倒的に多い訳だし。」

「やっぱ、虎牢関と泗水関で持ちこたえて、相手の兵糧切れを狙うしかないんじゃないか？」

「なにっ！？私に亀のように引きこもっていると言うのか！！」

董卓の後ろに控えていた銀髪の髪の少女が怒鳴る。

「仕方ないでしょ。ぼくたちと連合軍じゃ、何倍も数が違うんだから。」

「そんなものはこの私が蹴散らしてみせるっ！！」

「あんたが戦いたいのは分かるけど、華雄。あんたの私情で月を危険に晒す訳にはいかんやろ？」

「むっ、董卓様を……………」

「そうや。あんたやうちが我慢すれば、その分月を助けられる確率が上がるんや。だから今回は我慢しよう？」

「董卓様の為と言っなら仕方がない……………」

不本意ではあるようだが、納得はしてくれたらしい華雄を見て、賈馱と張遼はホッと胸を撫でおろす。

「じゃあ、できるだけ長く関に立て籠もって敵の兵糧切れを狙うって事でいいわね？」

「で、誰にどの関を守らせるんや？」

「そうね……………」

霞と華雄は泗水関をお願い。虎牢関は恋に守らせるわ。」

「……………恋……………戦わない……………？」

どこか愛玩動物を思わせるぼーっとした少女、飛將軍呂布は不思議そうな顔をする。

味方の中で一番強い自分が奥の関で待機というのが不思議なのだろう。

「恋には体力を温存してもらって、追撃してくる連合軍の鼻を叩いてもらうわ。謂わば切り札よ。」

「そうやで。心配せんでも恋にはたっぷり働いてもらうから安心せい。」

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

呂布はコクリと頷く。

「じゃあ、うちと華雄は泗水関で出来るだけ粘って、退却つちゅう事でいいんやな？」

「ええ、頼んだわよ。」

「任しとき。」

「わたしに掛ければ連合軍など一捻りしてくれるわっ！！！」

華雄はそう言つと部屋から出て行く。戦う準備をしに行ったのだらう。

「・・・・・・・・お願いね、霞。」

「ああ、華雄の馬鹿はうちが絶対止めるわ。賈馱っちは月の事だけ考えときや。」

「・・・・・・・・もしもの時の準備も、一応しときや。」

「！？！？・・・・・・・・ありがとう」

「いまさら水臭いで。それにうちかて死ぬつもりはないで。さて、うちも祭りの準備してくるわ。」

最後まで深刻な雰囲気を出さないで霞は部屋から出て行った。

「詠ちゃん……みんな大丈夫かな……？」

「大丈夫よ。霞は頭が良くて武も相当なもの、華雄だって強さは本物よ。」

連合軍なんて返り討ちにしてくれるわよ。」

嘘だ、董卓はすぐにそのことを理解した。

確かに張遼も華雄も一騎当千の武将だが、それでも今回は元の戦力差があり過ぎる。今のままじゃ負けるということは皆分かっている。だからこそ、張遼は賈馱に逃げる準備をしておくように言ったのだ。それでも、自分を安心させる為に嘘をついているのは分かってるから。

「うん、そうだね。」

自分はみんなを信じるべきだ。

「月……詠……だいじょうぶ……」

いつの間にかすぐ隣に立っていた呂布に少し驚く董卓。

「みんな……恋が守る……敵……倒す……」

「恋ちゃん……」

「ありがとう、恋。」

これほど心強い事があるだろうか。  
天下無双と言われる呂布が自分たちを守ると言っている。それはどんな多くの兵士よりも頼もしい存在だ。なのに自分は情けなく弱気になってる。

董卓はそんな自分に嫌気が差したが、ここで自虐的になっても仕方がない。

そんな事をしているくらいなら、自分に出来ることをするべきだ。

「絶対に勝とう。みんな一緒に。」

「当然でしょ。」

「ん・・・」

反董卓連合軍。

言葉にして言えば聞こえは良いが、実際はそんなに良いものではない。

その実態は互いに互いの手の内を探り、自分たちが手柄を手にするために他の諸侯を出し抜く方法を考えていた。



そもそも、この連合は袁紹が董卓が暴政を強いていると、各地の諸侯に呼びかけて結成されたものだが、誰も袁紹に従う気はなく、むしろどうやって袁紹を利用するかを考えている。

そんな連合とも言えない集団なのだ。

この負けるはずのない戦いの蜜を手に入れる為に参加しただけ。心の底から洛陽の為だけを考えて参加した人間などほんの一握りだ。

「いよいよだね。絶対に負けられない、董卓さんに苦しめられてる人たちの為にも。」

そしてこれはそんな一握りの人間、劉備とその仲間たちの進軍前夜の話。

「はい。必ずや桃香様の期待に応えてみせます。」

「鈴鈴もがんばるのだー！！！」

如何にも堅物の、学校の風紀委員が似合いそうな少女と元気な子供という言葉がぴったりの少女が元気よく返事する。

この二人が後に五虎将と呼ばれる関羽と張飛だ。

「愛紗、今からそんな肩に力を入れていては、いざという時に力が出んぞ。」

少しからかうような感じで言ったのは、昔零に会ったこともある、趙雲だ。この場に居るという事は仕えるべき主を見つけたということなのだろう。

「そんなへまはせん。星こそもう少し気を引き締めたらどうだ。」

「おや、これは心外な。それでも気を引き締めているつもりなのだが。」

「どこがだっ！！お前はいつも飄々としていて気合が足りんっ！！」

「星はこうなのはいつもなのだ。だから言っても無駄なのだ。愛紗。」

「むっっ……」

「そういうことだ。」

「自分で言うなっ！！！！」

結果的に緊張していた空気が解れているのは趙雲の狙い通りなのだろう。

「気を引き締めているか、気を引き締めてないかは置いて、私達は先陣になってしまった訳ですから、なんとかしませんとね。」

「朱里ちゃん、やっぱり華雄さんを引つ張り出すしかないんじゃないかな？」

ランドセルが似合う見た目の二人の少女が作戦について話し出す。この二人が伏竜鳳凰と言われる諸葛亮と鳳統だ。

「そうだね、雛里ちゃん。それが一番手っ取り早いしね。」

「しかしそんなに上手くいくのか？」

「大丈夫だと思います。華雄さんは自らの武に絶対の自信を持っていますから、そこを突けば出てくると思います。」

「あまりそのやり方はしたくはないのだが……………」

関羽は気乗りしないらしく難しい顔をしている。同じ武を志す者としてあまりしたくないのだろう。

「私も好んでするわけではありません。しかし、泗水関を突破する為にはどうしても向こうから出て来てもらわないといけません。」

「愛紗よ。気持ちは分かるが、ここはこうするしかない。」

「仕方ないか……………」

「後は私達だけで華雄さんを止められるかなんですが……………」

諸葛亮の言葉に皆一様に難しい顔をする。

反董卓連合とは多くの諸侯が集まってできた、大規模な集団だ。それは裏を返せば一人一人の諸侯の兵力は多くないことを示している。そして、その連合の中でも劉備たちは一際兵力が少ない。

いくら関に立て籠もられたら勝ち目がないとは言っても、出てきた敵に自分たちが蹴散らされては本末転倒だ。

その可能性を樂觀視できないため、これは一種の賭けのような作戦なのだ。

「でも、いまさら悩んでも仕方ないんじゃない？どっちにしろやるしかないんだから。」

「そう……………ですね……………悩んだ所で見方が増える訳じゃないです

し、全力を尽くす事だ考えましょう。」

「そんなこともないんじゃない？」

！？！？、突然の聞きなれぬ声に全員声のした方を見る。

「貴方は、孫策さんっ！？」

「あら、覚えていてくれたのね。劉備。」

「勿論ですよ。あの会議の中でも一際存在感がありましたから。」

「いい意味ということで受け取っておくわ。」

「それで、どんな用で来たんですか、孫策さん？」

どうでもいい話が始まりそうなので、諸葛亮が話を切り出す。

「貴方たち、今自分たちの戦力を不安に思っているでしょう？」

「何故それをつ！？」

「そんなの少し考えれば分かるわよ、馬鹿じゃないんだから。それでね、私たちが貴方たちと一緒に戦ってあげようか？って話。」

「本当ですかっ！？孫策さんっ！！」

「何が目的ですか、孫策さん？」

素直に喜ぶ劉備とは対照的に孫策の目的を探るように目を細める諸

葛亮。

「ただの善意よ……って言っても信じて貰えそうもないわね。いいわ、教えてあげる。私が今、袁術の客将っていう立場なのは知ってるわよね？」

「はい。先代の孫堅さんが死んで弱体化した呉を袁術さんが手に入れたことで、客将になったとか。」

「そう、今では袁術の命令を聞く毎日よ。」

孫策は憎々しげに話す。

「でも、私達はいつまでも客将でいる気はないわ。必ず袁術を倒して独立してみせる。」

「……つまり、その時の為に味方を作っておきたいという事ですか。」

「そうよ、物分かりが早くて助かるわ。」

「確かに……そういうことなら……」

諸葛亮は顎に手を当てて考え込む。

「納得してくれた？善意だけではないけど、悪い話ではないはずよ。貴方たちは今の危機的状況を抜け出し、私達は後お味方を作る。承諾してくれるかしら？」

「受けるべきだと思います。現状、私達の戦力で泗水関を突破する

のは厳しいですし、友好関係を作るのは私達にとっても悪い事ではありません。」

「私は朱里の賛成だ。」

「私も朱里ちゃんに賛成です。」

「私は桃香様の決定に従う。」

「鈴鈴もおねちゃんに従うのだ。」

「結局、決めるのは劉備、貴方ってことね。どうするの?」

劉備はしっかりと孫策の眼を見て口を開く。

「受けます。孫策さんは悪い人ではないと思いますし、一刻も早く洛陽の人たちを助け出す為にも。」

「決まり・・・ね。」

「ええ、お願いします。」

「それじゃあ、私はもう行くわ。」

「あつ、ちょっと待って下さい。」

天幕から出ていこうとする孫策を劉備が引き留める。

「なにかしら?」

「どうして私達にしたんですか？私達はまだ、弱小なのに……」

「そうね……一つはあんまり大きな勢力だ断られる可能性がある  
ったから、貴方たちなら今の状況もあるし高確率で手を組めると思  
ったからのよ。」

後は……」

「後は……？」

「勘よ。」

それじゃあね、と言い残すと今度こそ天幕を出て行った。





## 戦いの前（後書き）

初めて零もちびっ子二人も出ませんでしたね。  
暫く三人以外で話が進むと思います。

開戦（前書き）

う~~~~ん……………

どう話を進めよう……………  
どうぞ。

## 開戦

張遼は泗水関の屋上に当たる場所に経ち、見張り番をしていた。泗水関はかなり大きな関なので、張遼が見ている景色は絶景だ。この時代にカメラという物があつたなら写真に事だろう。

視線の先に何十万という軍が此方に向かって行軍しているなら尚更だ。

張遼はこれから起こるであろう決戦を思い浮かべながら、精神を統一していた。

「いよいよ……やな……」

「ふんっ！！蹴散らしてくれるわ。」

今から始まる戦いが待ちきれない、と言った様子で華雄は自分の得物を握りしめる。

「はあ……華雄のその性格が羨ましいわ。」

「それは、褒めているのか、馬鹿にしているのか、どっちなんだ？」

「う……ん……どっちも。」

「どうした、お前らしくないぞ。今更、何をしたところで戦いを回避できる訳ではない。ならいっそ、楽しんだ方が良いと思わんか？」

「このほぼ勝ち目のない勝負をか？」

「そうだ。だが、勝ち目がないかどうかは、私たちがこれから決め

る事だ。私が無理やりでも勝ちの目というものを引っ張って来てやるぞ。」

きつぱりと言い切る華雄。その目に恐れや不安は無く、本気で言っているという事が分かる。

張遼はそんな華雄を見て小さく笑った。

「ほんとに、馬鹿やな~~~~」

「なんだとっ！！お前は勝つ気がないのか！！」

「ああ、違う違う。あんたの事やない。うちの事や。

うちはさっきまで、時間を稼いで月と賈馱っちを逃がそうと考えておった。」

「ふんっ、そんな弱気で董卓様が守れるか。」

「そう、最初から負けるつもりでいるんじゃあ、時間を稼ぐ事すらできる訳あらへん。相手を食うつもりでいかんとな。」

「最初から私はそのつもりだ。」

当然のように言う華雄を見て霞は、やっぱあんた凄いわ、と改めて思う。

「うちも覚悟が出来たで。時間稼ぎなんてちやちな事はもう考えん。連合軍の奴らをぶっ倒して、堂々と胸張って帰るわ。」

目に炎を灯して、笑う霞を見て華雄はこう言った。

「当然だ。」

曹操は董卓連合の後方に構えていた。

役割としてはいざという時の為の援軍なのだが、実際は待機しているだけの暇な部隊に過ぎない。中央の舞台が瓦解するなんて事はありえないからだ。

反董卓連合の総人数は三十万人。対して董卓軍は約、五万人。そのうえ泗水関にいる兵の人数は多くて半分、およそ二万五千人。負けるはずがない。

いくら、泗水関が鉄壁を誇る関だとしても兵力があまりに違い過ぎる。

最初から負けが決まっている戦い。

曹操は僅かだが董卓軍の人間に同情した。

「しかし、つまらないものね。結果が分かり切っている勝負というもの。」

「お気持ちは分かりますが、この連合に参加しなかったら、時代の波に置いてきぼり食らってしまいます。」

「分かっているわよ。だから確証もない、袁紹の書状に同意したんだから。」

「やはり、嘘だと思いますか、華琳様。」

「それは、そうでしょ。温和で民を思う事で有名な董卓が暴政を働いたなんて考えられないわ。大方、麗華が董卓を妬んででっち上げたんでしょう。」

でも、と曹操は続ける。

「参加しない訳にもいかないから質が悪いのよね。参加しなかったら、連合軍が勝利した時に立場が悪くなるし、負けた場合も何故すぐに朝廷の援軍に來なかつたのか、っていう話になる。」

麗華にしては、良くできた作戦だわ。」

「しかし、董卓たちには同情しますね。」

「そうね。これじゃあ勝ち目はほぼ零だもの。氣になる事ならあるんだけど。」

「氣になる事とは?」

「呂布よ。天下無双の武人、それが董卓の配下にいるのよ。いずれは戦うことになるでしょう。」

「私としては一度手合せしたいです。」

夏侯惇が言う。

「確か泗水関を守っているのは神速の張遼と孟將華雄だったわよね?」

「そうです。どちらも名の通った武人なだけ、失われるのが惜しいですね。」

「見届けるとしましょう。この状況でどう抵抗するのかを……」

曹操はそう言つと戦場になるであろう関の前の地を見つめた。

劉備軍と孫策軍は泗水関の門からそう遠くない場所に陣を敷いていた。

目の前には固く門を閉ざした泗水関。

「少しは期待してたんだけどな……」

「何がですか、孫策さん？」

残念そうな声を出している孫策に劉備が質問する。

「いや、華雄なら私が居ると分かれば、一も二も無く跳び出してくるかと思つたのよ。」

「流石にそれは無いと思いますけど……華雄さんも一人の將軍な訳ですし。」

「確かに他の人間なら出てこないと思うけど、私と華雄はちょっとした因縁があるのよ。」

「因縁？」

「私の母、孫堅は昔華雄を完膚泣きまでに叩き潰した事があるの。」

「そうだったんですか……確かにそれだったら出て来てもおかしくありませんね。」

「残念ながら予想は外れちゃったみたいだけどね。」

チツと、孫策は舌打ちした。

「まあ、することは変わらないわ。華雄を挑発する為に罵詈雑言を言い続ける。それでいいわね？」

「はい。」

孫策と劉備の合図と共に兵士たちが泗水関（華雄）に向かって、腰抜けだの臆病者だの言い出す。

自分の武に自信を持っている人間にとっては耐えがたいものだろう。それでも、賢い武将なら唇を噛んで我慢するのだが、今、泗水関にいるのは華雄。

当然、

「離せ張遼！！！！奴らの首を刎ねてやらんと気が済まん！！！！」

こうなる。



「落ち着けや、華雄。あんな見え見えの挑発や。これで、出てつたらあいつらの思っ壺や！！」

「だとしても、ここまで馬鹿にされて黙っていられるか！！！」

霞を振り払い、武器を取ろうとする華雄。

「月の為やっ！！」

霞の言葉に華雄はピタリと立ち止る。

「それに、勝つ為にはこの場面で、出ていくのは得策やない。勝つんやろ？だったら、ここは我慢や。」

華雄は体を震わせて拳を強く握る。そしてその拳を孫策たちのいる方の壁に叩きつけた。

ドガァン！！、という音を立てて岩で出来た壁は吹き飛んだ。

孫策軍と劉備軍は突然降ってきた、元関の壁だった物を見て動揺した。口汚く華雄を罵っていた者達は皆青い顔をしている。

無理もない。

岩が降ってくる前に聞こえた叫び声が華雄のものである事はサルにでも分かる。勿論、岩を降らしたのが誰かも。

「あっちゃあ~~~~なんか怒ったみたいね。」

「孫策さん……今更だと思います。」

劉備は孫策のまるで他人事のような言い方に溜息を着いた。

「そうだけども~~~~っていつか作戦通りではあるんだけど、問題は怒っただけで、出てくる様子が無いって事よね。」

「張遼さんが止めたんでしょうか？」

「おそらくね。それで、行き場のない怒りを壁に叩きつけたって所かしら。」

「出てこないとなると、どうしましょうか？」

「仕方ないでしょ。一時撤退して、作戦を練り直しましょう。」

「仕方ないですね。」

孫策と劉備は撤退の命令を出すと自らも馬に乗って泗水関に背を向ける。

その瞬間、ギギイイ、という重い金属音が響いた。

孫策はその音に反応して振り返る。

すると、そこには怒の炎を燃やしている華雄が居た。

「お前達、私に続け――――！！！！！！！！！！」

華雄の掛け声を合図に董卓軍は走り出す。

その様子を上から見ていた霞は笑みを浮かべながらポツリと呟いた。

「やつぱ、礼はたつぷりしてやらんな。」

## 開戦（後書き）

やっぱり華雄さんが突撃しないなんてありえませんかよね。

突撃してこそその華雄さんです。

## 開戦 二（前書き）

なんだか、話が駆け足になってるような気がします。ご了承ください。

そうでもないといつ終わるか分からないので。

## 開戦 二

泗水関から打って出た董卓軍は孫策、劉備軍に大打撃を与えた。突如現れた董卓軍に対応できなかったのだ。

孫策、劉備軍は体制を立て直すのが精一杯と言った所で、今はなんとか撤退し、中央に居た袁紹、袁術軍を盾に防いでいる形だ。代わりに自分たちの所に来ると思っていなかった袁紹、袁術軍は孫策、劉備軍と同じく多くの被害を受けることになったが。

（しかし、張遼も人が悪い。さっさと言ってくれれば、私も壁を壊したりしなかったというのに。）

華雄は次々と敵を打ち取って行く自軍を見ながら先程のやり取りを思い出す。

ドガァァン！！！！

「くそっ！我慢するしかないのか！？」

雄たけびを上げて壁を粉碎した華雄は声を荒げて悪態を着く。行き場のない怒りを吐き出すように。

「華雄、よく我慢したな。」

「我慢など出来ていない！！今も自分の体を押さえるので必死だ。」

華雄は齒を食いしばり、拳を握りしめて跳び出そうとする体を押さえる。

「悪かったな華雄。あんな反則みたいな言葉でお前を止めて。」

「いや、感謝している。お前が董卓様の名前を出していただければ、私は今頃、奴らの中に突撃して多くの仲間を失っていただろう。正直、今も出て行つて戦いたい気持ちは同じだが、董卓様の為と思えば数日は持つだろう。我慢してみせるさ。」

壁に寄りかかり、自分に言い聞かせるように言う華雄を見て、ニヤツと笑う張遼。

「そんな数日も待つ必要はないで。」

「なに・・・？どういうことだ？」

「あと少ししたら、攻めるべき絶好の機会がくるっちゅうことや。」

笑みを崩さないまま、張遼は目で連合軍を指し示す。

華雄は張遼の伝えようとしていることが理解できずに、頭に？マークを浮かべている。

「つまりこういうことや、今敵の奴らはうちらが挑発には乗ってこないと思つとる。華雄を挑発しても出てきいひんかったからな。だ

から、その隙を突くんや。」

「油断した所を叩くという事か？」

「まあ、そういうこっちゃ。もうすぐあいつらは作戦を立て直す為  
に後退するやろ、その瞬間にこっちから打って出る。」

「そういうことはもっと早く言え、そうすれば手を痛めることもな  
かったというのに。」

華雄は満面の笑みを浮かべる。出られる事が嬉しくて仕方ないのだ  
ろ。

「悪かったな、あそこで華雄が我慢できるかどうか見ておきたかつ  
たんや。」

「もし、我慢できなかったら？」

「そんな時はうちも地獄への道行に付き合ったで。止められんかった  
うちにも責任はあるわけやしな。」

そんな事を簡単に言う張遼を見て、華雄は笑った。

「まったく、私に真名が無いのが残念だ。あつたのなら、今すぐお  
前に託したというのに。」

「残念なのはうちも同じやで。」

真名を預けられないのに真名を受け取る訳にはいかない、という華  
雄の拘りに対して霞は残念そうに言った。



「良かったんだか、悪かったんだか……」

孫策は無意識の内にそう呟いた。

目の前に映るのはされるがままになっている自軍、正確には袁紹、袁術の軍だ。孫策、劉備の軍は既に撤退を完了させており、戦闘からは離脱している。

今は將軍クラスの人間だけが戦場に残っている形だ。

「どうしますか？孫策さん……」

関羽や趙雲に守られている状態の劉備は、どうしたらいいかわからない、と言った様子で尋ねる。

「そうね……私としては袁術の戦力が削られていくのは喜ばしい事なんだけど、このまま大将である袁紹が殺されるのは困るのよね。そうなったら、連合軍の負けという事になる。」

「助けるってことですか？」

「いえ、暫く放置しましょう。」

「それだと、袁紹さんがやられちゃうんじゃないや……?」

「多分、そうはならないわ。」

多分ではなく、確信している顔で言う孫策を見て劉備は不思議に思う。

「何でそう思うんですか?」

「袁紹がやられて困るのは私達だけじゃないって事よ。」

袁紹は連合軍の後方に目を向けながら小さく笑った。

連合軍後方では一つの軍が戦う準備を整えていた。

「準備できました、曹操様。」

「そう、じゃあ行くわよ。」

報告に来た兵士に声だけで返事をする、曹操は馬に跨り、それに続いて半分程の兵士達も騎乗する。全員で行かない理由は大人数では動きが鈍くなってしまうからだ。

自分たちが着く頃には袁紹は死んでいたでは笑い話にもならない。

それを回避する為の少数精鋭だ。

「しかし、私達が出ることになるとは思いませんでしたね。」

未だに驚きが隠せない様子で夏侯淵が言う。

「そうね、あの戦力差でここまでやるなんて、驚嘆に値するわ。」

絶対にはずれていた自分達の出番。しかし実際には自分たちが出なくてはいけない状況になっている。

圧倒的に不利な状況をもとめせずに戦う董卓軍を曹操は心の中で称賛した。

「（この戦い、思ったよりも辛い物になるかもね……）  
そう来なくちゃ、面白くないわ。」

味方がピンチに陥っているというのに、本当に楽しそうな顔で曹操はそう言った。強敵の存在を喜ぶように。

「春蘭、秋蘭、期待してるわよ。」

「はっ！」「」

勢いに乗る董卓軍に最大の障害が立ちふさがろうしていた。

華雄隊に続いて出た張遼は軍の後方に居た。

戦況を冷静に観察してこれからどうするべきかを考えていたのだ。

「戦況は我が軍が有利です。このまま攻めきるべきかと。」

「そうか………」

張遼は伝達係の兵士に返事だけすると、鋭い眼で戦場を見る。

確かに伝達係の兵士の言うとおり、戦況は自分たちが有利に進めている。

・

今は、

張遼はこう考えているのだ。いつまでこの状況が続くのか……と。いくら勢いに乗っているとはいえ、良い流というものはいつか勢いを失う。そうなったら、元々兵力の少ない自分たちの軍は一息に飲み込まれてしまう。

肝心なのは引き際だ。

敵に反撃される前に撤退するタイミング。

張遼はそれを必死に見極めようとしていた。

（まだ、いけるか？それとも、そろそろ引いた方がいいんか……？）

今の有利な戦況のせいではなかなか決断が下せない張遼。

だが、決断を下すのに十分な理由が彼女の目の前に現れた。

大きく書かれた『魏』の文字が現れたのだ。

それを見た張遼はすぐに伝達の兵士に撤退を伝えてくるように言う。

その表情に焦りはないが、緊張はある。

「（出てきおったか曹操。あいつは兵士が多いだけの袁紹や袁術とは違うからな、下手に戦わん方がいい。）  
悪いけど、引かせてもらうで。」

こうして、一回目の戦闘は終わりを迎えた。



## 開戦 二（後書き）

ちょっと、終わり方無理やりでしたかね？

でも、上手い纏め方が思い浮かば無ったので、こんな感じで終わらせました。

### 開戦 三（前書き）

今までの文章を自分で読み直してみるとなかなか酷かったorz  
けど、一回話を中断して直すとかはしないのでご安心してください。  
えっ、めんどくさいだけだろ？ H A H A H A 聞こえない聞こえない。  
どっど。



### 開戦 三

「まさか逃げられるとはね……………」

後方から前線へとやってきた曹操は何とも言えない虚<sup>むな</sup>しさに襲われていた。

それも仕方のない事だろう。強敵と一戦交えるつもりで馬をとばして来たというのに、肝心の敵は一目散に逃げてしまったのだから。これでは不完全燃焼もいいところだ。

「やってくれたわね……………この私をコケにするなんて……………」

笑みを浮かべている顔に反して曹操の手はギリギリと音を立てる。

「しかし、作戦としては見事です。上手く戦いを進められたからといって調子に乗ることは無く、きちんと引き際を見極めて撤退する。やはり張遼はかなりの切れ者のようですね。」

「確かにそうだが、華琳様をコケにした事は許せん!!」

「まあ、姉者の言う事も、もつともではある。」

「このままじゃ済まさい。絶対に泗水関から引きずり出してやるわ。」

翌日、曹操の決意はまたも裏切られることになった。

連合軍は一日の休息を取って泗水関攻略に向かう事になった。前方

を務めるのは立候補した曹操だ。

袁紹や袁術は自分の部隊が手酷くやられた為、喜んで曹操に前方を任した。他の諸侯はやれるものならやってみろ、と言った様子だ。

孫策、劉備は様子見をすることにして、軍の中央に居る。

そして、泗水関を突破する為の策を練った曹操は泗水関の門前にやってきたのだが、曹操はもちろん他の諸侯も開いた口が閉じない状態になっていた。

「なんなのこれは……？」

泗水関の門がどうぞご自由に、と開いていたのだ。

曹操の手がプルプルと震える。ギリギリという歯ぎしりの音もセツトで。

「どこまでも戦う気はないってことかしら……いいわ、こうなったら意地でも戦ってもらわよ……」

その顔にあった笑顔は不気味さを纏っていた。

一方、泗水関を捨てた張遼たちは虎牢関への道程で座り込んでいた。

「本当に良かったのか？ 泗水関を捨ててしまつて。」

「まあ、良いとはいえんけど、あのまま残って戦うよりは良いやろ。」

「私としてはまだ納得いかんがなつ。」

と、言いながら華雄は馬上だというのに手綱から手を離し腕を組む。

「けど、あそこで曹操と戦っても良い事ないで？うちらだけじゃあ勝てへんやろし。」

「それが納得いかんと言っているのだ！！やってみなければ分からんだろう！！」

「確かに華雄の言うとおり、勝てる可能性はある。」

「だったらっ……………」

ただし、と張遼は華雄の言葉を遮る。

「うちらもただでは済まん。そしたら残りの敵は全て恋と賈馱っち、それと音々が引き受ける事になる。いくら恋が強いゆつても將軍が一人はきつい。だったら、うちらと合流して戦った方がええ。華雄もそう思っやろ？」

「それは……………そうだが……………」

まだ納得しない華雄に張遼は溜息をつく。

「はあ……………まあ、またすぐに戦う事に嫌でもなるんやし、その時思っ存分戦ったらええやんか。」

「仕方がないか・・・だが、次も前線は私が貰うぞ。」

「そんならいなら構へんで。うちは強い奴と戦えればそれでいいし。」

「よしっ！！決まりだ。」

ようやく納得した華雄に張遼はまた一つ溜息をつく。

ふと、張遼は今この状況で思い出すにはあまりに相応しくない出来事を思い出す。頭の中に浮かび上がる一人の青年の顔。

張遼は何故今思い浮かんだのかに疑問を持ったが、気にしないことにした。

（そっぴいあのにいちゃん、今頃どうしてるんやろな。うちのこの状況じゃまた会えるかも分からんし、それ以前にこの戦いで勝たんとっちはあの世行きや。そしたらあのにいちゃんの言ってた、跳んで喜ぶ事になるって言うのがどういいう意味か分からん。）

そんな今の状況を考えればどうでもいいような事を考えると、張遼はガシガシと頭をかく。

そして、空を見上げて一言。

「死ねんな～～～」



### 開戦 三（後書き）

今回は少ないです。

でもまあ、次からは虎牢関が舞台になるので勘弁してもらいたい。  
そろそろ零たちも出したいですし。

**董卓軍集結（前書き）**

久しぶりの更新です。

なんか色々と忙しくなっちゃって・・・

これから亀更新になるかもしれません。

## 董卓軍集結

此処は虎牢関、泗水関の先にそびえ立つ難攻不落の関だ。唯の異名ではない、本当に一度たりとも破られたことがないのだ。

虎牢関に辿り着くためには泗水関を突破しなければならない。仮に泗水関が破られたとしても、同等かそれ以上の虎牢関が立ちふさが

る。

二つの鉄壁を誇る関。  
難攻不落の異名は泗水関、虎牢関、この二つの関に付けられた異名なのだ。

だが、その異名を終わらせようとかつてない強大な敵が今迫って来ている。

そして運が良くか悪くかそんな時期に、その泗水関、虎牢関の二大巨頭を任されてしまった賈馮は自身が泗水関へと向かわせた少女達の事を想っていた。

「大丈夫かしら、霞と華雄は……………」

「詠……大丈夫……霞も華雄も強い……………」

「恋殿の言うとおりなのですつ、連合軍の奴らなんか霞たちがやられる訳ないのです。」

「そうね……信じる事が今私達がするべき事よね。」

「その通りなのです!!」

董卓軍の軍師であり、呂布専用の参謀でもある陳宮はその小さな体でガッツポーズをとる。



「詠ちゃん・・・あの人は本当に来るのかな・・・？」

「あれだけ大きな事言っておいて来なかったらタダじゃおかないわよ。それに根拠は無いけどきつとあいつは一度言ったことは守るよと思うの。」

「うん、そうだね。」

「いったい誰の事を言っているのです？」

「・・・・・・・・・・？」

事情を知らない呂布と陳宮は二人の会話についていけずに頭に？マークを浮かべて、首を傾げる。

「ああ、話してなかったわね。実は洛陽に来る前にこんな事があつて・・・・・・・・・・」

「なるほど、話は分かりましたが、その男は本当に強いのですか？ちよつと腕がたつくくらいでは来てもあまり意味がないのです。」

零の事を賣馭から聞いた陳宮は最もな疑問を口にする。

「私や月も実際に戦っている所を見た訳じゃないから強いとも弱いとも言えないけど、月のお父さんの弟子なら弱いなんてことはないと思うわ。」

「月殿の父君はそんなに強かったのですか？」

「当時は最強の武将とまで言われていたらしいからね。」

「らしいとは？」

賈馱の言い方に引かかった陳宮は小首を傾げて言う。

「私も月もあの人の事は話に聞いたことしか知らないのよ。まだ私たちが一歳にもなっていない時に死んじゃったから。」

「悪かったのです、月殿……」

知らず知らずの内に触れない方が良い話題にしてしまった事に気づいた陳宮は、申し訳ない気持ちになり、謝る。

「いいんだよ音々（ねね）ちゃん。音々ちゃんは知らなかったんだから。」

董卓は陳宮に、気にしてないから、と言うがその顔にはどこか寂しさを感ぜさせるものがあつた。

「ま、とにかくそういう訳で、あの男が来たら戦力が増えるのは確実よ。多分華雄や霞と同等の実力者だから。」

賈馱は沈んだ空気を直すために半ば無理やり話題を戻す。

「期待する事にするのです。まあ、来なかったとしても恋殿と音々さえ居れば連合軍なんて一捻りですが。」

「……………ん……………がんばる……………」

「無茶はしないでね。音々ちゃんも恋ちゃんも。」

「月の言う通りよ。恋が強いのは知ってるけど一人で無茶するのだけはダメ。分かった……………」

「……………わかった……………」

「仕方がないのです。」

本気で二人だけで何とかするつもりだったのだろう。陳宮はやれやれ、と手を広げ、恋は少しの沈黙の後、コクリと頷いている。無茶かどうか考えていたのだろう。

そんな頼もしすぎる二人を見て賈馱は思わず顔がにやけてしまう。この仲間たちとなら本当に連合軍を簡単に倒せてしまうのではないか、そんな事を考えてしまう。

「ご報告です！！華雄様と張遼様が帰還なされましたっ！！」

息を荒げながら部屋に飛び込んできた兵士を見て賈馱は溜息を着く。

「まったく……………」

本当に頼りになる仲間たちだ…………と。

「面目ありません董卓様。結果として泗水関を取られる羽目になり・  
・・・」

臣下の礼をとりながら謝罪の言葉を言うのは銀髪の髪に筋肉質な体の武将華雄。

内容は泗水関を落とされてしまった事についてだ。  
元々時間を稼ぐ事すら厳しい戦力差でくい止めてこいと言われ、そして結果として時間を稼ぎ、さらには相手の戦力を削ったのだから、充分役目を果たしたといえるのだが、そこで納得しないのが華雄という将だ。

常に不可能とも思われる結果を求め、剣を振るう。  
そして納得する結果を手に入れられなければ自身を責め、手に入ればさらに上を求める。

今回も同じだ。一般的に見れば良いと言える結果、だが彼女はそれ以上求めていた。  
だから謝る。

ただそれだけの事だ。

「あんたは良くやったわよ。充分過ぎる程にね。」

「そうだよ、華雄さん。」

「しかし董卓様・・・・・・」

尚も食い下がろうとする華雄。

どうしても先の結果に満足することはできないのだろう。

「まあ、いいやんか。来る時も話したけど後で挽回すれば。」

軽快な声でそう言う張遼。

その言葉に華雄もそれもそうだ、と納得する。

「それにあいつらも一筋縄でいくような軟な敵でもなかったしな。やっぱあそこで引くのは正解だったと思うで。」

「連合軍の中では誰が脅威だと思った、霞？」

賈馱の質問に霞は少しの間目を瞑り、泗水関での戦いを思い出す。その戦いの中で、油断できない雰囲気纏っていたのは誰か、と。

「そうやなあ……まず曹操やな。実際に戦った訳やないけど、あれは唯者やないと思うで。」

後は孫策と劉備、どっちも兵数はあんま多くないんやけど、優秀な兵がおる。意表を突いた華雄の突撃に耐える程やからな。袁紹と袁術の馬鹿袁共は兵の数は多いけど、質は大したことない。……  
・とまあ、こんな感じや。」

「なるほどね……でも、劉備と孫策には痛手を負わせたんでしょ？」

張遼の言葉を聞いて華雄と呂布以外の者は皆難しい顔をする。

兵数だけでも厄介なのに優秀な将までいるのか、と。

呂布はいつも通りの雰囲気黙っている。

それは理解が出来ていないという訳ではなく、悩む必要などないと

分かっているからだ。

自分が悩んだ所で意味は無いと。自分がやるべきことは何も変わらないと。

そしてその時になれば家族の為にどんな敵も倒すと。

それが自分のすべき事で他の事は任せておけばいいと。

「そうやけど、元々その二人は持ち兵が少ないから、将が無事なら充分脅威っちゅうことや。油断はできへんで。」

「おそらく連合軍の兵力はこっちの五倍って言ったところかしら。

僕たちに虎牢関があることを考えてもまだ、向こうの方が有利……

……  
だとしたら敵が来た時にやるべきことは……。」

賈馱はそこで言葉を切る。

その先の言葉は軍師である自分ではなく実際に戦場に立って命を掛ける者が言つべきだと分かっているから。

「まあ、迎え撃つて死ぬ気で敵の数減らすしかないやろ。」

「当たり前だ!!」

「………がんばる……。」

一瞬で答えを出す三人。

それは単純に自分がそう簡単には死なないという自信もあるだろうが、一番は仲間の為なら自分の命を危険に晒すことも厭いとわないという気持ちだろう。

当たり前だ。

自分の事を第一に考えていたらこんな危険極まりない事をやる訳が

ない。

そして、やるという選択肢を迷わず選んだという事は、三人共そういう人間だということなのだ。

「……………がんばって。私も出ていけたらいいんだけど……………」

賈馱は心底申し訳なさそうにしながら言う。

「ええって、ええって、賈馱っちは虎牢関の中の指揮を執って、うちらが撤退する時に援護してくれれば。」

「私に任せておけ。」

「……………大丈夫。」

「……………ありがとう。全力で援護するわ。」

「それじゃあ、敵さんを迎え撃つ準備をしてくるわ。」

霞はそう言つと部屋から出ていき、それに華雄、呂布陳宮ペアも続く。

あつと言つ間に董卓と賈馱だけになった部屋の中で、賈馱は自分の出来ることは他にないかと考えるのだった。





## 董卓軍集結（後書き）

なんか、月をどこで活躍させたら良いのか分からない。

うっっんどじしゅ………

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0595x/>

---

～ 孤高の狼 ～

2011年11月21日18時57分発行